

青年

森鷗外

青空文庫

壺

小泉純一は芝^{しば}日蔭^{ひかげ}町の宿屋を出て、東京方眼図を片手に人にうるさく問うて、新橋^{ていりゆうば}停車場から上野行の電車に乗った。目まぐるしい須田^{すだちよう}町の乗換も無事に済んだ。さて本郷三丁目^{そでうらかん}で電車を降りて、追分^{おいわけ}から高等学校に附いて右に曲がって、根津^{ねづ}権現^{こんげん}の表坂上にある袖浦^{そでうら}館という下宿屋の前に到着したのは、十月二十何日かの午前八時であつた。此^{ここ}処は道が丁字路になっている。権現前から登つて来る道が、自分の辿^{たど}つて来た道を鉛直に切る^{ところ}処に袖浦館はある。木材にペンキを塗つた、マツチの箱のような擬^{まがい}西洋^{せいよう}造である。入口^{いりぐち}の鴨居^{かもい}の上に、木札が沢山並べて嵌^はめてある。それに下宿人の姓名が書いてある。

純一は立ち留まつて名前を読んで見た。自分の捜^{たず}す大石^{けんたろう}狷太郎という名は上から二三人目に書いてあるので、すぐに見附かつた。赤い^{たすき}襷を十文字に掛けて、上^{あが}り口^{ぐち}の板縁^ぞに雑巾^{うきん}を掛けている十五六の女中が雑巾の手を留めて、「どなたの所^{ところ}へいらつしやるの」と問うた。

「大石さんにお目に掛りたいのだが」

田舎から出て来た純一は、小説で読み覚えた東京詞ことばを使うのである。丁度不慣ふなれな外国語を使うように、一語一語考えて見て口に出すのである。そしてこの返事の無難に出来たのが、心中で嬉しかった。

雑巾つかを掴んで突つ立つた、ませた、おちやつぴいな小女こおんなの目に映じたのは、色の白い、卵かえから孵ふつたばかりの雛ひよこのような目をしている青年である。薩摩さつま緋あわせの袴はかまを穿はいて、同じ緋の袷羽織あわ織を着ている。被物かぶりものは柔かい茶褐ちやかつの帽子で、足には紺足袋に薩摩下駄さつまげを引つ掛けている。当あたり前の書生の風俗ではあるが、何から何まで新しい。これで昨夕ゆうべ始めて新橋に着いた田舎者とは誰にも見えない。小女は親しげに純一を見て、こう云った。

「大石さんの所ところへいらつしつたの。あなた今時分いらつしつたつて駄目よ。あの方は十時にならなくつちやあ起きていらつしやらないのですもの。ですから、いつでも御飯は朝あさとお午ひるとが一しよになるの。お帰りが二時になったり、三時になったりして、それからお休みになると、一日寐ねていらつしつてよ」

「それじゃあ、少し散歩をしてから、又来るよ」

「ええ。それが好うございます」

純一は権現前の坂の方へ向いて歩き出した。二三歩すると袂たもとから方眼図の小さく折ったのを出して、見ながら歩くのである。自分の来た道では、官員らしい、洋服の男や、角帽の学生や、白い二本筋の帽を被った高等学校の生徒や、小学校へ出る子供や、女学生なんぞが、ぞろぞろと本郷とおりの通の方へ出るのに擦れ違すったが、今坂の方へ曲って見ると、まるで往来ゆききがない。右は高等学校の外そと、囲かこ、左は角が出来たばかりの会堂で、その傍そばの小屋のような家から車夫が声を掛けて車を勧めた処を通り過ぎると、土塀や生垣いけがきを繞めぐらした屋敷ばかりで、その間に綺麗きれな道が、ひろびろと附いている。

広い道を歩くものが自分ひとりになると共に、この頃の朝の空気の、毛髪の根を緊縮させるような渋み味を感じた。そして今小女に聞いた大石の日常の生活を思った。国から態わ々逢ざわいに出て来た大石という男を、純一は頭の中で、臃氣おぼろけでない想像図にえがいているが、今聞いた話はこの図の輪廓りんかくを少しも傷けはしない。傷けないばかりではない、一層明確にしたように感ぜられる。大石というものに対する、純一が景仰けいこうと畏怖いふとの或る混合の感じが明確になったのである。

坂の上に出た。地図では知れないが、割合に幅の広いこの坂はSの字をぞんざいに書い

たように屈曲して附いている。純一は坂の上で足を留めて向うを見た。

灰色の薄曇をしている空の下に、同じ灰色に見えて、しかも透き徹った空気とおに浸されて、向うの上野の山と自分の立つている向うが岡との間の人家の群むれが見える。ここで目に映ずるだけの人家でも、故郷の町程の大きさはあるように思われるのである。純一は暫く眺めていて、深い呼吸をした。

坂を降りて左側の鳥居を這入る。花崗岩みかげいしを敷いてある道を根津神社の方へ行く。下駄の磬けいのように鳴るのが、好い心持である。剥げた木像の据えてある隨身門ずいしんもんから内を、古風な瑞籬たまがきで囲んである。故郷の家で、お祖母様のお部屋に、錦絵にしきえの屏風びょうぶがあつた。その絵に、どこの神社であつたか知らぬが、こんな瑞垣たまがきがあつたと思う。社殿の縁には、ねんねこ絆纏ばんてんの中へ赤ん坊を負つて、手拭てぬぐいの鉢巻をした小娘が腰を掛けて、寒そうに体を竦すくめている。純一は拝む気にもなれぬので、小さい門を左の方へ出ると、溝みぞのような池があつて、向うの小高い処には常磐木ときわぎの間に葉の黄ばんだ木の雑まじった木立がある。濁つてきたない池の水の、所々に泡の浮いているのを見ると、厭いやになつたので、急いで裏門を出た。

藪下やぶしたの狭い道に這入る。多くは格子戸の嵌まつている小さい家が、一列に並んでいる

前に、売物の荷車が止めてあるので、体を横にして通る。右側は崩れ掛って住まわれなくなった古長屋に戸が締めてある。九尺二間くしゃくにけんというのがこれだなど思つて通り過ぎる。その隣に冠木門かぶきもんのあるのを見ると、色川国士別邸と不恰好な木札に書いて釘附くぎづけにしてある。妙な姓名なので、新聞を読むうちに記憶していた、どこかの議員だったなど思つて通る。それから先きは余り綺麗でない別荘らしい家と植木屋のような家とが続いている。左側の丘陵のような処には、大分大だいぶん大きい木が立っているのを、ひどく乱暴に刈り込んである。手入の悪い大きい屋敷の裏手だなど思つて通り過ぎる。

爪先上つまさきあがりの道を、平になる処まで登ると、又右側が崖がけになつていて、上野の山までの間の人家の屋根が見える。ふいと左側の籠塀かごべいのある家を見ると、毛利某という門札が目につく。純一は、おや、これが鷗村おうそんの家だなど思つて、一寸立ちよつとつて駒寄こまよせの中のぞを覗いて見た。

干からびた老人の癖に、みずみずしい青年の中にはいつてまごついている人、そして愚痴と厭味と言つている人、竿さおと紐ひも尺しゃくとを持つて測地師が土地を測るような小説や脚本を書いてある人の事だから、今時分は苦虫を咬かみ潰つぶしたような顔をして起きて出て、台所すみまきで炭薪すすきの小言でも言つてゐるだろうと思つて、純一は身み顫ふるをして門前を立ち去つた。

四辻よつじを右へ坂を降りると右も左も菊細工の小屋である。国の芝居の木戸番のように、高い台の上に胡坐あぐらをかいた、人買か巾着切りのような男が、どの小屋の前にもいて、手に絵番附のようなものを持つてゐるのを、往來の人に押し附けるようにして、うるさく見物を勧める。まだ朝早いので、通る人が少い処へ、純一が通り掛かったのだから、道の両側から純一人を的あてにして勧めるのである。外から見えるようにしてある人形を見ようと思つても、純一は足を留めて見ることが出来ない。そこで覺えず足を早めて通り抜けて、右手の広い町へ曲つた。

時計を出して見れば、まだ八時三十分にしかない。まだなかなか大石の目の醒さめる時刻にはならないので、好いい加減な横町を、上野の山の方へ曲つた。狭い町の両側は穢きたな長屋で、塩煎餅しおせんべいを焼いている店や、小さい荒物屋がある。物置にしてある小屋の開ひら戸どが半分開あいている為めに、身を横にして通らねばならない処さえある。勾配こうばいのない溝に、芥ごみが落ちて水が淀よどんでいる。血色の悪い、瘡やせこけた子供がうろうろしているのを見ると、いたずらをする元氣もないように思われる。純一は国なんぞにはこんな哀あわれな所はないと思つた。

曲りくねつて行くうちに、小川こがわに掛けた板橋を渡つて、田圃たんぼが半分町になり掛かつて、

掛流しの折のような新しい家の疎まばらに立っている辺あたりに出た。一軒の家の横側に、ペンキの大字で楽器製造所と書いてある。成程、こんな物のあるのも国と違う所だと、純一は驚いて見て通った。

ふいと墓地の横手を谷中やなかの方から降りる、田舎道のような坂の下に出た。灰色の雲のあ
る処から、ない処へ日が廻まわつて、黄いろい、寂しい暖みのある光がさつと差して来た。坂
を上つて上野の一部を見ようか、それでは余り遅くなるかも知れないと、危ぶみながら佇ち
立よりゆうしている。

さつきから坂を降りて来るのが、純一が視野のはずれの方に映っていた、書生風の男が
じき傍まで来たので、覚えず顔を見合せた。

「小泉じやあないか」

先方から声を掛けた。

「瀬戸か。出し抜けに逢ったから、僕はびっくりした」

「君より僕の方が余よつ程ほど驚かなくちやあならないのだ。何時いつ出て来たい」

「ゆうべ着いたのだ。やっぱり君は美術学校にいるのかね」

「うむ。今学校から来たのだ。モデルが病氣だと云つて出て来ないから、駒込こまごめの友達の

処へでも行こうと思つて出掛けた処だ」

「そんな自由な事が出来るのかね」

「中学とは違ふよ」

純一は一本参つたと思つた。瀬戸速人とはY市の中学で同級にいたのである。

「どこがどんな処だか、分からないから為方がない」

純一は厭味気なしに折れて出た。瀬戸も実は受持教授が展覧会事務所に往つていないのを幸に、腹が痛いとか何とか云つて、ごまかして学校を出て来たのだから、今度は自分の方で気の毒なような心持になつた。そして理想主義の看板のような、純一の黒く澄んだ瞳で、自分の顔の表情を見られるのが頗る不愉快であつた。

この時十七八の、不斷着で買物にでも行くといふような、ひさしがみ 廂 髪 の一寸 あいきよう 愛 敬 のある娘が、袖が障るように二人の傍を通つて、純一の顔を、氣に入つた心持を隠さずに現したような見方で見て行つた。瀬戸はその娘の肉附の好い体をじつと見て、慌てたように純一の顔に視線を移した。

「君はどこへ行くのだい」

「路花に逢おうと思つて行つた処が、十時でなけりやあ起きないということだから、この

辺^{へん}をさつきからぶらぶらしている」

「大石路花か。なんでもひどく無愛想な奴だということだ。やっぱり君は小説家志願でいるのだね」

「どうなるか知れはしないよ」

「君は財産家だから、なんでも好きな事を遣^やるが好いさ。紹介でもあるのかい」

「うむ。君が東京へ出てから中学へ来た田中という先生があるのだ。校友会で心易くなつて、僕の処へ遊びに来たのだ。その先生が大石の同窓だもんだから、紹介状を書いて貰^あつた」

「そんなら好かろう。随分話のしにくい男だというから、ふいと行つたつて駄目だろうと思つたのだ。もうそろそろ十時になるだろう。そこいらまで一しよに行^いこう」

二人は又狭い横町を抜けて、幅の広い寂しい通を横切つて、純一の一度渡つた、小川に掛けた生木^{なまき}の橋を渡つて、千駄木^{せんだぎした}下の大通に出た。菊見^{きくみ}に行くらしい車が、大分続いて藍^あ染橋^{いそめばし}の方から来る。瀬戸が先へ立つて、ペンキ塗の柵^{くし}にゐで井病院と仮名^{かながい}違^{ちが}に書いて立ててある、西側の横町へ這入るので、純一は附^ついて行く。瀬戸が思い出したように問うた。

「どこにいるのだい」

「まだ日蔭町の宿屋にいる」

「それじゃあ居所が極きまつたら知らせてくれ給えよ」

瀬戸は名刺を出して、動坂どうざかの下宿の番地を鉛筆で書いて渡した。

「僕はここにいる。君は路花の処へ入門するのかね。盛んな事を遣つて盛んな事を書いて
いるというじゃないか」

「君は読まないか」

「小説はめつたに読まないよ」

二人は藪下へ出た。瀬戸が立ち留まつた。

「僕はここで失敬するが、道は分かるかね」

「ここはさつき通つた処だ」

「それじゃあ、いずれその内」

「左様さようなら」

瀬戸は団子坂だんござかの方へ、純一は根津権現の方へ、ここで袂を分かつた。

式

二階の八畳である。東に向いている、西洋風の硝子窓ガラスまど二つから、形紙を張った向むこうが側の壁まで一ぱいに日が差している。この袖浦館という下宿は、支那学生しななんぞを目当にして建てたものらしい。この部屋は近頃まで印度学生インドが二人住まって、籐とうの長椅子の上にごろごろしていたのである。その時やす廉らん羅ら氈せんの敷いてあつた床に、今は畳が敷いてあるが、南の窓の下には記念の長椅子が置いてある。

テエブルの足を切つたような大机が、東側の二つの窓の間の処に、少し壁から離して無造作に据えてある。何故窓なぜの前に置かないのだと、友達がこの部屋の主人に問うたら、窓掛れを引けば日が這入らない、引かなければ目まぶしいと云つた。窓掛の白木綿で、主人が濡ぬ手を拭いたのを、女中が見て亭主に告口をしたことがある。亭主が苦情を言いに来た処が、もう洗濯せんたくをしても好い頃だと、あべこべに叱つて恐れ入らせたそうだ。この部屋の主人は大石狷太郎である。

大石は今顔を洗つて帰つて来て、更紗やいざんの座布団の上に胡坐をかいて、小さい薬罐やかんの湯気を立てている火鉢を引き寄せて、敷島しきしまを吹かしている。そこへ女中が膳を持って来る。

その膳の汁椀しるわんの側そばに、名刺が一枚載せてある。大石はちよいと手に取って名前を読んで、黙もくつて女中の顔を見た。女中はこう云った。

「御飯を上あがるのだと申しましたら、それでは待つていると仰おつしやつて、下にいらつしやいます」

大石は黙うなずつて頷うなずいて飯を食い始めた。食いながら座布団そばの傍そばにある東京新聞を拡げて、一面の小説を読む。これは自分が書いているのである。社に出ているうちに校正は自分でして置いて、これだけは毎朝一字残さずに読む。それが非常に早い。それからやはり自分の担当ほかしている附録にぎつと目を通す。附録は文学欄で填うみめていて、記者は四五人の外ほかに出いでない。書くことは、第一流と云われる二三人の作の批評だけであつて、その他の事には殆ど全く容喙ようかいしないことになっている。大石自身はその二三人の中うちの一人なのである。飯が済むと、女中は片手に膳、片手に土瓶たを持って起たちながら、こう云った。

「お客様をお通し申しましょうか」

「うむ、来ても好いい」

返事はしても、女中の方を見もしない。随分そつけなくして、笑しょうだん談だん一つ言わないのに、女中は飽くまで丁寧つけとどけにしている。それは大石が外の客の倍も附つけとどけ届どけをするからであ

る。窓掛一件の時亭主が閉口して引つ込んだのも、同じわけで、大石は下宿料をきちんと払う。時々には面倒だから来月分も取つて置いてくれいなんぞと云うことさえある。袖浦館の上から下まで、大石の金力に刃向うものはない。それでいて、着物なんぞは随分質素にしている。今着ている銘めい撰せんの綿入と、締めている白縮緬しろちりめんのへこ帯とは、相応に新しくはあるが、寝る時もこのまま寝て、洋服に着換えない時には、このままどこへでも出掛けるのである。

大石が東京新聞を見てしまつて、傍にかき置ねて置いてある、外の新聞二三枚の文学欄だけを拾ひろ読よみをする処へ、さっきの名刺の客が這入つてきた。二十二三の書生風の男である。縞しまの綿入に小倉袴を穿いて、羽織は着ていない。名刺には新思潮記者とあつたが、實際この頃の真面目な記者には、こういう風なのが多いのである。

「近藤時雄です」

鋭い目の窪くぼんだ、鼻の尖とがつた顔に、無造作な愛敬を湛たたえて、記者は名告なつた。

「僕が大石です」

目を挙げて客の顔を見ただけで、新聞は手から置かない。用があるなら、早く言つてしまつて帰れとでも云いそうな心持が見える。それでも、近藤の顔に初め見えていた微笑は

消えない。主人が新聞を手から置くことを予期しないと見える。そしてあらゆる新聞雑誌に肖像の載せてある大石が、自分で名を名告つたのは、全く無用な事であつて、その無用な事をしたのは、特に恩恵を施してくれたのだ位に思っているのかも知れない。

「先生。何かお話は願われますまいか」

「何の話ですか」

新聞がやつと手を離れた。

「現代思想というようなお話が伺われると好いのですが」

「別に何も考えてはいません」

「しかし先生のお作に出ている主人公や何ぞの心持ですな。あれをみんなが色々に論じていますが、先生はどう思つていらつしやるか分らないのです。そういう事をお話なすつて下さると我々青年は為合せしあわなのですが。ほんの片端かたはしで宜よろしいのです。手掛りを与えて下されば宜しいのです」

近藤は頻しきりに迫っている。女中が又名刺を持つて来た。紹介状が添えてある。大石は紹介状の田中亮あきらという署名と、小泉純一持参と書いてある処とを見たきりで、封を切らずに下に置いて、女中に言つた。

「好いからお通なさいと云っておくれ」

近藤は肉薄した。

「どうでしょう、先生、願われますまいか」

梯子の下まで来て待つていた純一は、すぐに上がって来た。そして来客のあるのを見て、少し隔った処から大石に辞儀をして控えている。急いで歩いて来たので、少し赤みを帯びている顔から、曇のない黒い瞳が、珍らしい外の世界を覗いている。大石はこの瞳の光を自分の顔に注がれたとき、自分の顔の覚えず霽やかになるのを感じた。そして熱心に自分の顔を見詰めている近藤にこう云った。

「僕を書く人物に就いて言われるだけの事は、僕は小説で言っている。その外に何があるもんかね。僕はこの頃長い論文なんかは面倒だから読まないが、一体僕を書く人物がどうだと云っているかね」

始めて少し内容のあるような事を言った。それに批評家が何と云っていると云うことを、向うに話させれば、勢その通だとか、そうではないとか云わなくてはならなくなる。今来た少年の、無垢の自然をそのままのような目附を見て、ふいとが緩んだなど、大石は気が附いたが、既に遅かった。

「批評家は大体こう云うのです。先生のお書になるものは真の告白だ。ああ云う告白をなさる厳肅な態度に服する。Aurelius 《オオレリアス》 Augustinus 《オオガスチヌス》 だとか、Jean 《ジャン》 Jaques 《ジャック》 Rousseau 《ルソオ》 だとか云うような、昔の人の取った態度のようだと云うのです」

「難^{ありがた}有いわけだね。僕は今の先生方の論文も面倒だから読まないが、昔の人の書いたものも面倒だから読まない。しかし聖 Augustinus 《オオガスチヌス》 は若い時に乱行を遣つて、基^{クリスト}督教に這入ってから、態度を一変してしまつて、fanatic 《ファナチック》 な坊さんになつて懺悔^{さんげ}をしたのだそうだ。Rousseau 《ルソオ》 は妻と名の附かない女と一しよにいて、子が出来たところで、育て方に困つて、孤兒院へ入れたりなんぞしたことを懺悔したが、生れつき馬鹿に堅い男で、伊太利^{イタリイ}の公使館にいた時、すばらしい別品^{べつぴん}の処へ連れて行かれたのに、顛え上つてどうもすることが出来なかったというじゃあないか。僕の書いている人物はだらしない事を遣つている。地獄を買っている。あれがそんなにえらいと云うのかね」

「ええ。それがえらいと云うのです。地獄はみんなが買います。地獄を買っていて、己^{おれ}は地獄を買っていると自省する態度が、厳肅だと云うのです」

「それじゃあ地獄を買わない奴は、厳肅な態度は取れないと云うのかね」

「そりゃあ地獄も買うことの出来ないような偏屈な奴もありましょう。買っていても、矯飾して知らない振をしている奴もありましょう。そういう奴は内生活が貧弱です。そんな奴には芸術の趣味なんかは分かりません。小説なんぞは書けません。懺悔の為様がない。告白をする内容がない。厳肅な態度の取りようがないと云うのです」

「ふん。それじゃあ偏屈でもなくつて、矯飾もしないで、芸術の趣味の分かる、製作の出来る人間はいないと云うのかね」

「そりゃあ、そんな神のようなものが有るとも無いとも、誰も断言はしていません。しかし批評の対象は神のようなものではありません。人間です」

「人間は皆地獄を買うのかね」

「先生。僕を冷かしては行けません」

「冷かしなんぞはしない」大石は睫毛をも動かさずに、ゆったり胡坐をかいている。

帳場のぼんぼん時計が、前触に鍋に物の焦げ附くような音をさせて、大業に打ち出した。留所もなく打っている。十二時である。

近藤は気の附いたような様子をして云った。

「お邪魔をいたしました。又伺います」

「さようなら。こっちのお客が待たせてあるから、お見送りはしませんよ」

「どう致しまして」近藤は席を立つた。

大石は暫くじつと純一の顔を見ていて、気色けしきを柔げて詞を掛けた。

「君ひどく待たせたねえ。飯前じゃないか」

「まだ食べたくありません」

「何時に朝飯を食ったのだい」

「六時半です」

「なんだ。君のような壮さかんな青年が六時半に朝飯を食って、午ひるが来たのに食べたくないくらいことがあるものか。嘘うそだろう」

語気が頗る鋭い。純一は一寸不意に出られてまごついたが、主人の顔を仰いでいる目は逸そらさなかった。純一の心の中うちでは、こういう人の前で世間並の空辞儀からじぎをしたのは悪かったと思う悔やら、その位な事をしたからと云って、行きなり叱いつてくれなくても好きそうなものだと思ふ不平やらが籠こみ合つて、それでまごついたのである。

「僕が悪うございました。食べたくないくと云つたのは嘘です」

「はははは。君は素直で好い。ここの内の飯は旨くはないが、御馳走しよう。その代り一人で食うのだよ。僕はまだ朝飯から二時間立たないのだから」

詠あつらえた飯は直ぐに來た。純一が初はじめに懲りて、遠慮なしに食うのを、大石は面白そうに見て、煙草を呑のんでいる。純一は食いながらこんな事を思うのである。大石という人は變つてゐるだろうとは思つたが、随分勝手の違いようがひどい。さっきの客が歸あとつた迹で、黙つていてくれれば、こつちから用事を言い出すのであつた。飯を食わせる程なら、何の用事があつて來たかと問うても好きそうなものに黙つていられるから、言い出す機会がない。持つて來た紹介状も、さつきから見れば、封が切らずにある。紹介状も見ず、用事も問わずに、知らない人に行きなり飯を食わせるというような事は、話にも聞いたことがない。ひどい勝手の違いようだと思つてゐるのである。ところが、大石の考かんがえは頗る單純である。純一が自分を崇拜してゐる青年の一人いちにんだということは、顔の表情で知れてゐる。田中が紹介状を書いたのを見ると、何処どこから來たということも知れてゐる。Y県出身の崇拜者。目前で大飯を食つてゐる純一の attribute 《アトリビュート》はこれで尽きてゐる。多言を須もちいないと思つてゐるのである。

飯が済んで、女中が膳を持つて降くだりた。その時大石はついと立つて、戸棚から羽織を出

して着ながらこう云った。

「僕は今から新聞社に行くから、又遊びに来給え。夜は行けないよ」

机の上の書類を取つて懐ふところに入れる。長押ながしから中折れの帽を取つて被る。転瞬てんしゆん倏しゆく忽こつの間に梯子段を降りるのである。純一は呆あきれて帽を攫つかんで後あとに続いた。

参

初めて大石を尋ねた翌日の事である。純一は居所を極めようと思つて宿屋を出た。

袖浦館を見てから、下宿屋というものが厭になつていたので、どこか静かな処ところで小さい家を借りようと思うのである。前日には大石に袖浦館の前で別れて、上野へ行つて文部省の展覧会を見て歸つた。その時上野がなんとなく気に入つたので、きようは新橋から真直に上野へ来た。

博物館の門に突き当つて、根岸の方へ行ゆこうか、きのう通つた谷中の方へ行ゆこうかと暫しばらく考えたが、大石を尋ねるに便利な処をと思つていたので、足が自然に谷中の方へ向いた。美術学校の角を曲つて、桜木町から天王寺の墓地へ出た。

今日も風のない好い天気である。銀杏いちようの落葉の散らばっている敷石を踏んで、大小種々な墓石に掘つてある、知らぬ人の名を読みながら、ぶらぶらと初音町はつねちように出た。

人通りの少い広々とした町に、生垣を結び繞めぐらした小さい家の並んでいる処がある。その中の一軒の、自然木しぜんぼくの門柱もんばしらに取り附けた柴折戸しおりどに、貸家の札が張つてあるのが目に附いた。

純一がその門の前に立ち留まつて、垣の内を覗いていると、隣の植木鉢を沢山入口いりぐちに並べてある家から、白髪しらがの婆あさんが出て来て話をし掛けた。聞けば貸家になっている家は、この婆あさんの亭主で、植木屋をしていた爺いさんが、倅せがれに姫よめを取つて家を譲るとき、新しく立てて這入はいつた隠居所なのである。爺いさんは四年前に、倅が戦争に行つている留守に、七十幾つとかで亡くなった。それから貸家にして、油画をかく人に借かしていたが、先月その人が京都へ越して行つて、明家あきやになったというのである。画家は一人ものであつた。食事は植木屋から運んだ。総てこの家から上がる銭は婆あさんのものになるので、若もし一人ものお客が附いたら、やはり前通りに食事の世話をして好いと云つてゐる。

婆あさんの質樸しつぽくで、身綺麗みぎれいにしているのが、純一にはひどく気に入つた。婆あさんの方でも、純一の大人しそうな、品の好いいのが、一目見て気に入つたので、「お友達があつ

て、御一しよにお住まいになるなら、それでも宜しゅうございますが、出来ることならあなたのようなお方に、お一人で住まって戴きたいのでございます」と云った。

「まあ、とにかく御覧なすつて下さい」と云つて、婆あさんは柴折戸を開けた。純一は国のお祖母あ様の腰が曲つて耳の遠いのを思い出して、こんな巖乗な年寄もあるものかと思ひながら、一しよに這入つて見た。婆あさんは建ててから十年になると云うが、住み荒したと云うような処は少しもない。この家に手入をして綺麗にするのを、婆あさんは為事いにしていると云つてゐるが、いかにもそうらしく思われる。一番好い部屋は四畳半で、飛石の曲り角に蹲つくばいの手水鉢ちようずばちが据えてある。茶道口ちやどうぐちのような西側の戸の外は、鏡のように拭き入れた廊下で、六畳の間に續けてある。それに勝手が附いている。

純一は、これまで、茶室というと陰気な、厭な感じが伴うように思つていた。国の家には、旧藩時代に殿様がお出いでになつたという茶席がある。寒くなつてからも蚊がいて、氣の詰まるような処であつた。それにこの家は茶掛こしらかつた拵はればれでありながら、いかにも晴晴はればれしている。蹂にじりぐち口のような戸口が南向になつていて、東の窓の外は狭い庭を隔てて、直ぐに広い往来になつてゐるからであらう。

話はいつ極まるともなく極まつたという工合である。一巡ひとまわりして来て、蹂口に据えて

ある、大きい鞍馬石くらまいしの上に立ち留まって、純一が「午ひるから越して来ても好いのですか」と云うと、蹲そばの傍そばの苔こけにまじっている、小さい草を撮つまんで抜いていた婆あさんが、「宜しいどころじゃありません、この通りいつでもお住まいになるように、毎日掃除をしていますから」と云った。

隣の植木屋との間は、低い竹垣になつていて、丁度純一の立っている向うの処に、花の散つてしまつた萩はぎがまん円まるに繁はつている。その傍に二度咲のダリアの赤に黄の雜まじつた花が十ばかり、高く首を擡もたげて咲いている。その花の上に青み掛かつた日の光が一ぱいに差しているのを、純一が見るともなしに見ていると、萩の茂みを離れて、ダリアの花の間へ、幅の広いクリイム色のリボンを掛けた束髪たうまつの娘の頭がひよいと出た。大きい目で純一をじいつと見ているので、純一もじいつと見ている。

婆あさんは純一の視線を辿たどつて娘の首を見着けて、「おやおや」と云った。

「お客さま」

答を待たない問の調子で娘は云つて、につこり笑つた。そして萩の茂みに隠れてしまつた。

純一は午後越して来る約束をして、忙がしそうにこの家の門を出た。植木屋の前を通る

とき、ダリアの咲いているあたりを見たが、四枚並べて敷いてある御蔭石が、萩の植わっている処から右に折れ曲つていて、それより奥は見えなかった。

四

初音町に引き越してから、一週間目が天長節であつた。

瀬戸の処へは、越した晩に葉書を出して、近い事だから直ぐにも来るかと思つたが、まだ来ない。大石の処へは、二度目に尋ねて行つて、詩人になりたい、小説が書いて見たいと云う志願を話して見た。詩人は生れるもので、己がなろうと企てたつてなられるものではないなどと云つて叱られはすまいかと、心中危ぶみながら打ち出して見たが、大石は好いとも悪いとも云わない。稽古けいこのしようもない。修行のしようもない。只書いて見るだけの事だ。文章なんぞというものは、擬古文でも書こうというには、稽古の必要もあろうが、そんな事は太石自身にも出来ない。自身の書いているものにも、仮名かな違ちがひなんぞは沢山あるだろう。そんな事には頓とん着じゃくしないで遣やつてゐる。要するに頭次第だと云つた。それから、とにかく余り生産的な為事しごとではないが、その方はどう思つてゐるかと問われたので、

純一が資産のある家の一人息子に生れて、パンの爲めに働くには及ばない身の上だと話すと、大石は笑つて、それでは生活難と闘わないでも済むから、一ひと廉かんの労力の節減は出来るが、その代り刺戟しげきを受けることが少いから、うっかりすると成功の道を踏みはずさうと云つた。純一は何の掴つかまえ処もない話だと思つて稍やや失望したが、帰つてから考えて見れば、大石の言つたより外に、別に何物かがあるうと思つたのが間違で、そんな物はありようがないのだと悟つた。そしてなんとなく寂しいような、心細いような心持がした。一度は、家主いえぬしの植うえ長ちやうがどこからか買い集めて来てくれた家具の一つの唐とう机づくえに向つて、その書いて見るといふことに著ちやく手くしゆしようとして見たが、頭次第だと云う頭が、どうも空虚で、何を書いて好いいか分らない。東京に出てからの感じも、何物かが有るようで無いようで、その有るようなものは雑然としていて、どこを押えて見ようという処がない。馬鹿らしくなつて、一旦持つた筆を置いた。

天長節の朝であつた。目が醒さめて見ると、四畳半の東窓の戸の隙すきから、オレンジ色の日が枕の処まで差し込んで、細かい塵ちりが活潑かつぱつに跳おどつてゐる。枕元に置いて寝た時計を取つて見れば、六時である。

純一は国にいたるとき、学校へ御真影を拝みに行つたことを思い出した。そしてふいと青

山の練兵場^ばへ行つて見ようかと思つたが、すぐに又自分で自分を打ち消した。兵隊の沢山並んで歩くのを見たつてつまらないと思つたのである。

そのうち婆あさんが朝飯を運んで来たので、純一が食べていると、「お婆あさん」と、優しい声で呼ぶのが聞えた。純一の目は婆あさんの目と一しよに、その声の方角を辿つて、南側の戸口の処から外へ、ダリアの花のあたりまで行くと、この家を借りた日に見た少女の頭が、同じ処に見えている。リボンやはりクリイム色で容赦なく睜^{みひら}いた大きい目は、純一が宮島へ詣^まつたとき見た鹿の目を思い出させた。純一は先の日にちらと見たばかりで、その後この娘の事を一度も思い出さずにいたが、今又ふいとその顔を見て、いつの間にか余程親しくなっているような心持がした。意識の閬^{しきい}の下を、この娘の影が往来していたのかも知れない。婆あさんはこう云つた。

「おや、いらつしやいまし。安^{やす}は団子坂まで買物に参りましたが、もう直^{じき}に歸つて参りましょう。まあ一寸^{ちよつと}こちらへいらつしやいまし」

「往^いつても好くつて」

「ええええ。あちらから廻つていらつしやいまし」

少女の頭は萩の茂みの蔭に隠れた。婆あさんは純一に、少女が中沢という銀行頭取の娘

で、近所の別荘にいますということ、姫の安がもと別荘で小間使をしていて娘と仲好だということをお話を話した。

その際に植木屋の勝手の方へ廻ったお雪さんは、飛石伝いに離れの前に来た。中沢の娘はお雪さんというのである。

婆あさんが、「この方が今度越していらいしやった小泉さんという方でございます」というと、お雪さんは黙ってお辞儀をして、純一の顔をじっと見て立っている。着物も羽織もくすんだ色の銘撰であるが、長い袖の八口から緋縮緬の襦袢の袖が飜れ出ている。

飲み掛けた茶を下に置いて、これも黙ってお辞儀をした純一の顔は赤くなつたが、お雪さんの方は却って平気である。そして稍々身を反らせているかと思われる位に、真直に立っている。純一はそれを見て、何だか人に逼るような、戦を挑むような態度だと感じたのである。

純一は何とか云わなくてはならないと思つたが、どうも詞が見付からなかつた。そして茶碗を取り上げて、茶を一口に飲んだ。婆あさんが詞を挟んだ。

「お嬢様は好く画を見にいらつしやいましたが、小泉さんは御本をお読みなさるのですか

ら、折々いらつしやつて御本のお話をお聞きなさいますと宜しゅうございます。御本のお話はお好きでございましょう」

「ええ」

純一は、「僕は本は余り読みません」と云つた。言つて了うと自分で、まあ、何と云う馬鹿氣た事を言つたものだろうと思つた。そしてお雪さんの感情を害しはしなかつたかと思つて、氣色けしきを伺つた。しかしお雪さんは相変らず口元に微笑を湛たえているのである。

その微笑が又純一には氣になつた。それはどうも自分を見下みくだしている微笑のように思われて、その見下されるのが自分の当然受くべき罰のように思われたからである。

純一はどうかして名譽を恢かい復ふくしなくてはならないような感じがした。そして余程勇氣を振り起して云つた。

「どうです。少しお掛なすつては」

ありがと
「難有う」

右の草履が礮ひきうす礮の飛石を一つ踏んで、左の草履が麻の葉のような皴しゆんのある鞍馬の沓くつぬ脱ぎに上がる。お雪さんの体がしなやかに一ひとねじ振り振られて、長い書生羽織に包まれた腰が蹂口に卸された。

諺にもいう天長節日和の冬の日がぱつと差して来たので、お雪さんは目映しまぶそうな顔を
 して、横に純一の方に向いた。純一が国にいるとき取り寄せた近代美術史に、ナナとい
 題のマネエの画があつて、大きな眉刷毛まゆぼけを持つて、鏡の前に立つて、一寸横に振り向いた
 娘がかいてあつた。その稍や規則正し過ぎるかと思われるような、細ほそ面おもてな顔に、お雪
 さんが好く似ていると思うのは、額を右から左へ斜ななめに掠かすめている、小指の大きき程ずつに
 固まつた、柔かい前髪まえがみの為めもあるう。その前髪の下の大きい目が、日に目映しがつても、
 少しも純一には目映しがない。

「あなたお国からいらつした方のようにやあないわ」

純一は笑いながら顔を赤くした。そして顔の赤くなるのを意識して、ひどく忌々しがつ
 た。それに出し抜しけに、美中に刺しありともいうべき批評の詞あひを浴あびせ掛けるとは、怪けしから
 ん事だと思つた。

婆あさんはお鉢はちを持つて、起たつて行つた。二人は暫く無言でいた。純一は急に空氣が重
 くろしくなつたように感じた。

垣の外を、毛皮の衿えりの附いた外套がいとうを着た客を載せた車が一つ、田端の方へ走つて行つ
 た。

とうとう婆あさんが膳を下げに来るまで、純一は何の詞をも見出すことを得なかった。婆あさんは膳と土瓶とを両手に持つて、二人の顔を見競べて、「まあ、大相お静でございますね」と云つて、勝手へ行つた。

蹲の向うの山茶花の枝から、雀が一羽飛び下りて、蹲の水を飲む。この不思議な雀が純一の結ばれた舌を解いた。

「雀が水を飲んでいますね」

「黙つていらつしやいよ」

純一は起つて閨際まで出た。雀はついと飛んで行つた。お雪さんは純一の顔を仰いで見た。

「あら、とうとう逃がしておしまいなすつてね」

「なに、僕が来なくなつて逃げたのです」大分遠慮は無くなつたが、下手な役者が台詞を言うような心持である。

「そうじゃないわ」詞遣は急劇に親密の度を加えて来る。少し間を置いて、「わたし又来てよ」と云うかと思うと、大きい目の閃を跡に残して、千代田草履は飛石の上をばたばたと踏んで去つた。

五

純一は机の上にある仏蘭西フランスの雑誌を取り上げた。中学にいるときの外国語は英語であったが、聖公会の宣教師の所へ毎晩通つて、仏語を学んだ。初はじめは暁ぎょうせい星学校の教科書を読むのも辛かったが、一年程通っているうちに、ふいと楽に読めるようになった。そこで教師のベルタンさんに頼んで、巴里パリイの書店に紹介して貰った。それからは書目を送ってくれるので、新刊書を直接に取寄せている。雑誌もその書店が取り次いで送ってくれるのである。

開けた処には、セガンチニの死ぬるところが書いてある。氷山を隣に持った小屋のような田舎屋である。ろくな煖炉だんろもない。そこで画家は死に瀕ひんしている。体のうちの臓器はもう運転とどを停めようとしているのに、画家は窓を開けさせて、氷の山の巔いただきに棚引く雲を眺めている。

純一は巻を掩おおうて考えた。芸術はこうしたものであろう。自分の画えがくべきアルプの山は現社会である。国にいたとき夢みていた大都會の渦巻は今自分を漂わせているのである。

いや、漂わせているのなら好い。漂わせていなくてはならないのに、自分は岸の蔦蘿^{つたかずら}にかじり附いているのではあるまいか。正しい意味で生活していないのではあるまいか。セガンチニが一度も窓を開けず、戸の外へ出なかつたら、どうだろう。そうしたら、山の上に住まっている甲斐^{かい}はあるまい。

今東京で社会の表面に立つている人に、国の人は沢山ある。世はY県の世である。国を立つとき某元老に紹介して遣ろう、某大臣に紹介して遣ろうと云った人があつたのを皆ことわつた。それはそういう人達がどんなに偉大であろうが、どんなに権勢であろうが、そんな事は自分の目^{もくちゆう}中に置いていなかつたからである。それから又こんな事を思つた。人の遭遇というものは、紹介状や何ぞで得られるものではない。紹介状や何ぞで得られたような遭遇は、別に或物が土台を造つていたのである。紹介状は偶然そこへ出くわしたのである。開^あいている扉があつたら足を容^{ゆる}れよう。扉が閉じられていたら通り過ぎよう。こう思つて、田中さんの紹介状一本の外は、皆貰わずに置いたのである。

自分は東京に来ているには違ない。しかしこんなにしていて、東京が分かるだろうか。こうしては国の書齋にいるのも同じ事ではあるまいか。同じ事なら、まだ好^いい。国で中学を済ませた時、高等学校の試験を受けに東京へ出て、今では大学にはいつているもの

もある。瀬戸のように美術学校にはいつているものもある。直ぐに社会に出て、職業を求めたものもある。自分が優等の成績を以て卒業しながら、仏蘭西語の研究を続けて、暫く国に留^{とど}まつていたのは、自信があり抱負があつての事であつた。学士や博士になることは余り希望しない。世間にこれぞと云つて、為^して見たい職業もない。家には今のように支配人任せにしても、一族が樂に暮らして行^ゆかれるだけの財産がある。そこで親類の異議のうるさいのを排して作家になりたいと決心したのであつた。

そう思い立つてから語学を教えて貰つてゐる教師のベルタンさんに色々な事を問うて見たが、この人は巴里の空気を呼吸していた人の癖に、そんな方面の消息は少しも知らない。本業で読んでゐる筈^{はず}の新旧約全書でも、それを偉大なる文学として観察するといふ事はない。何かその中の話を問うて見るのに、啻^{ただ}に文学として観^みていないばかりではない、樂^{たのし}んで読んでゐるという事さえないようである。只寺院の側から観^{かん}た煩瑣^{はんさ}な註釈を加えた大冊の書物を、深く究めようともせずに、貯蔵してゐるばかりである。そして日々の為事には、国から来た新聞を読む。新聞では列国の均勢とか、どこかで偶^{たま}々起つてゐる外交問題とかいふような事に氣を着けている。そんなら何か秘密な政治上のミツシヨンでも持つてゐるか云うに、そうでもないらしい。恐らくは、欧米人の謂^いう珈^コ琲^オ卓^{フイ}の政治家の一^{くえ}

人なのであろう。その外には東洋へ立つ前に買つて来たという医書を少し持つていて、それを読んで自分の体だけの治療をする。殊にこの人の褐色の長い髪に掩われている頭には、持病の頭痛があつて、古びたタラアルのような黒い衣で包んでいる腰のあたりに、厭いやな病気があるのを、いつも手前療治で繕つてゐるらしい。そんな人柄なので少し話を文学や美術の事に向けようとする、顧みて他を言うのである。ようようの思おもひでこの人に為なして貰つた事は巴里の書肆しよしへ紹介して貰つただけである。

こんな事を思つてゐる内に、故郷の町はずれの、田圃たんぼの中に、じめじめした処へ土を盛つて、不ふ恰かつ好こうに造つたペンキ塗の会堂が目に浮ぶ。聖公会と書いた、古びた木札の掛けである、赤く塗つた門を這入ると、瓦かわらで築き上げた花壇が二つある。その一つには百合ゆりが植えてある。今一つの方にはコスモスが植えてある。どちらも春から芽を出しながら、百合は秋の初、コスモスは秋の季すえに覺束おぼつかなげな花が咲くまで、いじけたままに育つのである。中にもコスモスは、胡蘿蔔にんじんのような葉がちぢれて、瘡やせた幹がひよろひよろして立つてゐるのである。

その奥の、搏風はふだけゴチック賽まがに造つた、ペンキ塗のがらくた普請が会堂で、仏蘭西語を習ゆいに行く、少数の青年の外には、いつまで立つても、この中へ這入つて来る人はない。

ベルタンさんは老いぼれた料理人兼小使を一人使つて、がらんとした、稍やや大きい家に住んでいるのだから、どこも彼かしこ処ほこりも埃だらけで、白昼に鼠ねずみが駈け廻まわっている。

ベルタンさんは長崎から買つて来たという大きいデスクに、千八百五十何年などという年号の書いてある、クロオスの色の赤だか黒だか分からなくなった書物を、乱雑に積み上げて置いてある。その側には食くい掛けた腸詰かんちくや乾酪かんちやくを載せた皿が、不精にも勝手へ下げずに、国から来た Figaro 《フィガロ》の反古ほごを被かせて置いてある。虎斑とらふの猫が一匹積み上げた書物の上に飛び上がつて、そこで香箱を作つて、腸詰ちやうじつの匂においを嗅かいでいる。

その向うに、茶褐色の長い髪を、白い広い額うしろから、背後へ搔かき上げて、例のタラアルまがいの黒い服を着て、お祖父じいさん椅子に、誰たれやらに貰もらつたという、北海道の狐の皮を掛けて、ベルタンさんが据すわつてゐる。夏も冬も同じ事である。冬は部屋の隅の鉄砲煖炉まに松まつ真木つまきが燻くすぶつてゐるだけである。

或日稽古の時間より三十分ばかり早く行つたので、ベルタンさんといろいろな話をした。その時教師がお前は何になる積りかと問うたので、正直に Romancier 《ロマンシエエ》になると云つた。ベルタンさんは二三度問い返して、妙な顔をして黙もくつてしまった。この人は小説家というものに就あいては、これまで少しも考かんえて見た事がないので、何と云つて好い

いか分からなかったらしい。殆どわたくしは火星へ移住しますとでも云つたのと同じ位に呆れたらしい。

純一は読み掛けた雑誌も読まずにこんな回想に耽^{ふけ}っていたが、ふと今朝婆あさんの起して置いてくれた火鉢の火が、真白い灰を被つて小さくなつてしまったのに気が附いて、慌てて炭をついで、頬を膨らせて頻^{しき}りに吹き始めた。

六

天長節の日の午前はこんな風で立つてしまった。婆あさんの運^{ひる}んで来た^{しよく}昼食^{しよく}を食べた。そこへぶらりと瀬戸^{はやと}速人^{しら}が来た。

婆あさんが倅の長次郎に白^{しら}げさせて持^もて来た、小さい木札に、純一が名を書いて、門の柱に掛けさせて置いたので、瀬戸はすぐに尋ね当てて這入つて来たのである。日当りの好^いい小部屋で、向き合つて据わつて見ると、瀬戸の顔は大分故郷にいた時とは違っている。谷中の坂の下で逢つたときには、向うから声を掛けたのと顔の形よりは顔の表情を見たのとで、さ程には思わなかったが、瀬戸の昔油ぎっていた顔が、今は干からびて、目尻や口

の周圍に、何か言うとお皺しわが出来る。家主の婆あさんなんぞは婆あさんでも最少もすこし艶々つやつやしているように思われるのである。瀬戸はこう云った。

「ひどくしやれた内を見附けたもんだなあ」

「そうかねえ」

「そうかねえもないもんだ。一体君は人に無邪氣な青年だと云われる癖に、食えない人だよ。田舎から飛び出して来て、大抵の人間ならまごついているんだが、誰だれの所をでも一人で訪問する。家を一人で探して借りる。まるで百年も東京にいる人のようじゃないか」

「君、東京は百年前にはなかったよ」

「それだ。君のそう云う方面は馬鹿な奴には分からないのだ。君はずるいよ」

瀬戸は頻りにずるいよを振り廻して、純一の知己を以て自ら任じているという風である。それからこんな事を言った。今日の午後は暇なので、純一がどこか行きたい処でもあるなら、一しよに行つても好い。上野の展覧会へ行つても好い。浅草公園へ散歩に行つても好い。今一つは自分の折々行く青年俱樂部クラブのようなものがある。会員は多くは未来の文士というような連中で、それに美術家が二三人加わっている。極真面目な会で、名家を頼んで話をして貰う事になっている。今日は附石ふせきが来る。路花なんぞとは流派が違うが、なんに

しろ大家の事だから、いつも盛りだろろうと思うのである。

純一は画なんぞを見るには、分かつても分からなくても、人と一しよに見るのが嫌きらである。浅草公園の昨今の様子は、ちよいちよい新聞に出る出来事から推し測つて見ても、わざわざ往つて見る気にはならない。拊石という人は流行に遅れたようではあるが、とにかく小説家中で一番学問があるそうだ。どんな人か顔を見て置こうと思った。そこで倶楽部へ連れて行つて貰うことにした。

二人は初音町を出て、上野の山をぶらぶら通り抜けた。博物館の前にも、展覧会の前にも、馬車が幾つも停めてある。精養軒の東照宮の方に近い入口の前には、立派な自動車が一台ある。瀬戸が云つた。

「汽車はタアナアがかいたので画になつたが、まだ自動車の名画というものは聞かないね」
「そうかねえ。文章にはもう大分あるようだが」

「旨うまく書いた奴があるかね」

「小説にも脚本にも沢山書いてあるのだが、只使つてあるというだけのようだ。旨く書いたのはやっぱりマアテルリンクの小品位のものだろう」

「ふん。一体自動車というものは幾ら位するだろう」

「五六千円から、少し好いのは一万円以上だというじゃあないか」

「それじゃあ、僕なんぞは一生画をかいても、自動車は買えそうもない」

瀬戸は火の消えた朝日を、人のそろそろ歩いている足元へ無遠慮に投げて、苦笑をした。笑うとひどく醜くなる顔である。

広小路に出た。国旗をぶつちがえにして立てた電車が幾台も来るが、皆満員である。瀬戸が無理に人を押し分けて乗るので、純一も為方なしに附いて乗った。

須田町で乗り換えて、錦町で降りた。横町へ曲って、赤煉瓦の神田区役所の向いの処に来ると、瀬戸が立ち留まった。

この辺には木造のけちな家ばかり並んでいる。その一軒の庇に、好く本屋の店先に立てあるような、木の枠に紙を張り附けた看板が立て掛けてある。上の方へ横に羅馬字で「IDASKALIA 《ジダスカリア》」と書いて、下には豎に十一月例会と書いてある。

「いいだよ。二階へ上がるのだ」

瀬戸は下駄や半靴の乱雑に脱ぎ散らしてある中へ、薩摩下駄を跳ね飛ばして、正面の梯子を登って行く。純一は附いて上がりながら、店を横目で見ると、帳場の格子の背後には、二十ばかりの色の蒼い五分刈頭の男がすわっていて、勝手に続いているらしい三尺の口に

立っている 赧^{あからが}顔^おの大女と話をしている。女は襷^{たすき}がけで、裾をまくって、膝^{ひざ}の少し下まである、鼠色になった褌^{ふんどし}を出している。その女が「いらつしやい」と大声で云って、一寸こつちを見ただけで、轡^{くつわむし}虫の鳴くような声で、話をし続けているのである。

二階は広くてきたない。一方の壁の前に、卓^{テエブル}と椅子とが置いてあつて、卓の上には花瓶に南天が生けてあるが、いつ生けたものか葉がところどころ泣^{きゆうきん} 堇^{いん}の所謂乾反葉^{いわゆるひそりば}になっている。その側に水を入れた瓶とコップとがある。

十四五人ばかりの客が、二つ三つの火鉢を中心にして、よごれた座布団の上にすわっている。間々にばら蒔^まいてある座布団は跡から来る客を待っているのである。

客は大抵紺飛白^{こんがすり}の羽織に小倉袴^{こくらばかま}という風で、それに学校の制服を着たのが交っている。中には大学や高等学校の服もある。

会話は大分盛んである。

丁度純一が上がつて来たとき、上^{あが}り口^{くち}に近い一^{ひと}群^{むれ}の中で、誰^{たれ}やらが声高^{こわだか}にこう云うのが聞えた。

「とにかく、君、ライフとアートが別々になつてゐる奴は駄目だよ」

純一は知れ切つた事を、仰山らしく云つてゐるものだと思ひながら、瀬戸が人にでも引

き合わせてくれるのかと、少し躊躇^{ちゆうちよ}躇^{ちよ}していたが、瀬戸は誰やら心安い間らしい人を見附けて、座敷のずっと奥の方へずんずん行つて、その人と小声で忙^{せわ}しうに話し出したので、純一は上り口に近い群の片端に、座布団を引き寄せて寂しく据わつた。

この群では、識^しらない純一の来たのを、気にもしない様子で、会話を続けている。

話題に上っているのは、今夜演説に来る拊石である。老成らしい一^{いちにん}人が云う。あれはとにかく芸術家として成功している。成功といつても一時世間を動かしたという側いうのではない。文芸史上の意義である。それに学殖がある。短篇集なんぞの中には、西洋の事を書いて、西洋人が書いたときや思われないようながあると云う。そうすると、さつき声高に話していた男が、こう云う。学問や特別知識は何の価値もない。芸術家として成功しているとは、旨く人形^{なちや}を列べて、踊らせているような処を言うのではあるまいか。その成功が嫌^{いや}だ。纏^{まと}まつているのが嫌だ。人形を勝手に踊らせていて、エゴイストらしい自己が物蔭に隠れて、見物の面白がるのを冷笑しているように思われる。それをライフとアアトが別々になつていてというのだと云う。こう云っている男は近眼目がねを掛けた瘦^{やせおとこ}男で、柄にない大きな声を出すのである。傍^{そば}から遠慮^{くちばし}げに喙^{くちばし}を容れた男がある。「それでも教員を罷^やめたのなんぞは、生活を芸術に一致させようとしたのではなからうか」

「分かるもんか」

目金めがねの男は一言で排斥した。

今まで黙っている一人の伶俐れいりらしい男が、遠慮げな男を顧みて、こう云った。

「しかし教員を罷めただけでも、鷗村なんぞのように、役人をしているのに比べて見ると、余程芸術家らしいかも知れないね」

話題は拊石から鷗村に移った。

純一は拊石の物などは、多少興味を持つて読んだことがあるが、鷗村の物では、アンデルセンの翻譯ほんやくだけを見て、こんなつまらない作を、よくも暇潰ひまつぶしに訳したものだと思つたきり、この人に対して何の興味をも持つていないから、会話を耳を傾けないで、独りで勝手な事を思つていた。

会話はいいよ榮さかえて、笑わらい声こえが雑まじつて来る。

「厭味だと云われるのが気になると見えて、自分で厭味だと書いて、その書いたのを厭味だと云われているなんぞは、随分みじめだね」と、伶俐らしい男が云つて、外の人と一しよになつて笑つただけが、偶然純一の耳に止まった。

純一はそれが耳に止まったので、それまで独ひとりで思つていた事の端緒を失つて、ふいといこ

う思った。自分の世間から受けた評に就いてかれこれ云えば、馬鹿にせられるか、厭味と
思われるかに極^きまっている。そんな事を敢^{あえ}てする人はおめでたいかも知れない。厭味なの
かも知れない。それとも實際無頓着^{むとんちやく}に自己を客観^{かくかん}しているのかも知れない。それを心
理的に判断することは、性格を知らないでは出来ない筈だと思った。

瀬戸が座敷の奥の方から、「小泉君」と呼んだ。純一がその方を見ると、瀬戸はもう初
めの所にはいない。隅の方に、子供の手習机を据えて、その上に書類を散らかしている男
と、火鉢を隔てて、向き合っているのである。

席を起つてそこへ行つて見れば、机の上には一円札やら小さい銀貨やらが、書類の側に
置いてある。純一はそこで七十銭の会費を払った。

「席料と弁当代だよ」瀬戸は純一にこう云つて聞せながら、机を構えている男に、「今日
は菓子が出ないのかい」と云った。

まだ返辞をしないうちに、例の赭顔の女中が大きい盆に一人前^{ひとりまえ}ずつに包んだ餅菓子を
山盛にして持つて来て銘々に配り始めた。

配つてしまうと、大きい土瓶に番茶を入れたのを、所々に置いて行く^{ゆく}。

純一が受け取った菓子を手に持ったまま、会計をしている人の机の傍にいと、「おい、

瀬戸」と呼び掛けられて、瀬戸は忙がしそうに立つて行った。呼んだのは、初め這入ったとき瀬戸が話をしていた男である。髪を長く伸した、色の蒼い男である。又何か小声で熱心に話し出した。

人が次第に殖えて来て、それが必ずこの机の傍に来るので、純一は元の席に帰った。余り上り口に近いので、自分の敷いていた座布団だけはまだ人に占領せられずにあつたのである。そこで据わろうと思うと半分ばかり飲みさしてあつた茶碗をひっくり返した。純一は少し慌てて、「これは失敬しました」と云つて袂からハンカチーフを出して拭いた。

「畳が驚くでしょう」

こう云つて茶碗の主は、純一が銀座のどこやらの店で、ふいと一番善いのをと云つて買った、フランドルのバチストで拵えたハンカチーフに目を注いでいる。この男は最初から柱に寄り掛かつて、黙つて人の話を聞きながら、折々純一の顔を見ていたのである。大学の制服の、襟にMの字の附いたのを着た、体格の立派な男である。

一寸調子の変つた返事なので、畳よりは純一の方が驚いて顔を見ていると、「君も画家ですか」と云つた。「いえ。そうではありません。まだ田舎から出たばかりで、なんにも遣つていないのです」

純一はこう云つて、名刺を学生にわたした。学生は、「名刺があつたかしらん」とつぶやきながら隠しを探つて、小さい名刺を出して純一にくれた。大村莊之助としてある。大村はこう云つた。

「僕は医者になるのだが、文学好だもんだから、折々出掛けて来ますよ。君は外国語は何を遣つています」

「フランスを少しばかり習いました」

「何を読んでいます」

「フロオベル、モオパッサン、それから、ブウルジェエ、ベルジックのマアテルリンクな
んぞを些すこばかり読みました」

「らくに読めますか」

「ええ。マアテルリンクなんぞは、脚本は分りますが、論文はむつかしくて困ります」

「どうむつかしいのです」

「なんだか要点が掴つかまえにくいようで」

「そうですよう」

大村の顔を、微かすかな微笑が掠かすめて過ぎた。嘲あざけりの分子なんぞは少しも含まない、温い微笑

である。感激し易い青年の心は、何故なにゆえともなくこの人を頼もしく思った。作品を読んで慕つて来た大石に逢つたときは、その人が自分の想像に画えがいていた人と違つてはいないのに、どうも陰いしい巖いわの前に立つたような心持がしてならなかった。大村という人は何をしている人だか知らない。医科の学生なら、独逸ドイツは出来るだろう。それにフランスも出来るらしい。只これだけの推察が、咄嗟とつさの間に出来たばかりであるのに、なんだか力になって貰われそうな気がする。ニイチエという人は、「己おれは流ながれの岸の欄干だ」と云つたそうだが、どうもこの大村が自分の手で掴つかえることの出来る欄干ではあるまいかと思われてならない。そして純一のこう思う心はその大きい瞳ひとみを透とおして大村の心にも通じた。

この時梯子の下で、「諸君、平田先生が見えました」と呼ぶ声がした。平田というのは拊石うしの氏うじなのである。

七

幹事らしい男に案内せられて、梯子を登つて来る、拊石うしという人を、どんな人かと思つて、純一は見ていた。

少し古びた黒の羅紗服らしやふくを着ている。背丈は中位である。顔の色は蒼いが、アイロニイを帯びた快活な表情である。世間では鷗村と同じように、継子根性まごこのねじくれた人物だと云っているが、どうもそうは見えない。少し赤み掛かった、たつぷりある八字髭はちじひげが、油気なしに上向うえむきに振ねじ上げてある。純一は、髭というものは白くなる前に、四十代で赤み掛かつて来る、その頃でなくては、日本人では立派にはならないものだと思った。

拊石は上り口あがぐちで大村を見て、「何か書けますか」と声を掛けた。

「どうも持つて行つて見て戴くようなものは出来ません」

「ちつと無遠慮に世間へ出して見給え。活字は自由になる世の中だ」

「余り自由になり過ぎて困ります」

「活字は自由でも、思想は自由でないからね」

緩ゆるやかな調子で、人に強い印象を与える詞ことば附である。強い印象を与えるのは、常に思想が靈活に動いていて、それをぴたり適応した言語で表現するからであるらしい。

拊石は会計掛の机の側へ案内せられて、座布団の上へ胡坐あぐらをかいて、小さい紙巻の煙草を出して呑のんでいると、幹事たくが卓たくの向うへ行つて、紹介の挨拶をした。

拊石は不精らしく体を卓の向うへ運んだ。方々の話声の鎮まるのを、暫しばらく待っていて、

ゆつくり口を開く。不断の会話のような調子である。

「諸君からイブセンの話をして貰いたいという事でありました。わたくしもイブセンに就いて、別に深く考えたことはない。イブセンに就いてのわたくしの智識は、諸君の既に有しておられる智識以上に何物もあるまいと思う。しかし知らない事を聞くのは骨が折れる。知っていることを聞くの気楽なるに如かずである。お菓子が出ていようだから、どうぞお菓子を食べながら気楽に聞いて下さい」

こんな調子である。声色せしよくを励ますというような処は少しもない。それかと云つて、評判に聞いている雪嶺せつれいの演説のように訥弁とつべんの能弁だというでもない。平板極まる中に、うちどうかすると非常に奇警な詞が、不用意にして出て来るだけは、雪嶺の演説を速記で読んだときと同じようである。

大分話が進んで来てから、こんな事を言つた。「イブセンは初め諾威ノオルウエイの小さいイブセンであつて、それが社会劇に手を着けてから、大きな欧羅巴ヨロッパのイブセンになつたというが、それが日本に伝わって来て、又ずつと小さいイブセンになりました。なんでも日本へ持つて来ると小さくなる。ニイチエも小さくなる。トルストイも小さくなる。ニイチエの詞を思い出す。地球はその時小さくなつた。そしてその上に何物をも小さくする、最後

の人類がひよこひよこ跳おどつているのである。我等は幸福を発見したと、最後の人類は云つて、目をしばだたくのである。日本人は色々な主義、色々なイスムを輸入して来て、それもてあそを弄もんで目をしばだたいている。何もかも日本人の手に入いつては小さいおもちゃになるのであるから、元が恐ろしい物であつたからと云つて、剛こわがるには当たらない。何も山鹿やまが素行や、四十七士や、水戸浪士を地下に起して、その小さくなつたイブセンやトルストイに對抗させるには及ばないのです」まあ、こんな調子である。

それから新しい事でもなんでもないが、純一がこれまで蓄えて持つている思想の中心を動かされたのは拊石ふうしが諷刺的な語調から、忽然こつぜん真面目まじめになつて、イブセンの個人主義に両面があるということを語り出した処であつた。拊石ふうしは先まず、次第にあらゆる習慣いましめの縛しばを脱だして、個人を個人として生活させようとする思想が、イブセンの生涯の作の上に、所いわけ謂る赤い糸になつて一貫していることを言つた。「種々の別離を己けみは関けした」という様な心持である。これを聞いている間は、純一もこれまで自分が舟に棹さおさして下つて行く順流を、演説者も同舟の人になつて下つて行くように感じていた。ところが、拊石は話頭を一転して、「これがイブセンの自己の一面です、Peer 《ペエル》 Gynt 《ギント》 に詩人的に發揮している自己の一面です、世間的自己です」と結んで置いて、別にイブセンには最

初から他の一面の自己があるということと言った。「若しこの一面がなかったら、イブセンは放縦ほうじゆうを説くに過ぎない。イブセンはそんな人物ではない。イブセンには別に出世間的自己があつて、始終向上して行ゆこうとする。それが Brand 《ブランド》 に於いて發揮せられている。イブセンは何の為に習慣の朽ちたる索つなを引きちぎって棄てるか。ここに自由を得て、身を泥土でいどに委ねゆだようとするのではない。強い翼に風を切つて、高く遠く飛ぼうとするのである」純一はこれを聞いていて、その語氣が少しも莊重に聞かせようとする様子でなく、依然として平坦な会話の調子を維持しているにも拘からず、無理に自分の乗っている船の舳先へさきを旋めらして逆に急流を溯さかのぼらせられるような感じがして、それから暫くの間は、独りで深い思量に耽ふけつた。

譬たとえば長い間集めた物を、一々心覚えをして箱に入れて置いたのを、人に上を下へと搔かき交ぜられたような物である。それを元の通りにするのはむずかしい。いや、元の通りにしようなんぞとは思わない。元の通りでなく、どうにか整頓しようと思う。そしてそれが出来ないのである。出来ないのは無理もない。そんな整頓は固もとより一朝一夕に出来る筈の整頓ではないのである。純一の耳には拊石の詞が遠い遠い物音のように、意味のない雑音になつて聞えている。

純一はこの雑音を聞いているうちに、ふと聴衆の動揺を感じて、殆ど無意識に耳を欬そげだると、丁度拊石がこう云っていた。

「ゾラの Claude 《クロオド》は芸術を求める。イブセンのブランドは理想を求める。その求めるもののために、妻をも子をも犠牲にして顧みない。そして自分も滅びる。そこを藪やぶ睨にらみに睨にらんで、ブランドを諷刺だとさえ云ったものがある。実はイブセンは大真面目である。大真面目で向上の一路を示している。悉しつ皆かいか絶無か。この理想はブランドという主人公の理想であるが、それが自己より出いでたるもの、自己の意志より出でたるものだという所に、イブセンの求めるものの内容が限られている。とにかく道は自己の行く為めに、自己の開く道である。倫理は自己の遵じゅん奉ぽうする為めに、自己の構成する倫理である。宗教は自己の信仰する為めに、自己の建立する宗教である。一言いちげんで云えば、Autonomie 《オオトノミイ》である。それを公式にして見せることは、イブセンにも出来ななだであらう。とにかくイブセンは求める人であります。現代人であります。新しい人であります」

拊石はこう云ってしまった、聴衆は結論だかなんだか分らずにいるうちに、ぶらりとテエブルを離れて前に据わっていた座布団の上に戻った。

あちこちに拍手するものがあつたが、はたが応ぜないので、すぐに止んでしまった。多数は演説が止んでもじつと考えている。一座は非常に静かである。

幹事が閉会を告げた。

下女が鰻飯うなぎめしどんぶりの丼を運び出す。方々で話声はちらほら聞えて来るが、その話もしめやかである。自分自分で考えることを考えているらしい。縛いましめがまだ解けないのである。

幹事が拊石を送り出すを相図に、会員はそろそろ帰り始めた。

八

純一が梯子段の処に立っていると、瀬戸が忙いそがしそうに傍へ来て問うのである。

「君、もうすぐに帰るか」

「帰る」

「それじゃあ、僕は寄って行く処があるから、失敬するよ」

門口かどぐちで別れて、瀬戸は神田の方へ行く。倶楽部へ来たときから、一しよに話していた

男が、跡から足を早めて追つ駈けて行つた。

純一が小川町おがわまちの方へ一人で歩き出すと、背後うしろを大股おおまたに靴で歩いて来る人のあるのに気が附いた。振り返つて見れば、さつき大村という名刺をくれた医科の学生であつた。並ぶともなしに、純一の右側を歩きながら、こう云つた。

「君はどっちへ帰るのです」

「谷中にいます」

「瀬戸は君の親友ですか」

「いいえ。親友というわけではないのですが、国で中学を一しよに遣つたものですから」
「なんだか言いわけらしい返事である。血色の好い、巖がんじょう乗な大村は、純一と歩度を合せるために、余程加減をして歩くらしいのである。小川町の通を須田町の方へ、二人は暫く無言で歩いてゐる。

両側の店にはもう明りが附いている。少し風が出て、土埃ほこりを捲き上げる。看板ががたがた鳴る。天下堂の前の人道を歩きながら、大村が「電車ですか」と問うた。

「僕は少し歩こうと思います」

「元氣だねえ。それじゃあ、僕も不精をしないで歩くとしようか。しかし君は本郷へ廻つては損でしょう」

「いいえ。大した違いはありません」

又暫く詞が絶えた。大村が歩度を加減しているらしいので、純一はなるたけ大股に歩こうとしている。しかし純一は、大村が無理をして縮める歩度は整っているのに、自分の強いて伸ばようとする歩度は乱れ勝になるように感ずるのである。そしてそれが歩度ばかりではない。只なんとなく大村という男の全体は平衡を保っているのに、自分は動揺しているように感ずるのである。

この動揺の性質を純一は分析して見ようとしている。ところが、それがひどくむずかしい。先頃大石に逢った時を顧みれば、彼を大きく思つて、自分を小さく思つたに違いない。しかし彼が何物をか有しているとは思わない。自分も相応に因襲や前極めを破壊している積りでいたのに、大石に逢つて見れば、彼の破壊は自分なんぞより周到であるらしい。自分も今一洗濯ひとせんたくしたら、あんな態度になられるだろうと思つた。然るに今日拊石しかの演説を聞いているうちに、彼が何物をか有しているのが、髻髯ほうふつとして認められた様である。その何物かが氣になる。自分の動揺は、その何物かに与えられた波動である。純一は突然こう云つた。

「一体新人というのは、どんな人を指して言うのでしょうか」

大村は純一の顔をちよいと見た。そして目と口との周囲に微笑の影が閃いた。

「さつき拊石さんがイブセンを新しい人だと云ったから、そう云うんですね。拊石さんは妙な人ですよ。新人というのが嫌いで、わざわざ新しい人と云っているのです。僕がいつか新人と云うと、新人とは漢語で花姫はなよめの事だと云って、僕を冷かしたのです」

話が横道へ逸れるのを、純一はじれったく思つて、又出直して見た。

「なる程旧人と新人ということは、女の事にばかり云つてあるようですね。そんなら僕も新しい人と云いましょう。新しい人はつまり道德や宗教の理想なんぞに捕われていない人なんでしょうか。それとも何か別の物を有している人なんでしょうか」

微笑が又閃く。

「消極的の新人と積極的の新人と、どっちが本当の新人かと云うことになりますね」

「ええ。まあ、そうです。その積極的の新人というものがあるでしょうか」

微笑が又閃く。

「そうですねえ。有るか無いか知らないが、有る筈には相違ないでしょう。破壊してしまえば、又建設する。石を崩しては、又積むのでしょうか。君は哲学を読みましたか」

「哲学に就いては、少し読んで見ました。哲学その物はなんにも読みません」正直に、躊

躊躇せずに答えたのである。

「そうでしょう」

夕ゆうべの昌平橋は雑ざつ沓とつする。内神田の咽喉いんこうを扼やくしている、ここの狹隘きょうあいに、おりおり捲くき起される冷たい埃ほこりを浴びて、影のような群集ぐんじゆが忙せわしげに摩すれ違っている。暫くは話も出来ないのも、影と一しよに急ぎながら空を見れば、仁丹の広告燈が青くなったり、赤くなったりしている。純一は暫く考えて見て云った。

「哲学が幾度建設せられても、その度毎に破壊せられるように、新人も積極的になつて、何物かを建設したら、又その何物かに捕われるのではないでしょうか」

「捕われるのですとも。縄が新しくなると、当分当りどころが違いうから、縛いましめを感じないのだらうと、僕は思っているのです」

「そんなら寧むしろ消極のまままで、懷疑に安住していたらどうでしょう」

「懷疑が安住でしょうか」

純一は一寸窮きつした。「安住と云つたのは、矛盾でした。つまり永遠の懷疑です」

「なんだか咀のろわれたものとも云いそうだね」

「いいえ。懷疑と云つたのも当あたつていません。永遠に求めるのです。永遠の希求です」

「まあ、そんなものでしょう」

大村の詞はひどく冷澹れいたんなようである。しかしその音調や表情あたたかに温みこもが籠こもっているので、純一は不快を感じない。聖堂の裏の塀のあたりを歩きながら、純一は考え考えこんな事を話し出した。

「さつき倶楽部でもお話をしたようですが、僕はマアテルリンクを大抵読んで見ました。それから同じ学校にいた友達だったので、Verhaeren 《フェルハアレン》を読み始めたのです。この間 La 《ラ》 Multiple 《ミュルチプル》 Splendeur 《スプランドヨオル》が来たもんですから、それを国から出て来るとき、汽車で読みました。あれには大分纏まとまった人世観のようなものがあるのですね。妙にこう敬けい度いけんなような態度を取っているのですね。まるで日本なんぞで新人だと云っている人達とは違っているもんですから、へんな心持がしました。あなたの云う積極的新人なのでしょう。日本で消極的な事ばかり書いている新人の作を見ますと、縛はられた縄ほどを解ゆいて行く処ところに、なる程と思う処がありますが、別に深く引き附けられるような感じはありません。あのフェルハアレンの詩なんぞを見ますと、妙な人生観があるので、それが直ぐにこっちの人生観にはならないのですが、その癖あの敬度けいどなような調子に引き寄せられてしまうのです。ロダンが友達だそうですが、丁度ロダ

ンの彫刻なんでも、同じ事だろうと思うのです。そうして見ると、西洋で新人と云われている連中は、皆氣息の通^{かよ}っている処があつて、それが日本の新人とは大分違っているように思うのです。拊石さんのイブセンの話も同じ事です。どうも日本の新人という人達は、拊石の云つたように、小さいではありませんまいか」

「小さいのですとも。あれはClique《クリク》の名なのです」大村は恬^{てん}然^{ぜん}としてこう云つた。

銘々勝手な事を考えて、二人は本郷の通を歩いた。大村の方では田舎もなかなか馬鹿にはならない、自分の知っている文科の学生の或るものよりは、この独学の青年の方が、眼識も能力も優れていると思うのである。

大学前から、道幅のまだ広げられない森川町に掛かるとき、大村が突然こう云つた。

「君、瀬戸には氣を着けて交際し給えよ」

「ええ。分かっています。[Bohe me] 《ボエエム》ですから」

「うん。それが分かっていたら好いのです」

近いうちに大村の西片町の下宿を尋ねる約束をして、純一は高等学校の角を曲つた。

九

十一月二十七日に有樂座でイブセンの John 《ジョン》 Gabriel 《ガブリエル》 Borkmann 《ボルクマン》 が興行せられた。

これは時代思潮の上から観れば、重大なる出来事であると、純一は信じているので、自由劇場の発表があるのを待ち兼ねていたように、早速会員になつて置いた。これより前に、まだ純一が国にいた頃、シエエクスピイア興行があつたこともある。しかしシエエクスピイアやギョオテは、縦い^{たと}どんなに旨く^{うま}演ぜられたところで、結構には相違ないが、今の青年に痛切な感じを与えることはむずかしからう。痛切でないばかりではない。事に依ると、あんなクラツシツクな、俳諧^{はいかい}の用語で言えば、一時流行でなくて千古不易の方に属する作を味う余裕は、青年の多数には無いと云つても好からう。極端に言えば、若しシエエクスピイアのような作が新しく出たら、これはドラムではない、テアトルだなんぞと云うかも知れない。その韻文をも冗漫だと云うかも知れない。ギョオテもそうである。ファウス^{モウロン}トが新作として出たら、青年は何と云うだろうか。第二部は勿論であるが、第一部でも、これは象徴ではない、アレゴリイだとも云い兼ねまい。なぜと云うに、近世の写実の強い

刺戟に慣れた舌には、百年前の落ち着いた深い趣味は味にくいからである。そこでその古典的なシェイクスピアがどう演ぜられたか。当時の新聞雑誌で見れば、ヴェネチアの街が駿河台の屋鋪町で、オセロは日清戦争時代の将官の肋骨服に、三等勲章を佩びて登場したということである。その舞台や衣裳を想像して見たばかりで、今の青年は侮辱せられるような感じをせずにはいられないのである。

二十七日の晩に、電車で数寄屋橋まで行つて、有楽座に這入ると、パルケットの四列目あたりに案内せられた。見物はもうみんな揃つて、興行主の演説があつた跡で、丁度これから第一幕が始まるという時であつた。

東京に始めて出来て、珍らしいものに言い囃されている、この西洋風の夜の劇場に這入つて見ても、種々の本や画で、劇場の事を見ている純一が為めには、別に目を駭かすこともない。

純一の席の近処は、女客ばかりであつた。左に二人並んでいるのは、まだどこかの学校にでも通つていそうな廂髪ひさがみの令嬢で、一人は縹色はなだいろうの袴はかま、一人は堇色すみれいろの袴はを穿はいている。右の方にはコートを着たままで、その上に毛の厚い skunks 《スカンクス》の襟巻をした奥さんがいる。この奥さんの左の椅子が明いていたのである。

純一が座に着くと、何やら首を聚めて話していた令嬢も、右手の奥さんも、一時に顔を振り向けて、純一の方を向いた。縹色のお嬢さんは赤い円顔で、菫色のは白い角張った顔である。その角張った顔が何やらに似ている。西洋人が胡桃を噛み割らせる、恐ろしい口をした人形がある。あれを優しく女らしくしたようである。国へ演説に来たとき、一度見た事のある島田三郎という人に、どこやら似ている。どちらも美しくはない。それと違って、スカンクスの奥さんは凄じような美人で、鼻は高過ぎる程高く、切目の長い黒目勝の目に、有り余る媚がある。誰やらの奥さんに、友達を引き合せた跡で、「君、今の目附は誰にでもするのだから、心配し給うな」と云ったという話があるが、まあ、そんな風な目である。真黒い髪が多過ぎ長過ぎるのを、持て余しているというように見える。お嬢さん達はすぐに東西の棧敷を折々きよろきよろ見廻して、前より少し声を低めたばかり、大そうな用事でもあるらしく話し続けている。奥さんは良や久しい間、純一の顔を無遠慮に見ていたのである。

「そら、幕が開いてよ」と縹のお嬢さんが菫のお嬢さんをつついた。「いやあね。あんまりおしやべりに実が入って知らないでいたわ」

棧敷が聞くなる。さすが会員組織で客を集めただけあって、所々の話声がぱったり止む。

舞台では、これまでの日本の芝居で見物の同情を惹きそうな理窟を言う、エゴイスチックなボルクマン夫人が、倅せがれの来るのを待っている処へ、倅ではなくて、若かった昔の恋の競争者で、情に脆いもろ、じたらくなような事を言う、アルトリュスチックな妹エルラが来て、長い長い対話が始まる。それを聞いているうちに、筋の立つた理窟を言う夫人の、強そうで弱みのあるのが、次第に同情を失って、いくじのなさそうな事を言う妹の、弱そうで底力のあるのに、自然と同情が集まって来る。見物は少し勝手が違うのに気が附く。対話には退屈しながら、期待の情に制せられて、息を屏はめて聞いているのである。ちと大き過ぎた二階の足音が、破産した銀行頭取だと分かる所で、こんな影を画くような手段に馴れない見物が、始めて新しい刺戟を受ける。息子の情婦のヴィルトン夫人が出る。息子が出る。感情が次第に激して来る。皆引つ込んだ跡に、ボルクマン夫人が残って、床の上に身を転がして煩悶はんもんするところで幕になった。

見物の席がぱつと明るくなった。

「ボルクマン夫人の転がるのが、さぞ可笑おかしかろうと思ったが、存外可笑おかしくないことね」と董色が云った。

「ええ。可笑しくなつてよ。とにかく、変つていて面白いわね」と縹色が答えた。

右の奥さんは、幕になるとすぐ立ったが、間もなく襟巻とコオトなしになって戻って来た。空気が暖あたたかになつて来たからであろう。鶉うずら縮ちぢり緬めんの上着に羽織、金こん春はる式しき唐織からおりの丸帯であるが、純一は只黒ずんだ、立派な羽織を着ていると思つて見たのである。それから膝ひざの上に組み合せている指に、殆ど一本一本指環ゆびわが光つているのに気が着いた。

奥さんの目は又純一の顔に注がれた。

「あなたは脚本を読んでいらつしやるのでしょうか。次の幕はどんな処でございますの」

落ちて着いた、はつきりした声である。そしてなんとなく金きん石せきの響を帯びているように感ぜられる。しかし純一には、声よりは目の閃きが強い印象を与えた。横着らしい笑えみが目
の底に潜んでいて、口で言っている詞ことばとは、まるで別な表情をしているようである。そう
思うと同時に、左の令嬢二人が一斉に自分の方を見たのが分かった。

「こん度の脚本は読みませんが、フランス訳で読んだことがあります。次の幕はあの足音
のした二階を見せることになっています」

「おや、あなたフランス学者」奥さんはこう云つて、何か思うことあるらしく、につこり
笑つた。

丁度この時幕が開いたので、答こたへることを須もちいない問のような、奥さんの詞は、どうい

う感情に根ざして発したもののか、純一には分からずにしまった。

舞台では檻おりの狼おおかみのボルクマンが、自分にピアノを弾いて聞せてくれる小娘の、小さい心の臓をそつと開けて見て、ここにも早く失意の人の、苦痛の萌芽ほうがが籠かごもっているのを見て、強いて自分の抑鬱不平の心を慰めようとしている。見物は只娘フリーダの、小鳥の囀さえずるような、可哀かわゆらしい声を聞いて、浅草公園の菊細工のある処に這入って、紅雀の籠かごの前に足を留めた時のような心持になっている。

「まあ、可哀かわいなことね」と縹色のお嬢さんの咄せせやくのが聞えた。

小鳥のようなフリーダが帰って、親鳥の失敗詩人が来る。それも帰る。そこへ昔命に懸けて愛した男を、冷酷なきようだいに夫にせられて、不治の病に体のしんに食い込まれているエルラが、燭しよくを秉とつて老いたる恋人の檻かごに這入って来る。妻になったという優勝の地位の象徴でもあるように、大きい巾きんを頭きに巻き附けた夫人グンヒルドが、扉の外で立聞をして、恐ろしい幻のように、現れて又消える。爪牙そうがの鈍った狼のたゆたうのを、大きい愛の力で励まして、エルラはその幻の洞窟どうくつたる階下の室に連れて行ゆこうとすると、幕が下りる。

又見物の席が明るくなる。ざわざわと、風が林をゆするように、人の話声が聞えて来る。

純一は又奥さんの目が自分の方に向いたのを知覚した。

「これからどうなりますの」

「こん度は又二階の下です。もうこん度で、あらかた解決が附いてしまします」

奥さんに詞を掛けられてから後は、純一は左手の令嬢二人に、鋭い観察の対象にせられたように感ずる。令嬢が自分の視野に映じている間は、その令嬢は余所よそを見ているが、正面を向くか、又は少しでも右の方へ向くと、令嬢の視線が矢のように飛んで来て、自分の項うなじに中るのを感じずる。見ていない所に見える、不愉快な感じである。Y県にいた時の、中学の理学の教師に、山村というお爺いさんがいて、それが Spiritisme 《スピリチスム》に關する、妙な迷信を持つていた。その教師が云うには、人は誰でも体の周圍まわりに特殊な雰囲気きふきを有している。それを五官を以てせずして感ずるので、道を背後うしろから歩いて来る友達が誰だたれということは、見返らないでも分かると云った。純一は五官を以てせずして、背後はいごに受ける視線を感じるのが、不愉快でならなかった。

幕あが開いた。靦てきめん面に死と相見ているものは、姑息こそくに安んずることを好まない。老いたる処女エルラは、老いたる夫人の階下の部屋へ、檻けものの獸けものを連れて来る。鷸いっぽう蚌ばうならぬ三人に争われる、獲えものの青年エルハルトは、夫人に呼び戻されて、この場へ帰る。母にも従

わなない。父にも従わなない。情誼じょうぎの縄で縛ろうとするおばにも従わなない。「わたくしは生きようと思います」と云う、猛烈な叫声を、今日の大向うを占めている、数多あまたの学生連に喝かつさい采せられながら、萎しおれる前に、吸い取られる限かぎりの日光を吸い取ろうとしている花のようなヴィルトン夫人に連れられて、南国をさして雪中を立とうとする、銀の鈴の附いた櫓そりに乗りに行く。

この次の幕間まくあいであつた。少し休憩の時間が長いということが、番附にことわつてあつたので、見物が大抵一旦席を立つた。純一は丁度自分が立とうとすると、それより心持早く右手の奥さんが立つたので、前後から人に押されて、奥さんの体に触れては離れ、離れては触れながら、外の廊下の方へ歩いて行く。微かすかな *parfum* 《パルフュウム》の匂においがおりおり純一の鼻を襲うのである。

奥さんは振り向いて、目で笑つた。純一は何を笑つたとも解かいせぬながら、行儀好く笑い交した。そして人に押されるのが可笑しいのだろうと、跡から解釈した。

廊下に出た。純一は人が疎まばらになつたので、遠慮して奥さんの傍そばを離れようと思つて、わざと歩度を緩め掛けた。しかしまだ二人の間に幾いくばく何の距離も出来ないうちに、奥さんが振り返つてこう云つた。

「あなたフランス語をなさるのなら、宅に書物が沢山ございますから、見にいच्छやいまし。新しい物ばかり御覧になるのかも知れませんが、古い本にだつて、宜よろしいものはございますでしょう。御遠慮はない内うちなのでございますの」

前から識しり合っている人のように、少しの窘きんぱく迫の態度もなく、歩きながら云われたのである。純一は名刺を出して、奥さんに渡しながら、素直にこう云った。

「わたくしは国から出て参ったばかりで、谷中に家を借りておりますが、本は殆どなんにも持っていないと云つても宜しい位です。もし文学の本がございましたと、少し古い本で見たいものが沢山ございます」

「そうですか。文学の本がございましたの。全集というような物が揃えてございますの。その外は歴史のような物が多いのでしょうか。亡くなった主人は法律学者でしたが、その方の本は大学の図書館に納めてしまいましたの」

奥さんが未亡人びぼうじんだということを、この時純一は知った。そして初めて逢つた自分に、宅へ本を見に來いなんぞと云われるのは、一家の主権者になつていられるからだなと思つた。奥さんは姓名だけの小さく書いてある純一の名刺を一寸ちよつと読んで見て、帯の間から繕し珍ゆちんの紙入を出して、それへしまつて、自分の名刺を代りにくれながら、「あなた、お国

は」と云った。

「Y県です」

「おや、それでは亡くなった主人と御同国でございますのね。東京へお出^{いで}になったばかりだというのに、ちつともお国詞が生まれませんか」

「いいえ。折々出ます」

奥さんの名刺には坂井れい子と書いてあった。純一はそれを見ると、すぐ「坂井恒^{こう}先生の奥さんでいらつしやったのですね」と云つて、丁寧に辞儀をした。

「宅を御存じでございましたの」

「いいえ。お名前だけ承知してましたのです」

坂井先生はY県出身の学者として名高い人であった。Montesquieu 《モンテスキュー》の *Esprit 《エスプリ》 des 《デ》 lois 《ロア》* を漢文で訳したのなんぞは、評判が高いばかりで、広く世間には行われなかったが、Code 《コオド》 [Napoleon] 《ナポレオン》の典型的な翻譯^{ほんやく}は、先生が亡くなられても、価値を減ぜずにいて、今も坂井家では、これによって少からぬ収入を得ているのである。純一も先生が四十を越すまで独身でいて、どうしたわけか、娘にしても好^いいような、美しい細君を迎えて、まだ一年と立たないうち

に、脊髄病で亡くなられたということは、中学にいた時、噂に聞いていたのである。

噂はそれのみではない。先生は本職の法科大学教授としてよりは、代々の当路者から種々なる用事を言い附けられて、随分多方面に働いておられたので、亡くなられた跡には一々廉の遺産があつた。それを未亡人が一人で管理していて、旧藩主を始め、同県の人と全く交際を絶つて、何を当てにしているとも分らない生活をしていられる。子がないのに、養子をせられるでもない。誰も夫人と親密な人というもののあることを聞かない。先生の亡くなる僅か前に落成した、根岸の「*WIND*」《ヴィルラ》風の西洋造に住まっておられるが、静かに夫の跡を弔っていられるらしくはない。先生の存生の時よりも派手な暮らしをしておられる。その生活は一の秘密だということであつた。

純一が青年の空想は、国でこの噂話を聞いた時、種々な幻像を描き出していたので、坂井夫人という女は、面白い小説の女主人公のように、純一の記憶に刻み附けられていたのである。

純一は坂井先生の名を聞いていたという返事をして、奥さんの顔を見ると、その顔には又さつきの無意味な、若くは意味の掩われている微笑が浮んでいる。丁度二人は西の階段の下に佇んでいたのである。

「上へ上がって見ましようか」と奥さんが云った。

「ええ」

二人は階段を登った。

その時上の廊下から、「小泉君じゃあないか」と声を掛けるものがある。上から四五段目の処まで登っていた純一が、仰向いて見ると、声の主は大村であった。

「大村君ですか」

この返事を見ると、奥さんは頗^{あじ}で知れない程の会釈をして、足を早めて階段を登ってしまつて、一人で左へ行つた。

純一は大村と階段の上り口に立っている。丁度 Buffer 《ビュツフエエ》と書いて、その下に登つて左を指した矢の、書き添えてある札を打ち附けた柱の処である。純一は懷かしげに大村を見て云った。

「好く丁度一しよになったものですね。不思議なようです」

「なに、不思議なものかね。興行は二日しかない。我々は是非とも来る。そうして見ると、二分の一の『probabilite』《プロバビリテエ》で出合うわけでしょう。ところが、ジダスカリアの連中なんぞは、皆大抵続けて来るから、それが殆ど一分の一になる」

「瀬戸も来ていますかしらん」

「いたようでしたよ」

「これ程立派な劇場ですから、foyer《フオアイエエ》とでも云ったような散歩場も出来ているでしょうね」

「出来ていないのですよ。先ずこの廊下あたりがフオアイエエになっている。広い場所があつちにあるが、食堂になつていのです。日本人は歩いたり話したりするよりは、飲食をする方を好くから、食堂を広く取るようになるでしょう」

純一の左の方にいた令嬢二人が、手を繋ぎ合つて、頻りに話しながら通つて行つた。その外種々^{いろいろ}な人の通る中で、大村がおりおりあれは誰だと教えてくれるのである。

それから純一は、大村と話しながら、食堂の入口まで歩いて行つて、おもちゃ店^{みせ}のあるあたりに暫く立ち留まつて、食堂に出入する人を眺めていると、ベルが鳴つた。

純一が大村に別れて、階段を降りて、自分の席へ行くとき、腰掛の列の間の狭い道で人に押されていると、又 *parfum* 《パルフュウム》の香^かがする。振り返つて見て、坂井の奥さんの謎^{なぞ}の目に出合つた。

雪の門口^{かどぐち}の幕が開く。ヴィルトン夫人に娘を連れて行かれた、不遇の楽天詩人たる書

記は、銀の鈴を鳴らして行く櫓に跳飛はねとばされて、足に怪我をしながらも、尚娘なおの前途を祝福して、寂しい家の燈ともの下に泣いている妻を慰めに帰って行く。道具が変わって、丘陵の上になる。野心ある実業家たる老主人公が、平生心にえがいていた、大工場の幻を見て、雪のベンチの上に瞑めい目すると、優しい昔の情人と、反目の生活を共にした未亡人とが、屍かばねの上に握手して、幕は降りた。

出口が込み合うからと思つて、純一は暫く廊下に立ち留まつて、舞台の方を見ていた。舞台では、一旦卸した幕を上げて、俳優が大詰の道具の中で、大詰の姿勢を取つて、写真を写させている。

「左様なら。御本はいつでもお出いでになれば、御覧に入れます」

純一が見返る暇に、坂井夫人の後姿は、出口の人込みの中にまぎれ入ってしまった。返事も出来なかったのである。純一は跡を見送りながら、ふいと思つた。「どうも己おれは女の人に物を言うのは、窮屈でならないが、なぜあの奥さんと話をするのを、少しも窮屈に感じなかったのだろう。それにあの奥さんは、妙な目の人だ。あの目の奥には何があるかしらん」

帰るときに気を付けていたが、大村にも瀬戸にも逢はなかった。左隣にいたお嬢さん二

人が頻りに車夫の名を呼んでいるのを見た。

十

純一が日記の断片

十一月三十日。晴。毎日几帳面きちようめんに書く日記でもあるように、天気を書くのも可笑しい。どうしても己には続いて日記を書くということが出来ない。こないだ大村を尋ねて行った時に、その話をしたら、「人間は種々いろいろなものに縛られているから、自分で自分を縛らなくても好いいいじゃないか」と云った。なる程、人間が生きていたと云って、何も齟齬そごとして日記を附けて置かねばならないと云うものではあるまい。しかし日記に縛られずに何をするかが問題である。何の目的の為に自己を解放するかが問題である。

作る。製作する。神が万物を製作したように製作する。これが最初の考えであつた。しかしそれが出来ない。「下宿の二階に転がって、何が書けるか」などという批評家の詞を見る度に、そんなら世界を周遊したら、誰にでもえらい作が出来るかと反問して遣りやたいと思う反抗が一面に起ると同時に、己はその下宿屋の二階もまだ知らないと思う怯きよう

懦^だが他の一面に萌^{きざ}す。丁度 Titanos 《チタノス》が岩石を砕いて、それを天に擲^{なげう}とうとしているのを、傍^{とが}に尖^{とが}った帽子を被^{かぶ}った一寸坊が見ていて、顔を蹙^{しか}めて笑っているようなものである。

そんならどうしたら好^いいか。

生きる。生活する。

答は簡単である。しかしその内容は簡単どころではない。

一体日本人は生きるということを知っているだろうか。小学校の門を潜^{くぐ}ってからというもの、一しう懸命にこの学校時代を駆け抜けようとする。その先には生活があると思うのである。学校というものを離れて職業にあり附くと、その職業を為^なし遂^なげてしまおうとする。その先には生活があると思うのである。そしてその先には生活はないのである。

現在は過去と未来との間に劃^{かく}した一線である。この線の上に生活がなくては、生活はどこにもないのである。

そこで己は何をしている。

今日はもう半夜を過ぎている。もう今日ではなくなっている。しかし変に気が澄んでい

て、寐ねようと思つたつて、寐ねられそうにはない。

その今日でなくなつた今日には閱歴がある。それが人生の閱歴、生活の閱歴でなくてはならない筈はずである。それを書こうと思つて久しく徒いたずらに過ぎ去る記念に、空虚な数字のみを留とどめた日記の、新しいペエジを開いたのである。

しかし己の書いている事は、何を書いているのだから分らない。実は書くべき事が大きいある筈で、それが殆ど無いのである。やはり空虚な数字のみにして置いた方が増しかも知れないと思う位である。

朝は平凡な朝であつた。極きまつて二三日置きに国から来る、お祖母ばあ様の手紙が来た。食物しょくもつに気を附けろ、往來で電車や馬車や自動車に障さわつて怪我をするなどというような事が書いてあつた。食物や車の外には、危険物のあることを知らないのである。

それから日曜だというので、瀬戸が遣つて来た。ひどく知己らしい事を言う。何か己とあの男と秘密を共有して、それを同心戮りくりよく力して隠蔽いんぺいしている筈だというような態度を取つて来る。そして一日の消遣策しょうけんさくを二つ三つ立てて己の採択に任せる。その中に例の如く une 《ユヌ》 direction 《ジレクション》 dominante 《ドミナント》がある。それは磁石の針の如くに、かの共有している筈の秘密を指しているのである。己はいつもな

るべくそれと方向を殊にしている策を認容するのであるが、こん度はためしにどれをも廃棄して、「きようは僕は内で本を読むのだ」と云つて見た。その結果は己の予期した通りであつた。瀬戸は暫くもじもじしていたがとうとう金を貸せと云つた。

己にはかれの要求を満足させることは、さほどむずかしくはなかつた。しかし己は中学時代に早く得ている経験を繰り返したくなかつた。「君こないだのもまだ返さないで、甚だ濟まないが」と云うのは尤も無邪気なのである。「長々難有う」と云つて一旦出して置いて、改めてプラス幾らかの要求をするというのは古い手である。それから一番振つているのは、「もうこれだけで丁度になりますからどうぞ」というのであつた。端たのないようにする物、纏めて置く物に事を闕いて、借金を纏めて置かないでも好きそうなものである。己はそういう経験を繰り返したくなかつた。そこで断然初めからことわることにした。然るにそのことわるといふことの経験は甚だ乏しい。己だつて国から送つて貰うだけの金を何々に遣うという予算を立てているから、不用な金はない。しかしその予算を狂わせれば、貸されない事はない。かれの要求するだけの金は現に持っているのである。それを無いと云おうか。そんな嘘は衝きたくない。又嘘を衝いたつて、それが嘘だということは、先方へはつきり知れている。それは不愉快である。

つい国を立つすぐ前である。やはりこんな風に心中でとつ置いつした結果、「君これは返さなくても好^いが、僕はこれきり出さないよ」と云った事があった。そしてその友達とはそれきり絶交の姿になった。実につまらない潔癖であつたのだ。嘘を衝きたくないからと云つて、相手の面目を潰^{つぶ}すには及ばないのである。それよりはまだ嘘を衝いた方が好^よいかも知れない。

己は勇氣を出して瀬戸にこう云つた。「僕はこれまで悪い経験をしている。君と僕との間には金銭上の關係を生ぜさせたくない。どうぞその事だけは已^やめてくれ給え」と云つた。瀬戸は驚いたような目附をして己の顔を見ていたが、外の話をして二つ三つして、そこそこに歸つてしまった。あの男は己よりは世慣れている。多分あの事の爲めに交際を廢^やめはすまい。只その態度を変えるだろう。もう「君はえらいよ」は言わなくなつて、却^{かえつ}て少しは前より己をえらく思うかも知れない。

しかし己はこんな事を書く積りで、日記を開^あけたのではなかった。目的の不^{ふたしか}慥な訪問をする人は、故^こらに迂^う路を取る。己は自分の書こうと思う事が、心にはつきり分かつていないので、強いて余計な事を書いているのではあるまいか。

午後から坂井夫人を訪ねて見た。有樂座で識りあいになつてから、今日尋ねて行く^ゆまで

には、実は多少の思慮を費していた。行こうか行くまいかと、理性に問うて見た。フランスの本が集めてあるというのだから、往つて見たら、利益を得ることもあろうとは思つたが、人の噂に身の上が疑問になつてゐる奥さんの邸に行くのは、好くあるまいかと思つたところが、理性の上で *pro* 《プロウ》の側の理由と *contra* 《コントラ》の側の理由とが争つてゐる中へ、意志が容喙した。己は往つて見たかつた。その往つて見たかつたというのは、書物も見たかつたには相違ない。しかし容赦なく自己を解剖して見たら、どうもそればかりであつたとは云われまい。

己はあの奥さんの目の奥の秘密が知りたかつたのだ。

有楽座から帰つてから、己はあの目を折々思出した。どうかすると半ば意識せずに思ひ出して、それを意識してはつと思つたこともある。言わばあの目が己を追い掛けていた。或はあの目が己を引き寄せようとしていたと云つても好いかも知れない。実は理性の争に、意志が容喙したと云うのは、主客を顛倒した話で、その理性の争というのは、あの目の磁石力に対する、無力なる抵抗に過ぎなかつたかも知れない。

とうとうその抵抗に意志の打ち勝ってしまったのが今日であつた。己は根岸へ出掛けた。家は直ぐ知れた。平らに苅り込んだ櫛の木が高く黒板塀の上に聳えているのが、何かの

秘密を蔵しているかと思われるような、外観の陰気な邸であった。石の門もんばしら柱に鉄格子の扉が取り附けてあつて、それが締めて、脇の片扉だけが開あいていた。門内の左右を低い籠かご塀へいで為切しきつて、その奥に西洋風に戸を締めた入口がある。バルを押すと、美しい十四五の小間使が出て、名刺を受け取つて這はい入つて、間もなく出て来て「どうぞこちらへ」と案内した。

通されたのは二階の西洋間であつた。一番先に目に附いたのは Watteau 《ワットオ》 かの何かの画を下画に使つたらしい、美しい gobelins 《ゴブラン》 であつた。園そのの木立の前で、立っている婦人の手に若い男が接せつぶん吻ぶんしている図である。草木の緑や、男女の衣服の赤や、紫や、黄のかすんだような色が、丁度窓から差し込む夕日を受けて眩まばゆくない、心持の好い調子に見えていた。

小間使が茶をもて来て、「奥様が直ぐにいらっしゃいます」と云つて、出て行つた。茶を一口飲んで、書籍の立て並べてある棚の前に行つて見た。

書棚の中にある本は大抵己のあるだろうと予期していた本であつた。Cornelle 《コルネイユ》と Racine 《ラシイヌ》と [Molière] 《モリエール》とは立派に製本した全集が揃そろえてある。それから Voltaire 《ヴォルテール》の物や Hugo 《ユウゴオ》の物が大分あ

る。

背革の文字をあちこち見ているところへ、奥さんが出て来られた。

己は謎らしい目を再び見た。己は誰も云いそうな、簡単に平凡な詞ことばと矛盾しているような表情を再びこの女子おんなの目の中に見出した。そしてそれを見ると同時に、己のここへ来たのは、コルネイユやラシヌに引き寄せられたのではなくて、この目に引き寄せられたのだと思つた。

己は奥さんとどんな会話をしたかを記憶しない。この記憶の消え失せたのはインテレクトの上の余り大きい損耗ではないに違いない。しかし奇妙な事には、己の記憶は決して空虚ではない。談話を忘れる癖に或る単語を覚えてゐる。今一層適切に言えば、言語を忘れて音響を忘れないでゐる。或る単語が幾つか耳の根に附いてゐるようなのは、音響として附いてゐるのである。

記憶の今一つの内容は奥さんの挙動である。体の運動である。どうして立つておられたか、どうして腰を掛けられたか、又指の尖さきの余り細り過ぎてゐるような手が、いかに動かずに、殆ど象徴的に膝の上に繋ぎ合わされてゐたか、その癖その同じ手が、いかに敏びんしよ捷ていに、女中の運んで来た紅茶を取り次いで渡したかというような事である。

こういう音響や運動の記憶が、その順序の不^{ふたしか}確な割に、その一々の部分がはつきりとして残っているのである。

ここに可笑^{おか}しい事がある。己は奥さんの運動を覚えているが、その静止しておられる状態に対しては記憶が頗^{すこぶ}る臆^{おぼろげ}気なのである。その美しい顔だけでも表情で覚えているので、形で覚えているのではない。その目だけでもそうである。国にいた時、或る爺^{じじ}いが己に、牛の角と耳とは、どちらが上で、どちらが下に附いておりますかと問うた。それ位の事は己も知っていたから、直ぐに答えたら、爺^{おや}いが云った。「旦那方でそれが直ぐにお分かりになるお方はめつたにござりません」と云った。形の記憶は誰^{たれ}も乏しいと見える。独り女の顔ばかりではない。

そんなら奥さんの着物に就いて、どれだけの事を覚えているか。これがいよいよ覚束^{おぼつか}ない。記憶は却て奥さんの詞をたどる。己が見るともなしに、奥さんの羽織の縞を見ていると、奥さんが云われた。「おかしいでしょう。お婆あさんがこんな派手な物を着て。わたしは昔の余所行^{よそゆき}を今の不断着にしますの」と云われた。己はこの詞を聞いて、始^{はじめ}てなる程そうかと思つた。華美に過ぎるというような感じは己にはなかった。己には只着物の美しい色が、奥さんの容姿^{すがた}には好く調和しているが、どこやら世間並でない処があるという

ように思われたばかりであつた。

己の日記の筆はまだ迂路を取っている。己は怯懦である。

久しく棄てて顧みなかつたこの日記を開いて、筆を把つてこれに臨んだのは何の爲めであるか。或る閱歷を書こうと思つたからではないか。なぜその閱歷を為す勇氣があつて、それを書く勇氣がないか。それとも勇氣があつて敢て爲したのではなくて、人に余儀なくせられて漫りに爲したのであるか。漫りに爲して恥じないのであるか。

己は根岸の家の鉄の扉を走つて出たときは血が涌き立つていた。そして何か分からない爽快を感じていた。一種の力の感じを持つていた。あの時の自分は平生の自分とは別であつて、平生の自分はあの時の状態と比べると、脈のうちに冷たい魚の血を蓄えていたのではないかとさえ思われるようであつた。

しかしそれは体の感じであつて、思想は混沌としていた。己は最初は大股に歩いた。薩摩下駄が寒い夜の土を踏んで高い音を立てた。そのうちに歩調が段々に緩くなって、鶯坂の上を西へ曲つて、石燈籠の列をなしている、お霊屋の前を通る頃には、それまで膚を燃やしていた血がどこかへ流れて行つてしまつて、自分の顔の蒼くなつて、膚に粟を生ずるのを感じた。それと同時に思想が段々秩序を恢復して來た。澄んだ喜びが涌い

て来た。譬^{たと}えば paroxysme 《パロクシスム》をなして発作する病を持つているものが、その発作の経過し去^{のち}った後に、安堵^{あんど}の思をするような工合であつた。己は手に一卷のラシイヌを持つていた。そしてそれを返しに行^いかなくてはならないという義務が、格別愉快な義務でもないように思われた。もうあの目が魔力^{たくましゆ}を逞^{たくま}うして、自分を引き寄せることが出来なくなつたのではあるまいかと思われた。

突然妙な事が己の記憶から浮き上がった。それは奥さんの或る姿勢である。己がラシイヌを借りて帰ろうとすると、寒いからというので、小間使に言い付けて、爛^{かん}をした葡萄^{ぶどうし}酒を出させて、己がそれを飲むのをじつと見ていながら、それまで前^{まえ}屈^{かが}みになつて掛けていられた長椅子に、背を十分に持たせて白足袋^はを穿^はいた両足をずっと前へ伸ばされた。記憶から浮き上がったのは意味のない様なあの時の姿勢である。

あれを思い出すと同時に、己は往^ゆくときから帰るまでの奥さんとの對話を回顧して見て、一つも愛情にわたる詞のなかつたのに驚いた。そしてあらゆる小説や脚本が虚構ではあるまいかと疑つて見た。その時ふいと Aude 《オオド》という名が思い出された。只オオドの目は海のように人を漂わしながら、死せる目であつた、空虚な目であつたというのに、奥さんの謎の目は生きているだけが違う。あの目はいろいろな事を語つた。しかしあの姿

勢も何事をか己に語つたのである。あんな語りようは珍らしい。飽くまで行儀正しい処と、一変して飽くまで *frivole* 《フリヴオル》な処とのあるのも、あれもオオドだと、つくづく思いながら歩いていたら、美術学校と図書館との間を曲がる曲がり角で、巡査が突然角燈を顔のところへ出したので、びっくりした。

己は今日の日記を書くのに、目的地に向つて迂路を取ると云つたが、これでは遂に目的地を避けて、その外辺を一周したようなものである。しかし己は知らざる人であつたのが、今日知る人になつたのである。そしてその一時涌き立つた波が忽ち又斂^{たちま}まって、まだその時から二時間余りしか立たないのに、心は哲人の如くに平静になっている。己はこんな物とは予期していなかつた。

予期していなかつたのはそればかりではない。己が知る人になるのに、こんな機縁で知る人になろうとも予期していなかつた。己は必ず戀愛を待つて、始て知る人になろうとも思わなかつたが、又戀愛というものなしに、自衛心が容易に打ち勝たれてしまおうとも思わなかつた。そしてあの坂井夫人は決して決して己の戀愛の対象ではないのである。

己に内面からの衝動、本能の策^{さく}励^{れい}のあつたのは己に^す久しい事である。己は心が不安になつて、本を読んでいるのに、目が徒らに文字を見て、心がその意義を^た繹^すねることの出来

なくなることがあった。己はふいと何の目的もなく外に出たくなって飛び出して、忙がし
 げに所々しよしよを歩いていて、その途中で自分が何物かを求めているのに気が付いて、あのの
 autier 《ゴーチエエ》の Mademoiselle 《マドモアセユ》 Maupin 《モオパン》にある少年
 のように女を求めているのに気が付いて、自ら咎めとがはしなかったが、自ら嘲あざけったことがあ
 る。あの時の心持は妙な心持であった。或る aventure 《アヴァンチュウル》に遭遇して見
 たい。その相手が女なら好い。そしてその遭遇に身を委ゆたねてしまいか否かは疑問である。
 その刹那せつなに於ける思慮の選択か、又は意志の判断に待つのである。自分の体は愛惜すべき
 ものである。容易に身を委ねてしまいたくはない。事に依つたら、女に遇あつて、女が己に
 許すのに、己は従わないで、そして女をなるべく侮辱せず、なだめて慰藉いしやして別れたら、
 面白からう。そうしたら、或は珍らしい純潔な交まじわりが成り立つまいものでもない。いやいや。
 それは不可能であろう。西洋の小説を見るのに、そんな場合には女は到底侮辱感ぜずには
 いないものらしい。又よしや一時純潔な交のようなものが出来ても、それはきつと似て
 非なるもので、その純潔は汚流おとくの繰延くりのべに過ぎないだろう。所詮そうそう先の先までは分
 かるものではない。とにかくアヴァンチュウルに遭遇して見てからの事である。まあ、こ
 んな風な思量が、半ば意識の閬しきいの下に、半ばその閬を躐こえて、心の中に往来していたこと

がある。そういう時には、己はそれに気が付いて、意識が目をはつきり醒ますと同時に、己はひどく自ら恥じた。己はなんという怯懦な人間だろう。なぜ真の生活を求めようとしてないか。なぜ猛烈な恋愛を求めようとしてないか。己はいくじなしだと自ら恥じた。

しかしとにかく内面からの衝動はあった。そして外面からの誘惑もないことはなかった。己は小さい時から人に可哀かわゆがられた。好い子という詞が己の別名のように唱えられた。友達と遊んでいると、年長者、殊に女性の年長者が友達の侮辱を基礎にして、その上に己の名誉の肖像を立ててくれた。好い子たる自覚は知らず識らずの間に、己の影を顧みて自ら喜ぶ情を養成した。己の〔vanite〕《ヴァニTEE》を養成した。それから己は単に自分の美貌を意識したばかりではない。己は次第にそれを利用するようになった。己の目で或る見かたをすると、強情な年長者が脆く譲歩してしまうことがある。そこで初めは殆ど意識することなしに、人の意志の抗抵を感じるとき、その見かたをするようになった。己は次第にこれが媚であるということ^{こび}を自覚せずにはいられなかった。それを自覚してからは、大丈夫たるべきもの^{だいじょうふ}が、こんな宦官かんがんのするような態度をしてはならないと反省することもあったが、好い子から美少年に進化した今日も、この媚が全くは無くならずにいる。この媚が無形の悪習慣というよりは、寧ろ有形の畸形きけいのように己の体に附いている。この

媚は己の醒めた意識が滅ほろぼそうとしたために、却って「[raffine]」《ラフィネエ》になって、無邪氣らしい仮面を被つて、その蔭に隠れて、一層威力を逞たくまくしているのではないかとも思われるのである。そして外面から来る誘惑、就なかんずく中異性の誘惑は、この自ら喜ぶ情と媚とが内応をするので、己の為に随分防遏ぼうあつし難いものになっているに相違ないのである。

今日の出来事はこう云う畠に生えた苗に過ぎない。

己はこの出来事のあつたのを後悔してはいない。なぜというに、現社会に僅きん有絶無ゆうぜつむというようになってゐるらしい、男子の貞操は、縦たとい尊重すべきものであるとしても、それは身を保つとか自ら重んずるとかいふ利己主義だというより外に、何の意義をも有せざるように思うからである。そういう利己主義は己にもある。あの時己は理性の光に刹那の間照されたが、齒牙しがの相撃とうとするまでになった神経興奮の雲が、それを忽ち蔽おほつてしまった。その刹那の光明の消えるとき、己は心の中で、「なに、未亡人だ」と叫んだ。平賀源内がどこかで云つていたことがある。「人の女房に流し目で見られたときは、頸くびに墨を打たれたと思うが好い。後家は」何やらというような事であつた。そんな心持がしたのである。

とにかく己は利己主義の上から、或る損失を招いたということを自覚する。そしてこれから後に、又こんな損失を招きたくないということをも自覚する。しかし後悔と名づける程の苦い味を感じてはいないのである。

苦みはない。そんなら甘みがあるかというに、それもない。あのとき一時発現した力の感じ、発揚の心状は、すぐに迹あともなく消え失せてしまつて、この部屋に歸つて、この机の前に据わつてからは、何の積極的な感じもない。この体に大いなる生理的變動を生じたものとは思われない。尤も幾分かいつもより寂しいようには思う。しかしその寂しさはあの根岸の家に引き寄せられる寂しさではない。恋愛もなければ、係あこがれ恋もない。

一体こんな閱歴が生活であらうか。どうもそうは思われない。眞の充実した生活ではない。

己には眞の生活は出来ないであらうか。己もデカダンスの沼に生えた、根のない浮草で、花は咲いても、夢のような蒼白い花に過ぎないのであらうか。

もう書く程の事もない。夜の明けないうちに少し寐ようか。しかし寐られれば好いい。只この寐られそうにないのだけが、興奮の記念かも知れない。それともその余波さえ最早もはや消えてしまつていて、今寐られそうにないのは、長い間物を書いていたせいかも知れない。

十一

純一の根岸に行った翌日は、前日と同じような好い天気であった。

純一はいつも随分夜をふかして本などを読むことがあつても、朝起きて爽快を覚えないことはないのであるが、今朝、日の当たっている障子の前にすわつて見れば、鈍い頭痛がして、目に羞明しゅうめいを感じる。顔を洗つたら、直るだろうと思つて、急いで縁に出た。

細かい水蒸気を含んでいる朝の空気に浸されて、物が皆青白い調子に見える。暇があるからだと云つて、長次郎が松葉を敷いてくれた蹲つくばいのあたりを見れば、敷松葉の界さかいにある、太い縄の上に霜がまだらに降っている。

ふいと庭下駄を穿いて門に出て、しゃがんで往來を見ていた。絆纏はんでんを着た職人が二人きれぎれな話をして通る。息が白く見える。

暫くしゃがんでいるうちに、頭痛がしなくなった。縁に帰つて楊枝ようじを使うとき、前日の記憶がぼんやり浮んで來た。あの事を今一度ゆっくり考えて見なくてはならないというよな気がする。障子の内では座敷を掃く音がしている。婆あさんがもう床を上げてしまつ

て、東側の戸を開けて、埃^{ほこり}を掃き出しているのである。

顔を急いで洗って、部屋に這入って見ると、綺麗^{きれい}に掃除がしてある。目はすぐに机の上に置いてある日記に惹^ひかれた。きのう自分の実際に遭遇した出来事よりは、それを日記にどう書いたということが、当面の問題であるように思われる。記憶は記憶を呼び起す。そして純一は一種の不安に襲われて来た。それはきのうの出来事に就いての、ゆうべの心理上の分析には大分行き届かない処があつて、全体の判断も間違っているように思われるからである。夜の思想から見ると昼の思想から見ると同一の事相が別様の面目を呈して来る。

ゆうべの出来事はゆうべだけの出来事ではない。これから先きはどうなるだろう。自分の方に恋愛のないのは事実である。しかしあの奥さんに、もう自分を引き寄せる力がないかどうか、それは余程疑わしい。ゆうべ何もかも過ぎ去ったように思ったのは、瘡^{おこり}の発作^{のち}の後に、病人が全快したように思う類^{るい}ではあるまいか。又あの謎^{なぞ}の目が見たくなること^るがありはすまいか。ゆうべ夜が更けてからの心理状態とは違って、なんだかもう少しあの目の魔力が働き出して来たかとさえ思われるのである。

それに宿主なしに勘定は出来ない。問題はこつちがどう思うかというばかりではない。

向うの思わくも勘定に入れなくてはならない。有楽座で始て逢ってから、向うは目的に向つて一直線に進んで来ている。自分は受身である。これから先きを自分がどうしようかというよりは、向うがどうしてくれるかという方が問題かも知れない。恋愛があるのないと生利なまぎきな事を思つたが、向うこそ恋愛はないのであらう。そうして見れば、我がために恥すべきこの交際を、向うがいつまで継続しようと思つてゐるかが問題ではあるまいか。それは固もとより一時の事であるには違ひない。しかし一時というのは比較的な詞である。

こんな事を思つてゐる処へ、婆あさんが朝飯を運んで来たので、純一は箸はしを取り上げた。婆あさんは給仕をしながら云つた。

「昨晚は大相遅たいそうちくまで勉強していらつしやいましたね」

「ええ。友達の処へ本を借りに行つて、つい話が長くなつてしまつて、遅く歸つて来て、それから少し為事をしたもんですから」

言いわけらしい返事をして、これがこの内へ来てからの、嘘うその衝き始めだと、ふいと思つた。そして厭いやな心持がした。

食事が済むと、婆あさんは火鉢に炭をついで置いて歸つた。

純一はゆうべ借りて来たラシイヌを出して、一二枚開けて見たが、読む氣になれなかつ

た。そこでこんなクラシックなものは、気分のもっと平穩な時に読むべきものだと、自分で自分に言いわけをした。それから二三日前に、神田の三才社さんさいしゃで見附けて、買つて歸つた Hysmans 《ヒュイスマンス》の小説のあつたのを出して、読みはじめた。

小説家たる主人公と医者いしやの客との對話が書いてある。話題は過ぎ去つたものとしての自然主義の得失である。次第次第に実世間に遠ざかつて、しまいには殆ど縁の切れたようになった文芸を、ともかくも再び血のあり肉のあるものにしたのは、この主義の功績である。しかし煩瑣はんさな、冗漫もんじな文字で、平凡な卑猥ひわいな思想を写すに至つたこの主義の作者の末路を、飽くまで排斥する客の詞にも、確に一面の真理がある。

自然主義の功績を称となえる処には、バルザックが挙げてある。フロオベルが挙げてある。ゴンクウルが挙げてある。最後にゾラが挙げてある。とにかく立派な系図である。

純一は日本での en 《アン》 miniature 《ミニアチュウル》 自然主義運動を回顧して、どんなに鼯鼠ひいきめ目に見ても、さ程難有ありがたくもないように思った。純一も東京に出て、近く寄つて預言者を見てから、渴仰かつこうの熱が余程冷却しているのである。

對話が済んで客が歸る。主人公が独りで物を考えている。そこにこんな事が書いてある。「材料の眞実な事、部分部分の詳密な事、それから豊富で神経質な言語、これ等は写実主

義の保存せられなくてはならない側である。しかしその上に靈的価値を汲むものとならなくてはならない。奇蹟きせきを官能の病で説明しようとしてはならない。人生に靈と体たいとの二つの部分があつて、それが鎔よう合ごうせられている。寧ろ混こん淆こうせられている。小説も出来る事なら、そんな風に二つの部分があらせたい。そしてその二つの部分の反はん応おう、葛藤かつとう、調和を書くことにしたい。一言いちごんで言えば、ゾラの深く穿うがつて置いた道を踏んで行きながら、別にそれと併行している道を空中に通ぜさせたい。それが裏面の道、背後の道である。一言で言えば靈的自然主義を建立するのである。そうなったらば、それは別様な誇りであろう。別様な完全であろう。別様な強大であろう「そういう立派な事が出来ないで、自然主義をお座敷向きにしようとするリベラルな流義と、電信体の悪く氣取った文章で、徒いたずらに靈的芸術の真似をしていて、到底思想の貧弱を覆うことの出来ない流儀とが出来ているというのである。

純一はここまで読んで来て、ふいと自分の思想が書物を離れて動き出した。目には文字もんじを見ていて、心には別の事を思っている。

それは自分のきのうの閱歴が体だけの閱歴であつて、自分の靈は別に空中の道を歩いていると思つたのが始で、それから本に書いてある事が余所になつてしまつたのである。

あの霊を離れた交を、坂井夫人はいつまで継続しようとするだろうか。きのうも既に心に浮かんだオオドのように、いつまでも己に付き纏うまとののだろうか。それとも夫人は目的を達するまでは、一直線に進んで来たが、既に目的を達した時が初の終はじめなのであるか。借りて帰っているラシイヌの一巻が、今は自分を向うに結び附けている一筋の糸である。あれを返すとき、向うは糸を切るであろうか。それともその一筋を二筋にも三筋にもしはすまいか。手紙をよこしはすまいか。この内へ尋ねて来はすまいか。

こう思うと、なんだかその手紙が待たれるような気がする。その人が待たれるような気がする。あのお雪さんは度々この部屋へ来た。いくら親しくしても、気が置かれて、帰ったあとでほっと息を衝く。あの奥さんは始めて顔を見た時から気が置けない。この部屋へでもずつと這入って来て、どんなにか自然らしく振舞うだろう。何を話そうかと気苦労をするような事はあるまい。話なんぞはしなくても分かっているというような風をするだろう。

純一はここまで考えて、空想の次第に放縦になつて来るのに心附いた。そして自分を腑ふ甲斐がいなく思つた。

自分は男子ではないか。経験のないために、これまでは受身になっていたにしても、何

もいつまでも受身になっている筈はずがない。向うがどう思ったって、それにどう応ずるかはこつちに在る。もう向うの自由になつていないと、こつちが決心さえすればそれまでである。借りた本は小包にしても返される。手紙が来ても、開けて見なければ好い。尋ねて来たら、きつぱりのことわれれば好い。

純一はここまで考えて、それが自分に出来るだろうかと思つて見た。そして躊躇ちゆうちよした。それを極めずに置く処に、一種の快味があるのを感じた。その躊躇している虚に乗ずるように、色々な記憶が現れて来る。しなやかな体の起たちよう据わりよう、意味ありげな顔の表情、懐かしい声の調子が思い出される。そしてそれを惜む未錬の情のあることを、我ながら抹殺まつさつしてしまうことが出来ないのである。又してもこの部屋であの態度を見たらどうだろうなどと思われる。脱ぎ棄てた吾婦あづまコオト、その上に置いてあるマッフまでが、さながら目に見えるようになるのである。

純一はふと気が附いて、自分で自分を嘲つて、又 Huysmans 《ヒュイスマンス》を読み出した。Dural 《デュルタル》という主人公が文芸家として旅に疲れた人なら、自分はまだ途みちに上らない人である。デュルタルは現世界に愛想あいそをつかして、いつその事カトリック教に身を投じようかと思つては、幾度いくたびかその「空虚に向つての飛躍」を敢てしないで、

袋町から踵くびすめを旋めぐらして帰るのである。それがなぜ愛想をつかしたかと思うと、実に馬鹿らしい。現世界は奇蹟の多きに堪たえない。金なんぞも大いなる奇蹟である。何か為事をしようと思つている人の手には金がない。金のある人は何も出来ない。富人が金を得れば、悪あく業くぎようが増長する。貧人が金を得れば墮落の梯はしごを降くだつて行く。金が集まつて資本になると、個人を禍わざわいするものが一変して人類を禍するものになる。千万の人はこれがために餓死して、世界はその前に跪ひざまずく。これが悪魔の業わざでないなら、不可思議であろう。奇蹟であろう。この奇蹟を信ぜざることを得ないとなれば、三位さんみ一体いつたいのドグマも信ぜられない筈がなくなると云うのである。

純一は顔を蹙しかめた。そして作者の厭えん世主義には多少の同情を寄せながら、そのカトリック教を唯一の退却路にしているのを見て、因襲いんしゆというものの根ざしの強さを感じた。

十一時半頃に大村が尋ねて来た。月曜日の午前の最終一時間の講義と、午後の臨床講義とは某教授の受持であるのに、その人が事故があつて休むので、今日は遠足でもしようかと思うということである。純一はすぐに同意して云つた。

「僕はまだちつとも近郊の様子を知らないのです。天気もひどく好いいから、どこへでも御一しよに行きましよう」

「天気はこの頃の事さ。外国人が岡目八目で、やっぱり冬寒くなる前が一番好いと云っているね」

「そうですかねえ。どっちの方へ行きますか」

「そうさ。僕もまだ極めてはいないのです。とにかく上野から汽車に乗ることにするさ」
「もうすぐ午ひるですね」

「上野で食って出掛けるさ」

純一が袴はかまを穿はいていると、大村は机の上に置いてある本を手を取って見た。

「大変なものを読んでいるね」

「そうですかね。まだ初めの方を見ているのですが、なんだかひどく厭世的な事が書いてあります」

「そうそう。行き留まりのカトリック教まで行って、半分道だけ引き返して、靈的自然主義になるという処でしょう」

「ええ。そこまで見たのです。一体先きはどうなるのですか」

こう云いながら、純一は袴を穿はいてしまつて、鳥打帽を手を持った。大村も立つて戸口に行つて腰を掛けて、編上あみあげ沓くつを穿き掛けた。

「まあ、歩きながら話すから待ち給え」

純一は先きへ下駄を引つ掛けて、植木屋の裏口を覗いて、のぞ、午食をこわつて置いて、大村と一しよに歩き出した。大村と並んで歩くと、やや動もすればこの巖がんじょう乗な大男に圧倒せられるような感じのするのを禁じ得ない。

純一の感じが伝わりでもしたように、大村は一寸ちよつと純一の顔を見て云った。

「ゆつくり行こうね」

なんだか讓歩するような、庇護ひごするような口調であつた。しかし純一は不平には思わなかつた。

「さっきの小説の先きはどうなるのですか」と、純一が問うた。

「いや。大変なわけさ。相手に出て来る女主人公は正真正銘の *satanis* 《サタニスト》なのだからね。しかしデュルタルは驚いて手を引いてしまうのです。フランスの社会には、道徳も宗教もなくなつて、只悪魔主義だけが存在しているという話になるのです。今まであの作者のものは読まなかつたのですか」

「ええ。つい読む機会がなかつたのです。あの本も註文して買ったのではないのです。瀬戸が三才社に大分沢山フランスの小説が来ていると云つたので、往つて見たとき、ふいと

買ったのです」

「瀬戸はフランスは読めないでしょう」

「読めないのです。学校で奨励しているので、会話なんかを買いに行つたとき、見て来て話したのです」

「そんな事でしよう。まあ、読んで見給え。随分猛烈な事が書いてあるのだ。一体青年の読む本ではないね」

目で笑つて純一の顔を見た。純一は黙つて歩いている。

天王寺前の通に出た。天氣の好^いわりに往来は少い。墓^{はかまいり}参^{まゐ}に行くかと思われるよう

な女子供の、車に乗つたのに逢つた。町屋の店先に蓆^{むしろ}を敷いて、子供が日なたぼこりをして遊んでいる。

動物園前から、東照宮の一の鳥居の内を横切つて、精養軒の裏口から這入つた。

帳場の前を横切つて食堂に這入ると、丁度客が一人もないので、給仕が二三人煖炉^{だんろ}の前で話をしていたが、驚いたような様子をして散つてしまった。その一人のヴェランダに近^{テエフル}い卓の処まで附いて来たのに、食事^{あつち}を誂えた。

酒はと問われて、大村は麦酒^{ビール}、純一はシトロンを命じた。大村が「寒そうだな」と云つ

た。

「酒も飲めないことはないのですが、構えて飲むという程好きでないのです」

「そんなら勧めたら飲むのですか」

この詞が純一の耳には妙に痛切に響いた。「ええ。どうも僕は *passif* 《パッシフ》で行けません」

「誰だつてあらゆる方面に *actif* 《アクチフ》に *agressif* 《アグレッシフ》に遣^やるわけには行^いかないよ」

給仕がスープを持って来た。二人は暫く食事をしながら、雑談をしているうちに、何の連絡もなしに、純一が云った。

「男子の貞操という問題はこういうものでしょう」

「そうさ。僕は医学生だが、男子は生理上に、女子よりも貞操が保ちにくく出来てゐるだけ、事実らしいのだね。しかし保つことが不可能でもなければ、保つのが有害でも無論ないということだ。御相談とあれば、僕は保つ方を賛成するね」

純一は少し顔の赤くなるのを感じた。「僕だつて保ちたいと思つてゐるのです。しかし貞操なんというものは、利己的の意義しかないように思うのですが、どうでしょう」

「なぜ」

「つまり自己を愛惜するに過ぎないのではないでしょうか」

大村は何やら一寸考えるらしかったが、こう云った。「そう言えば云われないことはないね。僕の分らないと思つたのは、生活の衝動とか、種族の継続とかいうような意義から考えたからです。その方から見れば、生活の衝動を抑制しているのだから、egoistique《エゴイスチック》よりは altruistique 《アルトリュスチック》の方になるからね。なんだか哲学臭いことを言うようだが、そう見るのが当り前のようだからね」

純一は手に持っていたフォオクを置いて、目をかがやかした。「なる程そうです。どうぞ僕の希望ですから、哲学談をして下さい。僕は国にいた頃からなんでも因襲に囚とらわれているのはつまらないと、つくづく思つたのです。そして腹の底で、自分の周囲の物を、何もかも否定するようになったのですね。それには小説やなんぞに影響せられた所もあるのでしょう。それから近頃になって、自分の思想を点検して見るようになったのです。いつかあなたと新人の話をしたでしょう。丁度あの頃からなのです。あの時積極的新人ということと言つたのですが、その積極的ということの内容が、どうも僕にははつきりしていませんでした」

給仕が大村の前にあるフライの皿を引いて、純一の前へ来て顔を覗くようにした。純一は「好いよ」と云つて、フォークを皿の中へ入れて、持つて行かせて話し続けた。「そこで折々ひとりで考えて見たのです。そうすると、自分の思想が凡て利己的なようなのですね。しかもけちな利己主義で、殆ど独善主義とでも言つて好いように思われたのです。僕はこんな事では行けないと思つたのです。或る物を犠牲にしなくては、或る物は得られないと思つたのです。ところが、僕なんぞの今までの事には、犠牲を払うとか、献身的態度に出るとかいうような事が一つもないでしょう。それからというものはあれも利己的だ、これも利己的だと思つたのです。それだもんですから、貞操ということを考えた時も、生活の受用や種族の継続が犠牲になつていゝという側を考えずに、自己の保存だ、利己的だという側ばかり考えたのです」

大村の顔には、憎らしくない微笑が浮んだ。「そこで自己を犠牲にして、恋愛を得ようと思つたのですか」

「いいえ。そうではないのです。それは僕だつて恋愛というものを期待してゐないことではないのです。しかし恋愛というものを人生の総てだとは思いませんから、恋愛を成就するのが、積極的新人の面目だとも思いません」純一は稍やわざとらしい笑をした。「つまり

貧乏人の世帯調べのように、自己の徳目を数えて見て、貞操なんということを持ち出したのです」

「なる程。人間のする事は、殊に善と云われる側の事になると、同じ事をしても、利己の動機であるのもあろうし、利他の動機であるのもあろうし、両方の動機を有しているものもあるでしょう。そこで新人だつて積極的なものを求めて、道徳を構成しようとか、宗教を構成しようとかいうことになれば、それはどうせ利己では行けないでしょうよ」

「それではどうしても又因襲のような或る物に縛よくせられるのですね。いつかもその事を言つたら、あなたは縄の当り処が違ふと云つたでしょう。あれがどうも好く分らないのです」

「大変な事を記憶していましたね。僕はまあ、こんな風に思っているのです。因襲というのは、その縛いましめが本能的で、無意識なのです。新人が道徳で縛いましめられるのは、同じ縛いましめでも意識して縛いましめられるのです。因襲に縛いましめられるのが、窃盗をした奴が逃げ廻よくつていて、とうとう縛いましめられるのなら、新人は大泥坊が堂々と名乗つて出て、笑いながら縛よくに就くのですね。どうせ囚こわれだの縛いましめだのという語ことばを使うのだから」

大村が自分で云つて置いて、自分が無遠慮に笑うので、純一も一しよになって笑つた。

暫くしてから純一が云った。

「そうして見ると、その道德というものは自己が造るものでありながら、利他的であり、social《ソシアル》であるのですね」

「無論そうさ。自己が造った個人的道德が公共的になるのを、飛躍だの、復活だのと云うのだね。だから積極的の新人が出来れば、社会問題も内部から解決せられるわけでしょう」
二人は暫く詞が絶えた。料理は小鳥の炙ものあぶりに萵苣ちさのサラダが出ていた。それを食ってしまつて、ヴェランダへ出て珈琲コオファイを飲んだ。

勘定を済ませて、快い冬の日を角帽と鳥打帽とに受けて、東京に珍らしい、乾いた空気を呼吸しながら二人は精養軒を出た。

十二

二人は山を横切つて、常磐華壇とぎわかたんの裏の小さな坂を降りて、停車場ばに這入はいつた。時候が好いので、近在のものが多く出ると見えて、札売場の前には草鞋わらじばきで風炉敷包ふうろしきづつみを持った連中が、ぎつしり詰まつたようになって立っている。

「どこにしようか」と、大村が云った。

「王子も僕はまだ行つたことがないので」と純一が云った。

「王子は余り近過ぎるね。大宮にしよう」大村はこう云つて、二等待合の方に廻つて、一等の札を二枚買った。

時間はまだ二十分程ある。大村が三等客の待つベンチのある処の片隅で、煙草を買っている間に、純一は一等待合に這入つて見た。

ここで或る珍らしい光景が純一の目に映じた。

中央に据えてある卓テエフルの傍わきに、一人の夫人が立っている。年はもう五十を余程越しているが、純一の目には四十位にしか見えない。地味ではあるが、身の廻りは立派にしているように思われた。小さく巻いた束髪に、目立つような髪飾もしていないが、鼠ねずみ色の毛皮の領巻えりまきをして、同じ毛皮のマッフを持つてゐる。そして五六人の男女に取り巻かれてゐるが、その姿勢や態度が目をおどろかすのである。

先まず女王が *caule* 《セルクル》をしてゐるとしか思われない。留守を頼んで置く老女に用事を言い附ける。随行らしい三十歳ばかりの洋服の男に指図をする。送つて来たらしい女学生風の少女に一人一人訓戒めいた詞を掛ける。切口きりこう状じょうめいた詞が、血の色の極淡

い脣くちびるから凜りんとして出る。洗鍊を極めた文章のような言語に一句の無駄がない。それを語尾一つ曖昧あいまいにせずに、はっきり言う。純一は国にいたとき、九州の大演習を見に連れて行かれて、師団長が将校集まれの喇叭ラッパを吹かせて、命令を伝えるのを見たことがある。あの時より外には、こんな口吻こうふんで物を言う人を見たことがないのである。

純一は心のうちで、この未知の夫人と坂井夫人とを比較することを禁じ得なかった。どちらも目に立つ女であつて、どこか技巧ろうを弄ろうしているらしい、しかしそれが殆ど自然に迫っている。外の女ほかは下手が舞台に登ったようである。丁度芸術にも日本には或る [manie risme] 《マニエリスム》が行われているように、風俗にもそれがある。本で読んだり、画で見たりする、西洋の女のように自然が勝っていない。そしてその技巧のある夫人の中で、坂井の奥さんが女らしく伶俐れいりな方の代表者であるなら、この奥さんは女丈夫じょじょうふとか、賢夫人とか云われる方の代表者であろうと思つた。

そこへ、純一はどこへ行つたかと見廻しているような様子で、大村が外から覗いたので、純一はすぐに出て行つて、一しよに三等客の待っているベンチの側そばの石畳みの上を、あちこち歩きながら云つた。

「今一等待合にいた夫人は、当り前の女ではないようでしたが、君は気が付きませんかし

たか」

「氣が附かなくて。あれは、君、有名な高畠詠子さんだよ」

「そうですか」と云つた純一は、心の中になる程と領いた。東京の女学校長で、あらゆる毀誉褒貶を一身に集めたことのある人である。校長を退いた理由としても、種々の風説が伝えられた。国にいたとき、田中先生の話に、詠子さんは演説が上手で、或る目的を以て生徒の群に対して演説するとなると、ナポレオンが士卒を鼓舞するときの雄弁の面影があると云つた。悪徳新聞のあらゆる攻撃を受けていながら、告別の演説でも、全校の生徒を泣かせたそうである。それも一時の感動ばかりではない。級ごとに記念品を贈る委員などが出たとき、殆ど一人もその募りに応ぜなかつたものはないということである。とにかく英雄である。絶えず自己の感情を自己の意志の下に支配している人物であろうと、純一は想像した。

「女丈夫だとは聞いていましたが、一寸見てもあれ程態度の目立つ人だとは思わなかつたのです」

「うん。態度の [representative] 《ルプレザンタチヴ》な女だね」

「それに實際えらいのでしょう」

「えらいのですとも。君、オオトリシアンで、まだ若いのに自殺した学者があつたね。O
o《オットオ》Weinger《ワイニンゲル》というのだ。僕なんぞはニイチエからの書
物では、あの人の書いたものに一番ひどく動うごかされたと云つても好いが、あれがこう云う議
論をしていますね。どの男でも幾分か女の要素を持っているように、どの女でも幾分か男
の要素を持っている。個人は皆M+Wだというのさ。そして女のえらいのはMの比例数が
大きいのだそうだ」

「そんなら詠子さんはMを余程沢山持つているのでしよう」と云いながら、純一は自分
は大分Wがありそうだと思つて、いやな心持がした。

風炉敷包を持つた連中は、もうさつきから黒い木札の立てである改札口に押し掛けてい
る。埒うちが開くや否や、押し合つてプラットフォオムへ出る。純一はとかくこんな時には、
透くまで待つていようとするのであるが、今日大村が人を押し退のけようともせず、人に道
を譲りもせずに、群集ぐんじゆを空気扱いにして行くので、その背後に附いて、早く出た。

一等室に這入つて見れば、二人が先登せんとうであつた。そこへ純一が待合室で見た洋服の男
が、赤帽に革包かばんを持たせて走つて来た。赤帽が縦側の左の腰掛の真ん中へ革包を置いて、
荒い格子縞の駱駝らくだの膝掛ひざかけを傍そばに鋪しいた。洋服の男は外へ出た。大村が横側うしろの後に腰掛

たので、純一も並んで腰を掛けた。

続いて町のものらしい婆あさんと、若い女とが這入って来た。物馴れない純一にも、銀杏ちようがえ返しに珊瑚珠さんごじゆの根掛ねかけをした女が芸者だろうということだけは分かった。二人の女は小さい革包を間に置いて腰を掛けたが、すぐに下駄を脱いで革包を挟んで、向き合つて、きちんと据わつた。二人の白足袋が〔symétrique〕《シメトリック》に腰掛の縁へりにはみ出している。

芸者らしい女は平気でこっちを見ている。純一は少し間の悪いような心持がしたので、救すくいを求めるように大村を見た。大村は知らぬ顔をして、人の馳はせ違うプラットフォオムを見ている。

乗るだけの客が大抵乗ってしまった頃に、詠子さんが同じ室しつに這入って来た。さっきの洋服の男は、三等にでも乗るのであろう。挨拶をして走って行った。女学生らしい四五人がずらりと窓の外に立ち並んだ。詠子さんは開ひらいていた窓から、年寄の女に何か言つた。

発車の笛が鳴つた。「御機嫌宜よろしゅう」、「さようなら」なんぞという詞が、愛相あいそうのよい女学生達の口から、囀さえずるように出た。詠子さんは窓の内に真っ直に立つて、頗あこで会釈かいしゃくをしている。女学生の中うちの年上で、瘦やせた顔の表情のひどく活潑かつぱつなのが、汽車の大分遠

ざるまで、ハンケチを振って見送っていた。

詠子さんは静かに膝掛の上に腰を卸して、マッフに両手を入れて、端然としている。

暫くは誰も物を言わない。日暮里の停車場を過ぎた頃、始めて物を言い出したのは、黒

うとらしい女連であつた。「往くと思つているでしょうか」と若いのが云うと、「思

つていなくてさ」と年を取つたのが云う。思いの外に遠慮深い小声である。しかし静かなこの室では一句も残らずに聞える。それが始終主格のない話ばかりなのである。

大村が黙つているので、純一も遠慮して黙つている。詠子さんはやはり端然としている。窓の外は同じような田圃道ばかりで、おりおりそこに客を載せてゆくり歩いている人力車なんぞが見える。刈跡から群がって雀が立つ。醜い人物をかけた広告のつに、鴉

の止まつていたのが、嘴を大きく開いて啼きながら立つ。

室内は、左の窓から日の差し込んでゐる処に、小さい塵が跳つている。

黒人らしい女連も黙つてしまふ。なぜだか大村が物を言わないので、純一も退屈には

思いながら黙つていた。

王子を過ぎるとき、窓から外を見ていた純一が、「ここが王子ですね」と云うと、大村は「この列車は留まらないのだよ」と云つたきり、又黙つてしまった。

赤羽で駅員が一人這入って来て、卓テエフルの上に備えてある煎茶の湯に障さわって見て、出て行つた。ここでも、蕨わらびや浦和でも、多少の乗客の出入でいりはあつたが、純一等のいる沈黙の一等室には人の増減がなかつた。詠子さんは始終端然としているのである。

三時過ぎに大宮に着いた。駅員に切符を半分折り取らせて、停車場を出るとき、大村がさも樂々したという調子で云つた。

「ああ苦しかった」

「なぜです」

「馬鹿げているけれどね、僕は或る種類の人間には、なるべく自己を觀察して貰いたくないのだ」

「その種類の人間に詠子さんが属しているのですか」

大村は笑つた。「まあ、そうだね」

「一体どういう種類なのでしょう」

「そうさね。一寸説明に窮するね。要するに自己を誤解せられる虞おそれのある人には、自己を觀察して貰いたくないとでも云つたら好いのでしょうか」純一は目を睜みはっている。「これでは余り抽象的かねえ。所謂いわゆる教育界の人物なんぞがそれだね」

「あ。分かりました。つまり hypocrites 《イポクリイト》だと云うのでしよう」

大村は又笑った。「そりやあ、あんまり酷だよ。僕だつてそれ程教育家を悪く思つていやしないが、人を鑄型に※めて拵えようとしているのが癖になつていて、誰をでもその鑄型に※めて見ようとするからね」

こんな話を話しながら、二人は公園の門を這入った。常磐木の間に、葉の黄ばんだ雑木の交つている茂みを見込む、二本柱の門に、大宮公園と大字で書いた木札の、稍古びたのが掛かつているのである。

落葉の散らばっている、幅の広い道に、人の影も見えない。なる程大村の散歩に来そうな処だと、純一は思つた。只どこからか微かに三味線の音がする。純一が云つた。

「さつきお話しのワイニンゲルなんぞは女性をどう見ているのですか」

「女性ですか。それは余程振つていますよ。なんでも女というものには娼妓のチイプと母のチイプとしかないというのです。簡単に云えば、娼と母とでも云いますかね。あの論から推すと、東京や無名通信で退治している役者買の奥さん連は、事実である限りは、どんな身分が高くて、どんな金持を親爺や亭主に持つていても、あれは皆娼妓です。芸者という語を世界の字書に提供した日本に、娼妓の型が發展しているのは、不思議ではな

いかも知れない。子供を二人しか生まないことにして、そろそろ人口の耗^へつて来るフランスなんぞは、娼妓の型の優勝を示しているのに外ならない。要するにこの質^{たち}の女は *antisocial* 《アンチソシアル》です。幸^{さいわい}な事には、他の一面には母^{はは}の型があつて、これも永遠に滅びない。母の型の女は、子を欲しがつていて、母として子を可^{かわい}哀がるばかりではない。娘の時から犬ころや猫や小鳥をも、母として可哀がる。娘^{よめ}に行けば夫をも母として可哀がる。人類の継続の上には、この型の女が勲功を奏している。だから国家が良妻賢母主義で女子を教育するのは尤^{もつと}もでしょう。調馬手が馬を育てるにも、駄^い足は教えなくても好いよなもので、娼妓の型には別に教育の必要がないだろうから」

「それでは女子が独立していろいろの職業を営んで行くようになる、あの風潮に対してはどう思っているのでしょうか」

「あれはM>Wの女と看^み做^なして、それを育てるには、男の這入るあらゆる学校に女の這入るのを拒まないようにすれば好^いいわけでしょうよ」

「なる程。そこで恋愛はどうなるのです。母の型の女を対象にしては恋愛の満足は出来ないでしょうし、娼妓の型の女を対象にしたら、それは墮落ではないでしょうか」

「そうです。だから恋愛の希望を前途に持つていという君なんぞの爲めには、ワイニン

ゲルの論は残酷を極めているのです。女には恋愛というようなものはない。娼妓の型には色欲がある。母の型には繁殖の欲があるに過ぎない。恋愛の対象というものは、凡て男子の構成した幻影だということです。それがワイニンゲルの為めには非常に真面目な話で、当人が自殺したのも、その辺に根ざしているらしいのです」

「なる程」と云った純一は、暫く詞もなかった。坂井の奥さんが娼妓の型の代表者として、彼れの想像の上に浮ぶ。饜くことを知らない polype 《ポリイプ》の腕に、自分は無意味の餌になつて抱かれていたような心持がして、堪えられない程不愉快になつて来るのである。そしてこう云つた。

「そんな事を考えると、厭世的になつてしまいますね」

「そうさ。ワイニンゲルなんぞの足跡を踏んで行けば、厭世は免れないね。しかし恋愛なんという概念のうちには人生の酔を含んでいる。Ivresse 《イヴレス》を含んでいる、鴉片や Haschisch 《アッシシシュ》のようなものだ。鴉片は支那までが表向禁じているが、人類が酒を飲まなくなるかは疑問だね。Dionisos 《ジオニソス》は Apollon 《アポロン》の制裁を受けたって、滅びてしまうものではあるまい。問題は制裁奈何にある。どう縛られるか、どう囚われるかにあると云つても好かろう」

二人は氷川神社ひかわの拝殿近く来た。右側の茶屋から声を掛けられたので、殆ど反射的に避けて、社の背後やしろの方へ曲がった。

落葉の散らばっている小道の向うに、木立に囲まれた離れのような家が見える。三味線の音はそこからする。四五人のとよめき笑う声と女の歌う声とが交って来る。

音締ねしめの悪い三味線の伴奏で、聴くに堪えない卑しい歌を歌っている。丁度日が少し傾いて来たので、幸に障子が締め切つてあつて、この放たれた男女の一群ひとむれと顔を合せずに済んだ。二人は又この離れを避けた。

社の東側の沼の畔ほとりに出た。葦簣よしずを立て繞めぐらして、店をしまっている掛茶屋がある。

「好い処いいですね」と、覚えず純一が云った。

「好かろう」と、大村は無邪氣に得意らしく云つて、腰掛けに掛けた。

大村が紙巻煙草に火を附ける間、純一は沼の上を見わたしている。僅か二三間先きに、枯葦かれあしの茂みを抜いて立つている杙くいがあつて、それに鴉が一羽止いちわまっている。こつちを向いて、黒い円い目で見て、紫色の反射のある羽をちよいと動かしたが、又居ずまいを直して逃げずにいる。

大村が突然云った。「まだ何も書いて見ないのですか」

「ええ。蜚^とばず鳴かずです」と、純一は鴉を見ながら答えた。

「好く文学者の成功の事を、大いなる coup 《クウ》をしたと云うが、あれは采^{さい}を擲^{なげう}つので、つまり芸術を賭博^{とばく}に比したのだね。それは流行作者、売れる作者になるにはそういう偶然の結果もあるうが、censure 《サンシウル》問題は別として、今のように思想を發表する道の開けている時代では、価値のある作が具眼者に認められずにしまうという虞^あれは先ず無いね。だから急ぐには及ばないが、遠慮するにも及ばない。起^たとうと思えば、いつでも起てるのだからね」

「そうでしょうか」

「僕なんぞはそういう問題では、非常に樂天的に考えていますよ。どんなに手広に新聞雜誌を利用してゐる clique 《クリク》でも、有力な分子はいつの間にか自立してしまうから、党派そのものは脱殻^{ぬけがら}になつてしまつて、自滅せずにはゐられないのです。だからそんなものに、縋^{すが}つたつて頼もしくはないし、そんなものに黙殺せられたつて、悪く言われたつて沮喪するには及ばない。無論そんな仲間に入るといふ必要はないのです」

「しかし相談相手になつて貰われる先輩というようなのは欲しいと思うのですが」

「そりやあつても好^いいでしょうが、縁のある人が出合うのだから、強いて求めるわけに

は行かない。紹介状やなんぞで、役に立つ交際が成り立つことは先ず無いからね」
こんな話をしているうちに、三味線や歌が聞え已やんだので、純一は時計を見た。

「もう五時を大分過ぎています」

「道理で少し寒くなつて来た」と云つて、大村が立つた。

鴉が一声啼いて森の方へ飛んで行つた。その行方を見送れば、いつの間にか鼠色の薄い雲が空を掩おおうていた。

二人は暫く落葉の道を歩いて上りの汽車に乗つた。

十三

純一が日記は又白い処ばかり多くなつた。いつの間にか十二月も半ばを過ぎている。珍しい晴天続きで、国で噂うわさに聞いたような、東京の寒さをまだ感じたことがない。

植長の庭の菊も切られてしまつて、久しく咲いていた山茶花さざんかまでが散り尽した。もう色のあるものと云つては、常磐樹ときわぎに交つて、梅もどきやなんぞのような、赤い実のなつてゐる木が、あちこちに残つてゐるばかりである。

中沢のお雪さんが余り久しく見えないと思ひながら、問いもせずにいると、或る日婆あさんがこんな話を話した。お雪さんに小さい妹がある。それがジフテリイになって大学の病院に這入った。ジフテリイは血清注射で直ったが、跡が腎臓炎になって、なかなか退院することが出来ない。お雪さんは稽古けいこに行つた歸りに、毎日見舞に行つて、遅くなつて歸る。休日には朝早くからおもちゃなんぞを買つて行つて、終日附いているということである。「ほんとにあんな氣立ての好い子つてありません」と婆あさんが褒めて話した。

この頃純一は久し振りで一度大石路花を尋ねた。下宿が小石川の富坂上とみざかうへに変つていた。純一はまだ何一つ纏まとまつた事を始めずにいるのを恥じて、若し行きなり何をしているかと問われはすまいかと心配して行つたが、そんな事は少しも問わない。寧ろなんにもしないのが当り前だとも思っているらしく感ぜられた。丁度這入つて行つたとき、机の上に一ぱい原稿紙を散らかして、何か書き掛けていたらしいので「お邪魔なら又参ります」と云うと「構かまわないよ、器械的に書いているのだから、いつでも已やめて、いつでも続けられる。重宝な作品だ」と真面目な顔で云つた。そしていつもの詞少ことばなに応答をする癖とまるで變つて、自分の目下の境遇を話して聞せてくれた。それが極端に冷静な調子で、自分は何んの痛癢つうようをも感ぜずに、第三者の出来事を話しているように聞えるのである。純一は直ぐ

に、その話が今書き掛けている作品と密接の関係を有しているのだということを悟った。話しながら、事柄の経過の糸筋を整理しているらしいのである。話している相手が誰^{だれ}でも構わないらしいのである。

路花の書いている東京新聞は、初め社会の下層を読者にして、平易な事を平易な文で書いていた小新聞^{こしんぶん}に起つて、次第に品位を高めたものであった。記者と共に調子は幾度も変つた。しかし近年のように、文芸方面に向つて真面目に活動したことはなかった。それは所謂自然主義の唯一の機関と云つても好い^{よい}ようになってからの事である。ところが社主が亡くなつて、新聞は遺産として、親から子の手に渡つた。これまでの新聞の発展は、社主が意識して遂げさせた発展ではなかった。思想の新しい記者が偶然這入る。学生やなんぞのような若い読者が偶然殖える。記者は知らず識^しらず多数の新しい読者に迎合するようになる。こういう交互の作用がいつか自然主義の機関を成就させたのであった。それを故^{もと}の社主は放任していたのである。新聞は新しい社主の手に渡つた。少壮政治家の鉄のような腕^{かいな}が意識ある意志によつて揮^{ふる}われた。社中のものの話に聞けば、あの背^{せい}の低い、肥満した体を巴里^{パリイ}為立てのフロックコウトに包んで、鋭い目の周囲に横着^たような微笑を湛^たえた新社主誉田男爵^{ほんだ}は、^{ヨオロッパ}歐羅巴の某大国の Corps 《コオル》 diplomatique 《ジプロマチック》

で鍛えて来た社交的伎倆ぎりようたくましゆを逞たくまうして、或る夜一代の名士を華族会館の食堂に羅致らちしたのである。今後は賛助員の名の下に、社会のあらゆる方面の記事を東京新聞に寄せることになったという、この名士とはどんな人々であつたか。帝国大学の総ての分科の第一流の教授連がその過半を占めていたのである。新聞はこれから〔academique〕《アカデミック》になるだろう。社会の出来事は、謂いわば永遠の形の下もとに見た鳥瞰ちようかん図ずになって、新聞を飾るだろう。同じ問題でも、今まで焼芋の皮の燻くすぶる、縁ふちの焦げた火鉢の傍そばで考えた事が発表せられた代りに、こん度は温室で咲かせた熱帯の花の蔭かげから、雪を硝子越ガラスしに見る窓の下で考えた事が発表せられるだろう。それは結構である。そんな新聞もあつても好いい。しかし社員うちの中で只一人華族会館のシャンパンエエさかすきの杯なを嘗なめなかつた路花はどうしても車の第三輪になるのである。それなのに「見てい給え、今に僕なんぞの新聞は華族新聞になるんだ」と、平気な顔をして云つてゐる。

純一は著作の邪魔なぞをしてはならないと思つたので、そこそこに暇いとま乞こをして、富坂上ふさかみの下宿屋を出た。そして帰り道に考えた。東京新聞が大村の云う小さいクリクを形づくつて、不公平な批評をしていたのは、局外から見ても、余り感心出来なかつた。しかしとにかく主張があつた。特色があつた。推し測つて見るに、新聞社が路花を推戴すいたいしたこ

とがあるのではあるまいから、路花の思想が自然に全体の調子を支配する様になって、あの特色は生じたのだろう。そこで社主が代つて、あの調子を社会を荼毒するものだと思つたでしょう。一般の読者を未丁年者として見る目で、そう認めたのは致し方がない。只驚くのは新聞をアカデミックにしてその弊を除こうとした事である。それでは反動に過ぎない。抑圧だと云つても好い。なぜ思想の自由を或る程度まで許して置いて、そして矯正しようとはしないのだろう。路花の立場から見れば、ここには不平がなくてはならない。この不平は赫とした赤い怒りになって現れるか、そうでないなら、緑青のような皮肉になつて現れねばならない。路花はどんな物を書くだろうか。いやいや。やはりいつもの何物に出逢つても屈折しないラジウム光線のような文章で、何もかも自己とは交渉のないように書いて、「ああ、わたくしの頭にはなんにもない」なんぞと云うだろう。今の文壇は、愚痴というものの外に、力の反応を見ることの出来ない程に萎弱しているのだが、これなら何等の反感をも起さずに済む筈だ。純一はこんな事を考えながら指が谷の町を歩いて歸つた。

十二月は残り少なくなった。前月の中頃から、四十日程の間雨が降ったのを記憶しない。純一は散歩もし飽きて、自然に内において本を読んでいる日が多くなる。二三日続くと、頭が重く、気分が悪くなつて、食機しよくきが振わなくなる。そういう時には、三崎町の町屋が店をしまつて、板戸を卸す頃から、急に思い立って、人気のない上野の山を、薩摩下駄をがら附かせて歩いたこともある。

或るそういう晩の事であつた。両大師の横を曲がつて石燈籠いしどうろうの沢山並んでいる処を通つて、ふと鷺うぐいすぎ坂の上に出た。丁度青森線の上りの終列車が丘の下を通る時であつた。死せる都会のはずれに、吉原の電灯が幻のように、霧の海に漂っている。暫く立つて眺めているうちに、公園で十一時の鐘が鳴つた。巡查が一人根岸から上がつて来て、純一を角灯で照して見て、暫く立ち留まつて見ていて、お霊屋たまやの方へ行つた。

純一の視線は根岸の人家の黒い屋根の上を辿たどつてゐる。坂の両側の灌木かんぼくと、お霊屋の背後の森とに遮られて、根岸の大部分は見えないのである。

坂井夫人の家はどの辺だろうと、ふと思つた。そして温い血の波が湧わき立って、冷たくなつてゐる耳や鼻や、手足の尖さきまでも漲みなぎり渡るような心持がした。

坂井夫人を尋ねてから、もう二十日ばかりになっている。純一は内に据わつていても、外を歩いていても、おりおり空想がその人の倂おもかげを想い浮べさせることがある。これまで対象のない係あこがれ恋に襲われたことのあるに比べて見れば、この空想の戯れは度数も多く光彩も濃いので、純一はこれまで知らなかった苦痛を感じるのである。

身の周囲まわりを立ち籠こめている霧が、領えりや袖や口から潜もぐり込むかと思うような晩であるのに、純一の肌は燃えている。恐ろしい「盲目なる策励」が理性の光を覆うて、純一にこんな事を思わせる。これから一走りにあの家へ行つて、門のベルを鳴らして見たい。己おれがこの丘の上クワルトに立つてこう思っているように、あの奥さんもほの暗い電燈の下の白い court-point の中で、己を思っているのではあるまいか。

純一は忽たちまち肌の粟あわだ立つのを感じた。そしてひどく刹那せつなの妄想もうそうを慙はじた。

馬鹿な。己はどこまでおめでたい人間だろう。芝居で只一度逢つて、只一度尋ねて行つただけの己ではないか。己が幾人かの中の一人に過ぎないということは、殆ど問うことを須またない。己の方で遠慮をしていれば、向うからは一枚の葉書もよこさない。二十日ばかりの長い間、己は待たない、待ちたくないと思ひながら、意志に背いて便たよりを待つていた。そしてそれが徒いたずら事であつたではないか。純一は足元にあつた小石を下駄で蹴け飛ばした。

石は灌木の間を穿^{うが}つて崖^{がけ}の下へ墜^おちた。純一はステッキを揮^ふつて帰途に就いた。

*

*

*

純一が夜上野の山を歩いた翌日は、十二月二十二日であつた。朝晴れていた空が、午後には薄曇になつてゐる。読みさした雑誌を置いて、純一は締めた障子を見詰めてぼんやりしている。己はいつかラシイヌを読もうと思つていて、まだ少しも読まないと、ふと思つたのが縁になつて、遮り留めようとしてゐる人の倅が意地悪く念頭に浮かんで来る。「いつでも取り換えにいらつしやいよ。そう申して置きますから、わたくしがいなかったら、ずんずん上がつて取り換えていらつしやつて宜しゅうございます」と坂井の奥さんは云つた。その権利をこちらではまだ一度も用に立てないものである。葉書でも来はすまいかと、待ちたくないと戒めながら、心の底で待つていたが、あれは顛^{てんどう}倒した考えであつたかも知れない。おとずれはこちらからすべきである。それをせぬ間、向うで控えているのは、あの奥さんのつつましい、frivole 《フリヴオル》 でないのを証拠立ててゐるのではあるまいか。それともわざと縦^{はな}つて置いて、却^{かえ}つて確実に、擒^{とりこ}にしようとする手管かも知れない。若しそうなら、その手管がどうやら己の上に功を奏して来そうにも感ぜられる。遠慮深い人でないということは、もう経験していると云つても好^いい。どうしても器^{うつわ}を傾けて飲ませ

ずに、渴したときの一滴に咽を霑のどうるおさせる手段に違いない。純一はこんな事を思っているうちに、空想は次第に放縦になつて来るのである。

この時飛石を踏む静かな音がした。

「いらつしつて」女の声である。

純一ははつと思つた。ちゃんと机の前に据わっているのだから、誰たれに障子を開けられても好いのであるが、思つていた事を気が咎とがめて、慌てて居住まいを直さなくてはならないように感じた。

「どなたです」と云つて、内から障子を開けた。

につこり笑つて立つているのはお雪さんである。きようは廂ひさしがみ髪髪の末を、三組みつぐみのお下げにしている。長い、たつぷりある髪を編まれるだけ編んで、その尖の処に例のクリイム色のリボンを掛けている。黄いろい縞めいせんの銘めいせん撰せんの着物めいせんが、いつかじゆう着ていたのと、同じか違うか、純一には鑒かんべつ別が出来ない。只羽織が真紫のお召であるので、いつかのとは違つているということが分かつた。

「どうぞお掛けなさい。それとも寒いなら、お上がんなさいまし。お妹御さんが悪かつたのですつてね。もうお直りになつたのですか」純一はお雪さんに物を言うとなると、これ

まで苦しいのを勉めて言うような感じがしてならなかったのであるが、きようはなんだかその感じが薄らいだようである。全く無くなってしまうはしないが、薄らいだだけは確かなようである。

「よく御存じね。婆あやがお話したのでしよう。腎臓の方はどうせ急には直らないのだということですから、きのう退院して参りましたの。もう十日も前から婆あやにも安にも逢わないもんですから、わたくしはあなたがどうかへ越しとおしまいなさりはしないかと思つてよ」こう云いながら、徐かに縁側に腰を掛けた。暫く来なかつたので、少し遠慮をするらしく、いつかじゆうよりは行儀が好い。

「なぜそう思つたのです」

「なぜですか」と無意味に云つたが、暫くして「ただそう思つたの」と少しぞんざいに言い足した。

雲の絶間から、傾き掛かつた日がさして、四目垣の向うの檜の影を縁の上に落していたのが、雲が動いたので消えてしまつた。

「わたくしこんな事をしていると、あなた風を引いておしまいなさるわ」細い指をちよいと縁に衝いて、立ちそうにする。

「這入^{はい}ってお締めなさい」

「好くって」返事を待たずに千代田草履を脱ぎ棄てて這入った。

障子はこの似つかわしい二人を狭い一間に押し籠めて、外界との縁を断ってしまった。

しかしこういう事はこれが始めではない。今までも度々あつて、その度毎に純一は胸を躍らせたのである。

「画があるでしょう。ちよいと拝見」

純一と並んで据わつて、机の上にあつた西洋雑誌をひっくり返して見ている。

お召の羽織の裾がしつとりした *jet* 《ジェエ》 *de* 《ド》 *la* 《ラ》 *draperie* 《ドラプリー》をなして、純一が素早く出して薦めた座布団の上に委積^{たたな}わつて、その上へたつぷり一握^{ひとつか}みある濃い褐色のお下げが重げに垂れている。

頬^{あこ}から、腮^{あこ}から、耳の下を頸^{くび}に掛けて、障つたら、指に軽い抗抵をなして窪^{くぼ}みそうな、鶉^{ときいろ}色の肌の見えているのと、ペエジを翻^{かえ}す手の一つ一つの指の節に、抉^{えぐ}つたような窪みの附いているのの上を、純一の不安な目は往反^{おうへん}している。

風景画なんぞは、どんなに美しい色を出して製版してあつても、お雪さんの注意^ひを惹かない。人物に対してでなくては興味を有せないのである。風景画の中の小さい点景人物を

指して、「これはどうしてなのでしょう」などと問う。そんな風で純一は画解きをさせられている。

袖と袖と相触れる。何やらの化粧品かの香に交つて、健康な女の皮膚にの匂いがする。どの画かを見て突然「まあ、綺麗きれいなこと」と云つて、仰山に体をゆすつた拍子に、腰のあたりが衝突して、純一は鈍い、弾力のある抵抗を感じた。

それを感じるや否や、純一は無意識に、殆ど反射的に坐を起つて、大分遠くへ押し遣やられていた火鉢そばの傍へ行つて、火箸ひばしを手につけて、「あ、火が消えそうになった、少しおこしましょうね」と云つた。

「わたくしそんなに寒かないわ」極めて穏かな調子である。なぜ純一が坐を移したか、少しも感ぜないと見える。

「こんなに大きな帽子があるでしようか」と云うのを、火をいじりながら覗のぞいて見れば、雑誌のしまいの方にある婦人服の広告であつた。

「そんなのが流行はやりだそうです。こつちへ来ている女にも、もうだいぶ大きいのを被かぶつたのがありますよ」

お雪さんは雑誌を見てしまった。そして両手で頬杖ほおづえを衝いて、無遠慮に純一の顔を見

ながら云った。

「わたくしあなたにお目に掛かったら、いろんな事をお話ししなくてはならないと思ったのですが、どうしたんでしょう、みんな忘れてしまつてよ」

「病院のお話でしょう」

「ええ。それもあつてよ」病院の話が始まつた。お医者は一週間も二週間も先きの事を言つているのに、妹は這入つた日から、毎日内へ帰ることばかり云つていたのである。一日毎に新しく望を属して、一日毎にその望が空しくなるのである。それが可哀そうでならなかつたと、お雪さんはさも深く感じたらしく話した。それから見舞に行つて帰りそうにすると泣くので、とうとう寐入るまでいたことやら、妹がなぜ直ぐに馴染んだかと思議に思つた看護婦が、やはり長く附き合つて見たら、一番好い人であつたことやら、なんとか云う太つたお医者が廻診の時にお雪さんが居合わすと、きつと頬つぺたを衝つ衝いたことやら、純一はいろいろな事を聞せられた。

話を聞きながら、純一はお雪さんの顔を見ている。譬えば微かな風が径尺の水盤の上を渡るように、この愛くるしい顔には、絶間なく小さい表情の波が立っている。お雪さんの遊びに來たことは、これまで何度だか知らないが、純一はいつもこの娘の顔を見るよりは、

却つてこの娘に顔を見られていた。それがきよう始て向うの顔をつくづく見ているのである。

そして純一はこう云うことに気が附いた。お雪さんは自分を見られることを意識しているということに気が附いた。それは当り前の事であるのに、純一の為めには、そう思った刹那に、大いなる発見をしたように感ぜられたのである。なぜかというに、この娘が人の見るに任す心持は、同時に人の為すに任す心持だと思つたからである。人の為すに任すと云つては、まだ十分でない、人の為すを待つ、人の為すを促すと云つても好きそうである。しかし我一步を進めたら、彼一步を迎えるだろうか。それとも一步を退くしりぞだろうか。それとも守勢しゆぜいを取つて踏み応えるであろうか。それは我には分らない。又多分彼にも分らないのであろう。とにかく彼には強い智識欲がある。それが彼をして待つような促すような態度に出いでしむるのである。

純一はこう思うと同時に、この娘を或る破碎し易い物、こわれ物、危殆きたいなる物として、これに保護を加えなくてはならないように感じた。今の自分の位置にいるものが自分ではなかつたら、お雪さんの危あやういことは実に甚だしいと思つたのである。そしてお雪さんがこの間に這入まつた時から、自分の身の内に漂つていた、不安なような、衝動的なような感じが、

払い尽されたように消え失せてしまった。

火鉢の灰を掻きならしている純一が、こんな風に頓とみに感じた冷却は、不思議にもお雪さんに通じた。夢の中でする事が、抑制を受けないために、自在を得ているようなものである。そして素直な娘の事であるから、残惜しいという感じに継いで、すぐに諦めあきらの感じが起る。

「またこん度遊びに来ましようね」何か悪い事でもしたのをあやまるように云つて、坐を立つた。

「ええ。お出いでなさいよ」純一は償つぐわずに置く負債があるような心持をして、常よりは優しい声で云つて、重たげに揺らぐお下げの後姿を見送っていた。

この日の夕方であつた。純一は忙いそがしげに支度をして初音町の家を出た。出る前にはなぜだか暫く鏡を見ていた。そして出る時手にラシイヌの文集を持っていた。

十五

純一が日記の断片

恥辱を語るペエジを日記に添えたくはない。しかし事實はどうもすることが出来ない。

己は部屋を出るとき、ラシイヌの一卷を手に取りながら、こんな事を思った。読もうと思う本を持って散歩に出ることは、これまでも度々あった。今日はラシイヌを持って出る。この本が外の本と違うのは、あの坂井夫人の所へ行くことの出来る「possibilite」《ポッシビリテエ》を己に与えるというだけの事である。行く^{ゆく}と行かぬとの自由はまだ保留してあると思った。

こんな考えは自ら欺^{みづか}くに近い。

実は余程前から或る希求に伴う不安の念が、次第に強くなつて来た。己は極力^{しりぞ}それを卻けようとした。しかし卻けても又来る。敵と対陣して小ぜりあいの絶えないようなものである。

大村はこの希求を抑制するのが、健康を害するものではないと云った。害せないかも知れぬが、己は殆どその煩わしさに堪えなくなつた。そしてある時は、こんなうるさい生活は人間の「dignite」《ジグニテエ》を傷^{きずつ}けるものだと言へ思つた。

大村は神経質の遺伝のあるものには、この抑制が出来なくて、それを無理に抑制すると病気になる^{わが}と云つた。己はそれを思い出して、我^{わが}神経系にそんな遺伝があるのかとさえ思

った。しかしそんな筈はない。己の両親は健康であつたのが、流行病で一時に死んだのである。

己の自制力の一角を破壊したものは、久し振に尋ねて来たお雪さんである。

お雪さんと並んで据わつていたとき、自然が己に投げ掛けようとした^{わな}弼の、頭の上近く^{ひらめ}閃くのが見えた。

お雪さんもあの弼を見たには違いない。しかしそれを^{のが}遁れようとしたのは、己の方であつた。

そして己は自分のそれを遁れようとするのを智なりとして、お雪さんを見^み下だしていた。その時己は我自制力を讃美していて、丁度それと同時に我自制力の一角が破壊せられるのに心附かずにいた。一たび^{つな}繋がれては断ち難い、堅^{けん}韌なる索を^{なわ}避けながら、己は縛せられても解き易い、脆^{ぜい}弱なる索に対する、戒心を弛^し廃^{はい}させた。

無智なる、可憐^{かれん}なるお雪さんは、この破壊この弛^{あえ}廃を敢てして自ら^{さと}曉らないのである。

もしお雪さんが来なかつたら、己は部屋を出るとき、ラシイヌを持って出なかつただろう。

己はラシイヌを手にとって、当てもなく上野の山をあちこち歩き廻っているうちに、不

安の念が次第に増長して来て、脈搏みやくはくの急になるのを感じた。丁度酒の酔えいが循めぐつて来るようであつた。

公園の入口まで来て、何となく物騒がしい広小路の夕暮を見渡していたとき、己は熱を病んでいるように、気が遠くなつて、脚が体の重りに堪えないようになった。

何をも思ふともなしに引き返して、弁天へ降りる石段の上まで来て、又立ち留まつた。ベンチの明くらいているのが一つあるので、それに腰を掛けて、ラシイヌを翻ひるがえして見たが、もうだいぶ昏くらくて読めない。無意味に引つ繰り返して、題号なんぞの大きい活字を拾つて、

[Phe'dre] 《フェエドル》なんという題号を見て、ぼんやり考え込んでいた。

ふいと気が附いて見ると、石段の傍にある街燈に火が附いていた。形が妙に大きくて、不愉快な黄色に見える街燈であつた。まさかあんな色の色硝子いろガラスでもあるまい。こん度通る時好く見ようと思う。

人間の心理状態は可笑おかしなものである。己はあの明りを見て、根岸へ行こうと決心した。そして明りの附いたのと決心との間に、密接の関係でもあるように感じた。人間は遅疑しながら何かするとき、その行為の動機を有り合せの物に帰するものと見える。

根岸へ向いて歩き出してからは、己はぐんぐん歩いた。歩度は次第に急になった。そし

て見覚えのある生垣や門が見えるようになってからも、先方の思わくに気兼をして、歩度を緩めるような事はなかった。あの奥さんがどう迎えてくれるかとは思ったが、その迎えかたにこつちが困るような事があるとは思わなかったのである。

門には表札の上の処に小さい電燈が附いていて、潜りの戸が押せば開くようになっていた。それを這入って、門かどぐち口のベルを押したときは、さすがに胸おどが跳つた。それは奥さんに気兼をする感じではなくて、シチュアションの感じであつた。

いつか見た小間使の外にどんな奉公人がいるか知らないが、もう日が暮れているのだから、知らない顔のものが出て来はしないかと思つた。しかしベルが鳴ると、直ぐにあの小間使が出た。奥さんがしづえと呼んでいたつけ。代々の小間使の名かも知れない。おおかた表玄関のお客には、外の女中は出ないのだろう。

ベルが鳴ってから電氣を附けたと見えて、玄関の腋わきの櫃れんじ子の硝子にぱつと明りが映つたのであつた。

己の顔を見て「おや」と云つて、「一寸ちよつと申し上げて参ります」と、急いで引き返して行つた。黙つて上がつても好いと云われたことはあるが、そうも出来ない。奥へ行つたかと思うと、直ぐに出て来て、「洋室は煖炉ストーブが焚たいてございませんから、こちらへ」と云つ

て、赤い緒の上草履そうろを揃そろえて出した。

廊下を二つ三つ曲がった。曲がり角に電気が附いているきりで、どの部屋も真暗で、しんとしている。

しづえの軽い足音と己の重い足音とが反響をした。短い間ではあったが、夢を見ているような物語めいた感じがした。

突き当りに牡丹ぼたんに孔雀くじゃくをかけた、塗縁ぬりぶちの杉戸がある。上草履を脱いで這入って見る

と内外うちそとが障子で、内の障子から明りがさしている。国の内に昔お代官の泊った座敷とい

うのがあって、あれがあんな風に出来ていた。なんというものだか知らない。仮りに書院

造りの colonnade 《コロナナード》と名づけて置く。恒先生こうせいはだいぶお大名だいみょうじ染みた事が

好きであつたと思う。

しづえが腰かを屈かがめて、内の障子を一枚開けた。この間まには微かな電燈が只一つ附けてあった。何も掛けてない、大きい衣桁いこうが一つ置いてあるのが目に留まった。しづえは向うの唐紙の際へ行つて、こん度は膝ひざを衝ついて、「いらつしやいました」と云つて、少し間を置いて唐紙を開けた。

己はとうとう奥さんに逢った。この第三の会見は、己が幾度か実現させまいと思つて、

未来へ押し遣るようにしていたのであったが、とうとう実現させてしまったのである。しかも自分が主動者になつて。

「どうぞお這入り下さいまし、大変お久し振でございますね」と奥さんは云つて、退紅色の粗い形かたの布団を掛けた置炬燵おきこたつを脇へ押し遣つて、桐きりの円火鉢の火を掻き起して、座敷の真ん中に鋪しいてある、お嬢様の据わりそうな、紫むらさき縮ちぢり緬めんの座布団の前に出した。炬燵かたわらの傍には天てん外がいの長者星が開けて伏せてあつた。

己は奥さんの態度に意外な真面目と意外な落着きとを感じた。只例の謎なぞの目のうちに、微かな笑えみの影がほのめいているだけであつた。奥さんがどんな態度で己に對するだろうという、はつきりした想像を画くことは、己には出来なかつた。しかし目前の態度が意外だということだけは直ぐに感ぜられた。そして一種の物足らぬような情と、萌芽ほうがのような反抗心とが、己の意識の底に起つた。己が奥さんを「敵」として視る最初は、この瞬間であつたかと思う。

奥さんは人に逢うのを予期してでもいたかと思われるように、束髪そくはつの髪の毛一筋乱れていなかった。こん度は己も奥さんの着物をはつきり記憶している。羽織はついぞ見たことのない、黄の勝った緑いろの縮緬であつた。綿入はお召縮緬だろう。明るい褐色に、細か

い黒い格子があつた。帯は銀色に鈍く光る、粗い唐草のような模様であつた。薄桃色の帯揚げが、際立つて艶に若々しく見えた。

己は良心の軽い呵責を受けながら、とうとう読んで見ずにしまったラシイヌの一卷を返した。奥さんは見遣りもせず手にも取らずに、「お帰りの時、どれでも外のをお持ちなさいまし」と云つた。

前からあつたのと同じ桐の火鉢が出る。茶が出る。菓子が出る。しづえは静かに這入つて静かに立つて行く。一間のうちはしんとしていて、話が絶えると、衝く息の音が聞える程である。二重に鎖された戸の外には風の音もしないので、汽車が汽笛を鳴らして過ぎる時だけ、実世間の消息が通うように思われるのである。

奥さんは己の返した一つの火鉢を顧みないで、指の尖の驚くべく細い、透き徹るような左の手を、退紅色模様 of 炬燵布団の上に載せて、稍神経質らしく指を拵げたりすぼめたりしながら、目を大きく睜つて己の顔をじつと見て、「お烟草を上がりませんの」だの、

「この頃あなた何をしていらつして」だのというような、無意味な問を発する。己も勉強めて無意味な返事をする。己は何か言いながら、覚えず奥さんの顔とお雪さんの顔を較べて見た。

まあ、なんという違いようだろう。お雪さんの、血の急流が毛細管の中を奔^{はし}っているような、ふっくりしてすべつくくない顔には、刹那も表情の変化の絶える隙^{ひま}がない。埒^{らち}もない対話をしているのに、一一^{いちいち}の詞^{ことば}に応じて、一一の表情筋の顫^{せんどう}動が現れる。Zait《ナイフ》な小曲に *sensible* 《サンシイブル》な伴奏がある。

それに較べて見ると、青み掛かつて白い、希臘^{ギリシャ}風^{ふう}に正しいとでも云いたいような奥さんの顔は、殆ど *masque* 《マスク》である。仮面である。表情の影を強いて尋ねる触角は尋ね尋ねて、いつでも大きい濃い褐色の瞳^{ひとみ}に達してそこに止まる。この奥にばかり何物かがある。これがあるので、奥さんの顔には今にも雷雨が来^こようかという夏の空の、電気に飽いた重くるしさがある。鷺^{しちよう}鳥や猛獣の物をねらう目だと云いたいのが、そんなに獐^{どう}猛^{もう}なのではない。Nymphe 《ニンフ》というものが熱帯の海にいたら、こんな目をしているだろうか。これがなかったら奥さんの顔を *nine* 《ミイヌ》 *de* 《ド》 *mort* 《モオル》と云っても好かろう。美しい死人の顔色と云っても好かろう。

そういう感じをいよいよ強めるのは、この目にだけある唯一の表情が談話と合一しない事である。口は口の詞を語って、目は目の詞を語る。謎の目を一層謎ならしめて、その持主を Sphinx 《スファンクス》にする処は、^{ここ}にある。

或る神学者が dogma 《ドグマ》は詞だと云うと、或る他の神学者が詞は詞だが、「強いられたる」詞だと云つたと聞いたが、奥さんの目の謎に己の与えた解釈も強いられたる解釈である。

己がこの日記を今の形のままでか、又はその形を改めてか、世に公にする時が来るだろうか。それはまだ解釈せられない疑問である。仮に他日これを読む人があるとして、己はここでその読む人に言う。「読者よ。僕は君に或る不可思議な告白をせねばならない。そしてその告白の端緒はこれから開ける」

奥さんの目の謎は伝染する。その謎の詞に己の目も応答しなくてはなくなる。

夜の静けさと闇とに飽いている上野の森を背に負うた、根岸の家の一間で、電燈は軟い明りを湛え、火鉢の火が被つた白い灰の下から、羅を漏る肌の光のように、優しい温まりを送る時、奥さんと己とは、汽車の座席やホテルの食卓を偶然共にした旅人と旅人とが語り交すような対話をしている。万人に公開しても好いような対話である。初度の会見の折の出来事を閲して来た己が、決して予期していなかった対話である。

それと同時に奥さんはその口にする詞の一語一語を目の詞で打消して、「あなたとわたくしとの間では、そんな事はどうでも好うございませぬ」とでもいうように、irony

ement《イロニツクマン》に打消して全く別様な話をしている。Une《ユヌ》persuasion
 《ペルシユアジヨン》puissante《ピユイツサント》et《エエ》chaleureuse《シャリヨナリ
 ヨオズ》である。そして己の目は無慙むげんに、抗抵なくこの話に引き入れられて、同じ詞を
 語る。

席と席とは二三尺を隔てて、己の手を翳かざしているのと、奥さんに閑却せられているのと、
 二つの火鉢が中に置いてある。そして目は吸引し、霊は回抱する。一団の火焰かえんが二人を裹つつ
 んでしまう。

己はこういう時間の非常に長いのを感した。その時間は苦痛の時間である。そして或る
 瞬間に、今あからさまに覚える苦痛を、この奥さんを知ってからは、意識の下で絶間なく、
 微かすかに覚えているのであったという発見が、稲妻のように、地獄の焰ほのおと烟けむりとに巻かれている、
 己の意識を掠かすめて過ぎた。

この間あいだに苦痛は次第に奥さんを敵として見させるようになった。時間が延びて行くに連
 れて、この感じが段々長じて来た。若もし己が強烈な意志を持っていたならば、この時席を
 蹴けて起たつて帰つただろう。そして奥さんの白い滑かな頬を批うたずに帰つたのを遺憾とした
 だろう。

突然なんの著明な動機もなく、なんの過渡かどもなしに。（この下日記の紙一枚引き裂きあり）

その時己は奥さんの目の中の微笑うちが、凱歌がいを奏するような笑わらいに変じているのを見た。そして一たび断たえた無意味な、余所々々よそよそしい対話が又続けられた。奥さんを敵とする己の感じは愈々いよいよ強まった。奥さんは云った。

「わたくし二十七日に立つて、箱根の福住ふくずみへ参りますの。一人で参っておりますから、お暇ならいらつしやいましな」

「さようですね。僕は少し遣つて見ようかと思つてゐる為事しごとがありますから、どうなりましかかりません。もう大変遅くなりました」

「でもお暇がございましたらね」

奥さんが、傍に這つてゐる、絹糸を巻いた導線の尖の控鈕ぼたんを押すと、遠くにベルの鳴る音がした。廊下の足音が暫くの間はつきり聞えていてから、次の間まで来たしづえの御用を伺う声がした。呼ばなければ来ないように訓練してあるのだなど、己は思った。

しづえは己を書棚のある洋室へ案内するのである。己は迂濶うかつにも、借りてゐる一卷を返すことに就いてはいろいろ考えていたが、跡を借かりるということに就いてはちつとも考えて

いなかった。己は思案する暇もなく、口実の書物を取り換えに座を起った。打勝たれた人の腑甲斐ない感じが、己の胸を刺した。

先きに立つて這入って、電燈を点じてくれたしづえと一しよに、己は洋室にいたとき、意識の海がまだ波立っていたためか、お雪さんと一しよにいるより、一層強い窘迫と興奮を感じた。しかしこの娘はフランスの小説や脚本にある部屋附きの女中とは違って、おとなしく、つつましやかに、入口の傍に立ち留まって、両手の指を緋鹿子の帯上げの上の処で、からみ合わせていた。こういう時に恐るべき微笑もせずに、極めて真面目に。己は選びもせずに、ラシイヌの外の一巻を抽き出して、持て来た一巻を代りに入れて置いて、しづえと一しよに洋室を出た。

己を悩ました質の、ラシイヌの一巻は依然として己の手の中に残ったのである。そして又己を悩まさなくては済まないだろう。

奥さんの部屋へ、暇乞に覗くと、奥さんは起って送りに出た。上草履を直したしづえは、廊下の曲り角で姿の見えなくなる程距離を置いて、跡から附いて来た。

「お暇があったら箱根へいらつしやいましね」と、静かな緩い語気で、奥さんは玄関に立っていて繰り返した。

「ええ」と云つて、己は奥さんの姿に最後の「瞥」^{いちべつ}を送った。

髪の毛一筋も乱れていない。着物の襟をきちんと正して立っている、しなやかな姿が、又端なく己の反感を促した。敵は己を箱根へ誘致せずには置かないかなと、己は心に思いながら右の手に持っていた帽を被つて出た。

空は青く晴れて、低い処を濃い霧の立ち籠^こめている根岸の小道を歩きながら、己は坂井夫人の人と為^なりを思つた。その時己の記憶の表面へ、力強く他の写象を排して浮き出して来たのは、ベルジック文壇の耆宿^{きしゆく} Lemonnier 《ルモンニエエ》の書いた Aude 《オオド》が事であつた。あの読んだ時に、女というものの一面向余りに誇張して書いたらしく感じたオオドのような女も、坂井夫人が有る以上は、決して無いとは云われない。

恥辱のペエジはここに尽きる。

己は拙^{ます}い小説のような日記を書いた。

十六

十二月二十五日になった。大抵腹を立てるような事はあるまいと、純一の推測していた

瀬戸が、一昨日谷中のおとついの借家へにこにこして来て、今夜亀清楼である同県人の忘年会に出ろと勧めたのである。純一は旧主人の高縄の邸へ名刺だけは出して置いたが、余り同県人の交際を求めようとはしないので、最初断ろうとした。しかし瀬戸が勧めて已まない。会に出る人のうちに、いろいろな階級、いろいろな職業の人があるのだから、何か書こうとしている純一が為めには、面白い観察をすることが出来るに違いないと云うのである。純一も別に明日何をしようという用事が極まってもいかなかったので、とうとう会釈負けをしてしまった。

丁度瀬戸のいるところへ、植長の上さんのお安というのが、亭主の誕生日なので拵えたと云つて赤飯を重箱に入れて、煮染を添えて持つて来た。何も馳走がなかったのに、丁度好いというので、純一は茶碗や皿を持って来て貰うことにして、瀬戸に出すと、上さんは茶を入れてくれた。黒縹子の領の掛かったねんねこ絆纏を着て、頭を櫛巻にした安の姿を、瀬戸は無遠慮に眺めて、「こんなお上さんの世話を焼いてくれる内があるなら、僕なんでも借りたいものだ」と云つた。「田舎者で一向届きませんが、母がために働くので、小泉さんのお世話は好くいたします」と謙遜する。

「なに、届かないものか。紺足袋を穿いている処を見ても、稼人だということは分か

る」と云う。

「わたくし共の田舎では、女でも皆紺足袋を穿きます」と説明する。その田舎というのが不思議だ。お上さんのような、意気な女が田舎者である筈がないと云う。とうとう安が故郷は銚子だと打明けた。段々聞いて見ると、瀬戸が写生旅行に行つたとき、安の里の町内に泊つたことがあつたそうだ。いろいろ銚子の話をして、安が歸つた跡で、瀬戸が狡猾らしい顔をして、「明日柳橋へ行つたつて、僕の方法はないが、君の所には惜しい材料がある」と云つた。どういふわけかと問うと、芸者なんぞは、お白いや頬紅の *affet* 《エフエエ》を研究するには好いかも知れないが、君の家主のお上さんのような生地きじの女はあの仲間にはないと云つた。それから芸者に美人があるとか無いとかいふ議論になつた。その議論の結果は芸者に美人がないではないが、皆拵こしらへえたような表情をしていて、芸者という *type* 《タイプ》を研究する粉本ふんぽんにはなつても、女という自然をあの中に見出すことは出来ないということになつた。この「女という自然」は慥たしかに安に於いて見出すことが出来ると瀬戸に注意せられて、純一も首肯せざるを得なかつた。話し草臥くたびれて瀬戸が歸つた。純一は一人になつてこんな事を思つた。一体己には *esprit* 《エスプリイ》 *non* 《ノン》 [*pre'occupe'*] 《プレオキュペエ》が闕かけている。安という女が瀬戸の *frivole* 《フリヴオ

ル》な目で発見せられるまで、己の目には唯家主の姫よめというものが写っていた。人妻が写っていた。それであの義務心の強そうな、好んで何物をも犠牲にするような性格や、その性格を現わしている、忠実な、甲斐甲斐しい一般現象に対しては同情を有していたが、どんな顔をしているということにさえも、ろくろく気が附かなかった。瀬戸に注意せられてから、あの顔を好く思い浮べて見ると、田舎生れの小間使上がりで、植木屋の女房になっている、あの安がどこかに美人の骨相を持っている。色いろつや艶は悪い。身みぎれい綺麗にはしていても髪かみ容かたちに構かまわない。それなのにあの円顔の目と口とには、複製図で見た Monna 《モナ》 Lisa 《リイザ》の媚こびがある。芸者やなんぞの拵えた表情でない表情を、安は有しているに違いない。思つて見れば、抽象的な議論程容易なものはない。瀬戸でさえあんな議論をするが、明治時代の民間の女と明治時代の芸者とを、簡単な、しかも典型的な表情や姿勢で、現わしている画は少いようだ。明治時代はまだ一人の Constantin 《コンスタンタン》 Guys 《ギス》を生まないのである。自分も因襲の束縛を受けない目だけをでも持たいたいものだ。今のような事では、芸術家として世に立つ資格がないと、純一は反省した。五時頃に瀬戸が誘いに來た。

「きようはお安さんがはんべつていないじゃないか」と、厭いやな笑顔をして云う。

「めつたに来やしない」

純一は生き帳ちやうめん面な、氣の利かない返事をしながら、若し瀬戸の来た時に、お雪さんでもいたら、どんなに冷かされるか、知れたものではないと、氣味悪く思った。中沢の奥さんが筆たんす笥を買って遣やつて、内から嫁入をさせたとき、奥さんに美しく化粧をして貰つて、別な人のようになって出て来て、いつも友達のようにしていたのが、叮てい嚙ねいに手を衝ついて暇乞をすると、暫しばらく見ていたお雪さんが、おいおい泣き出して皆を困らせたという話や、それから中沢家で、安の事を今でもお姫の安と云つていふという話が記憶に浮き出して来た。支度をして待つていた純一は、瀬戸と一しよに出て、上野公園の冬木立の間を抜けて、広小路で電車に乗った。

須田町で九段両国の電車に乗り換えると、不格好な外がい套とうを被きて、この頃見馴れない山高帽を被かぶつた、酒飲みらしい老人の、腰を掛けている前へ行つて、瀬戸がお辞儀をして、「これからお出掛ですか、わたくしも参るところで」と云つてゐる。

瀬戸は純一を直ぐにその老人に紹介した。老人はY県出身の漢学者で、高山先生という人であつた。美術学校では、岡倉時代からいろいろな学者に、科外講義に出て貰つて、講義録を出版している。高山先生もその講義に來たとき、同県人の生徒だといふので、瀬戸

は近附きになったのである。

高山先生は宮内庁に勤めている。漢学者で仏典も精^{くわ}しい。鄧^{とう}完^{かん}白^{ぱく}風の篆^{てん}書^{しよ}を書く。漢文が出来て、Y県人の碑銘を多く撰^{えら}んでいる。純一も名は聞いていたのである。

暫くして電車が透いたので、純一は瀬戸と並んで腰を掛けた。

瀬戸は純一に小声で云った。「あの先生はあれでなかなか剽^{ひよう}軽^{きん}な先生だよ。漢学はしていても、通人なのだからね」

純一は先生が幅広な、夷^{えびすさぶろう}三郎めいた顔をして、女にふざける有様を想像して笑いたくなるのを我慢して、澄ました顔をしていた。

両国の橋手前^{はしでまえ}で電車を下りて、左へ曲つて、柳橋を渡つて、高山先生の跡に附いて亀^か清^{めい}に這入^{はい}つた。

先生がのろのろ上がつて行くと、女中が手を衝いて、「曾根さんでいらつしやいますか」と云つた。

「うん」と云つて、女中に引かれて梯子^{はしご}を登る先生の跡を、瀬戸が附いて行くので、純一も跡から行つた。曾根というのは、書肆博聞社^{しよし}の記者兼番頭さんをしている男で、忘年会の幹事だと、瀬戸が教えてくれた。この男の名も、純一は雑誌で見て知っていた。

登って取つ附きの座敷が待合になっていて、もう大勢の人が集まっていた。

外はまだ明るいのに、座敷には電燈が附いている。一方の障子に嵌めた硝子越しに、隅田川が見える。斜に見える両国橋の上を電車が通っている。純一は這入ると直ぐ、座布団の明いているのを見附けて据わって、鼠掛ねずみがかった乳色の夕べの空気を透かして、ぽつぽつ火の附き始める向河岸を眺めている。

一番盛んに見える、この座敷の一群は、真中に据えた棋盤ごばんの周囲に形づくられている。

当局者というと、当世では少々恐ろしいものに聞えるが、ここで局に当っている老人と若者とは、どちらも極きわめてのん気な容貌をしている。純一は象棋しょうぎも差さず棋ごも打たないので、棋を打っている人を見ると、単に時間を打ち殺す人としか思わない。そう云えたと云って、何も時間が或る事件に利用せられなくてはならないと云う程の窮屈な utilitaire 《ユチリテ エル》 になっているのでもないが、象棋や domino 《ドミノ》 のように、短時間に勝負の付くものと違って、この棋というものが社交的遊戯になっている間は、危険なる思想が蔓ま延んえんするなどという虞おそれはあるまいと、若い癖に生利なまぎきな皮肉を考えている。それも打っている人はまだ好い。それを幾重いくえにも取り巻いて見物して居る連中に至っては、実に気が知れない。

この群むれの隣に小さい群が出来ていて、その中心になっているのは、さつき電車で初めて逢った高山先生である。先生は両手を火鉢かきに翳しながら、何やら大声で話している。純一はしよさいなさたぬきにこれに耳を傾けた。聞けば狸たぬきの話をしている。

「そりやあわたし共のいた時の聖堂なんというものは、今の大学の寄宿舍なんぞとは違って、風雅なものだったよ。狸が出たからね。我々は廊下続きで、障子を立て切った部屋を当てがわれている。そうすると夜なか過ぎになつて、廊下に小さい足音がする。人間の足音ではない。それが一つ一つ部屋を覗のぞいて歩くのだ。起きていると通り過ぎてしまう。寐ねているなら行燈あんどんの油を嘗なめようというのだね。だから行燈は自分で掃除しなくても好い。廊下に出してさえ置けば、狸奴めが綺麗に舐なめてくれる。それは至極結構だが、聖堂には狸が出るという評判が立ったもんだから、狸の贗物にせものが出来たね。夏なんぞは熱くて寐ねられないと、紙鳶たこい糸に杉の葉を附けて、そいつを持って塀の上に乘つて涼んでいる。下を通る奴は災難だ。頭や頬つぺたをちよいちよい杉の葉でくすぐられる。そら、狸だということで逃げ出す。大小を挿さした奴は、刀の反りを打って空を睨にらんで通る。随分悪い徒いたずらをしたものさね。しかしその頃の書生だつて、そんな子供のするような事ばかりしていたかということ、そうではない。塀を乗り越して出て、夜の明けるまでに、塀を乗り越して帰ったこと

もある。人間に論語さえ読ませて置けばおとなしくしていると思うと大違いさ」

狸の話が飛んだ事になってしまった。純一は驚いて聞いていた。

そこへ瀬戸が来て、「君会費を出したか」と云うので、純一はやつと気が附いて、瀬戸に幹事の所へ連れて行つて貰つた。

曾根という人は如才なさそうな小男である。「学生諸君は一元です」と云う。

純一は一寸^{ちよつと}考えて、「学生でなければ幾らですか」と云つた。

曾根は余計な事を問う奴だと思ふらしい様子であつたが、それでも慇懃^{いんぎん}に「五円ですが」と答えた。

「そうですか」と云つて、純一が五円札を一枚出すのを見て、背後^{うしろ}に立っていた瀬戸が、「馬鹿にきばるな」と冷かした。曾根は真面目な顔をして、名を問うて帳面に附けた。

そのうち人が段々来て、曾根の持つていた帳面の連名の上に大抵丸印が附いた。

最後に某大臣が見えたのを合図に、隣の間^まとの界^{さかい}の襖^{ふすま}が開かれた。

何畳敷か知らぬが、ひどく広い座敷である。廊下からの入口^{いりぐち}の二間だけを明けて座布団が四角に並べてある。その間々に火鉢が配つてある。向うの床の間の前にある座布団や火鉢はだいぶ小さく見える程である。

曾根が第一に大臣を床の間の前へ案内しようとする、大臣は自分と同じフロックコートを着た、まだ三十位の男を促して、一しよに席を立たせた。只大臣の服には、控鈕ぼたんの孔あなに略りやく綬じゆが挿はさんである。その男のにはそれが無い。後のちに聞けば、高縄の侯爵家の家扶みようだいが名代なだいに出席したのだそうである。

座席に札などは附けてないので、方々で席の譲り合いが始まる。笑いながら押し合ったり揉もみ合ったりしているうちに、謙讓けんじやうしている男が、引き摩ずられて上座じやうざに据えられるものもある。なかなかの騒動である。

ようようの事で席の極まるのを見てみると、中程より下に分科大学の襟えり章じやうを附けたものもある。種々な学校の制服らしいのを着たものもある。純一や瀬戸と同じような小倉袴こくらばかまのものもある。所謂いわゆる学生諸君が六七人いるのである。

こんな時には純一なんぞは気楽なもので、一番跡から附いて出て、末席ぼつせきと思つた所に腰を卸すと、そこは幹事の席ですと云つて、曾根が隣りへ押し遣つた。

ずつと見渡すに、上流の人は割合に少いらしい。純一は曾根に問うて見た。

「今晚出席しているのは、国から東京に出ているものの小部分に過ぎないようですが、一体どんな人たちの人がこの会を催したのですか」

「小部分ですとも。素と少壮官吏と云ったような人だけで催すことになっていたのが、人の出入^{でいり}がある度に、色々交^{まじ}つて来たのですよ。今では新俳優もいます」

こんな話をしているうちに、女中が膳を運んで来始めた。

土地は柳橋、家は亀清である。純一は無論芸者が来ると思った。それに瀬戸がきのうの話の様子では来る例になっているらしかった。それに膳を運ぶのが女中であるのは、どうした事かと思つた。

酒が出た。幹事が挨拶をした。その中^{うち}に侯爵家から酒を寄附せられたという報告などがあつた。それからY県出身の元老大官が多い中に、某大臣が特に後進を愛してこういう会に臨まれたのを感謝するというような詞もあつた。

大臣は大きな赤い顔をして酒をちびりちびり飲んでゐる。純一は遠くからこの人の嚴^{がんじ}乗^{よう}な体を見て、なる程世間の風波に堪えるには、あんな体でなくてはなるまいと思つた。折々近処の人と話をする。話をする度にきつと微笑する。これも世に処し人々を遇する習慣であろう。しかし話をし止^やめると、眉間^{みけん}に深い皺^{しわ}が寄る。既往に於ける幾多の不如意が刻み附けた [écriture] 《エクリチュール》 runique 《リユニック》であろう。

吸物が吸つてしまわれて、刺身が荒された頃、所々^{しょしょ}から床の間の前へお杯^{さかずき}頂^{ちやうだい}戴

に出掛けるものがある。所々で知人と知人とが固まり合う。誰^{たれ}やらが誰やらに紹介して貰う。そこにもここにも談話が湧^わく。忽ちどこかで、「芸者はどうしたのだ」と叫んだものがある。誰かが笑う。誰かが賛成と呼ぶ。誰かがしつと云う。

この時純一は、自分の直ぐ傍^{そば}で、幹事を取り巻いて盛んに議論をしているものがあるのに気が附いた。聞けば、芸者を呼ぶ呼ばぬの問題に就いて論じているのである。

暫く聞いているうちに、驚く可^べし、宴会に芸者がいる、宴会に芸者がいらぬと争っている、その中へ謂^いわば *tertium* 《テルチウム》 *comparationis* 《コンパレーション》として例の学生諸君が引き出されているのである。宴会に芸者がいらぬのではない。学生諸君のいる宴会だから、芸者のいない方が好^いいという処に、[Antigishisme] 《アンチゲイシャイズム》の側は帰着するらしい。それから一体誰がそんな事を言い出したかということになった。

この声^{こゝろ}高^{たか}に、しかも双方から *ironie* 《イロニー》の調子を以て遣^はられてゐる議論を、おとなしく真面目に引き受けていた曾根幹事は、已むことを得ず、こういう事を打明けた。こん度の忘年会の計画をしているうちに、或る日教育会の職員になつてゐる塩田^{しおた}に逢った。塩田の云うには、あの会は学生も出ることだから、芸者を呼ばないが好^いいと云うことであ

った。それから先輩二三人に相談したところが、異議がないので、芸者なしということになったそうである。

「偽善だよ」と、聞いていた一人が云った。「先輩だって、そんな議論を持ち出されたとき、己は芸者が呼んで貰いたいと云うわけには行かない。議論を持ち出したものの偽善が、先輩を余儀なくして偽善をさせたのだ」

「それは穿^{うが}つて云えばそんなものかも知れないが、あらゆる美德を偽善にしてしまっても困るね」と、今一人が云った。

「美德なものか。芸者が心^{しん}から厭なのなら、美德かも知れない。又そうでなくても、好きな芸者の誘惑に真面目に打勝とうとしているのなら、それも美德かも知れない。学生のいないところでは呼ぶ芸者を、いるところで呼ばないなんて、そんな美德はないよ」

「しかし世間というものはそうしたもので、それを美德としなくてはならないのではあるまいか」

「これはけしからん。それではまるで偽善の世界になってしまうね」

議論の火の手は又熾^{さか}んになる。純一は面白がつて聞いている。熾^{さか}んにはなる。しかしそれは花火綫^{せんこう}香^{かう}が熾^{さか}んに燃えるようなものである。なぜというに、この言い争っている一^ひ

群とむれの中に、芸者が真に厭だとか、下くだらなとか思っているらしいものは一人もない。いずれも自分の好む所を暴露しようか、暴露すまいか、どの位まで暴露しようかなどという心持でしゃべっているに過ぎない。そこで偽善には相違ない。そんなら偽善呼ばわりをしている男はどうかというに、これも自分が真の善というものを持っているので、偽善を排斥するといふのでもなんでもない。暴露主義である。浅薄な、随したがって価値のない Cynism 《シニスム》であると、純一は思っている。

とにかく塩田君を呼んで来ようじゃないかということになった。曾根は暫く方々見廻していたが、とうとう大臣の前に据わって辞儀をしている塩田を見附けて、連れに行った。

塩田という名も、新聞や雑誌に度々出たことがあるので、純一は知っている。どんな人かと思つて、曾根の連れて来るのを待っていると、想像したとはまるで違つた男が来た。

新しい道徳というものに、頼よるべきものがない以上は、古い道徳に頼よらなくてはならない、古むかしに復かえるが即ち醒せい覚かくであると云つている人だから、容貌も道学先生らしく窮屈きうくつに出来ていて、それに幾分か世と忤さかつている、misanthrope 《ミザントロップ》らしい処がありそうに思つたのに、引つ張られて来た塩田は、やはり曾根と同じような、番頭らしい男である。曾根は小男なのに、塩田は背が高い。曾根は細面で、尖とがつたような顔をしているのに、

塩田は下膨れの顔で、濃い頬髯^{ほおひげ}を剃^そった迹^{あと}が青い。しかしどちらも如才なさそうな様子をして、目にひどく融通の利きそうなironique《イロニック》な閃^{ひらめ}きを持つている。「こんな事を言わなくては、世間が渡られない。それでお互にこんな事を言っている。実際はそうばかりは行^いかない。それもお互に知っている」とでも云うような表情が、この男の断えず忙^{いそが}しそうに動いている目の中に現れているのである。

「芸者かね。何も僕が絶^{ぜったい}待^{たい}的に拒絶したわけじゃあないのです。学生諸君も来られる席であつて見れば、そんなものは呼ばない方が穩当だろうと云つたのですよ」塩田は最初から讓歩し掛かっている。

「そんなら君の、その不穩当だという感じを少し辛抱して貰えば好^いいのだ」と、偽善嫌いの男が露骨に出た。

相談は直ぐに纏^{まと}まった。塩田は費用はどうするかと云い出して、一頓^{いっとうんざ}挫^さを来たしそうであつたが、会費が余り窮屈には見積つてない処へ、侯爵家の寄附があつたから、その心配はないと云つて、曾根は席^たを起つた。

四五人を隔てて据わっていた瀬戸が、つと純一の前に来た。そして小声で云つた。

「僕のような学生という奴は随分侮辱せられているね。さっきからの議論を聞いただろう」

純一が黙つて微笑ほほえんでいると、瀬戸は「君は学生ではないのだが」と言い足した。

「もう冷かすのはよし給え。知らない人ばかりの宴会だから、恩典に浴したくなかつたのだ。僕はこんな会へ来たら、国の詞ことばでも聞かれるかと思つたら、皆東京子とうきょうこになつてしまつてゐるね」

「そうばかりでもないよ。大臣の近所へ行つて聞いて見て見給え。ござりますのぎに、アクセントのあるのなんぞが沢山聞かれるから」

「まあ、どうやらこうやら柳橋の芸者というものだけは、近くで拝見ができそうだ」

「なに。今頃出し抜ぬけに掛けたつて、ろくな芸者がいるものか。よくよくのお茶碾ちやひきでなくては」

「そういうものかね」

こんな話をしている時、曾根が座敷の真中に立つて、大声でこう云つた。

「諸君。大臣閣下は外ほかに今一つ宴会がおりなさるそうで、お先きへお立ちになりました。諸君に宜よろしく申してくれと云うことでありました。どうぞ跡の諸君は御ゆつくりなさるよように願います。只今別品べつぴんが参ります」

所々しよしよに拍手するものがある。見れば床の間の前の真中の席は空虚になつていた。

殆ど同時に芸者が五六人這入つて来た。

十七

席はもう大分乱れている。所々に小さい圈わを作つて話をしてるかと思えば、空虚な坐布団も間々あいだあいだに出来ている。芸者達は暫く酌さくをしていたが、何か呶ささやき合つて一度に立つてこん度は三味線を持つて出た。そして入口いりぐちのあたりで、床の間に併行した線の上に四人が一列に並んで、弾いたり歌つたりすると、二人はその前に立つて踊つた。そうぞうしかつた話声があらかた歇やんだ。中にはひどく真面目になつて踊を見ているものもある。

まだ純一の前を起たずに、背を円くして胡坐あぐらを搔かいて、不精らしく紙巻煙草を飲んでゐた瀬戸が、「長歌の老松おいまつというのだ」と、教育的説明をして、暫くして又こう云つた。

「見給え。あのこつちから見て右の方で踊っている芸者なんぞは、お茶碾ちやき仲間にしては別品だね」

「僕なんぞはどうせ上手か下手か分からないのだから、踊はお酌の方が綺麗で好かろうと思う。なぜきようはお酌が来ないのだろう」

「そうさね。明いたのがいなかったのだろう」

こう云つて、瀬戸はついと起つて、どこかへ行つてしまった。純一は自分の右も左も皆空席になつてゐるのに気が附いて、なんだか居心が悪くなつた。そこで電車で逢つて一しよに來た、あの高山先生の処へでも行つて見ようかと、ふと思ひ附いて、先生の顔が見えたように思つた、床の間の左の、違^{ちが}柵^{がいだな}のあたりを見ると、先生は相變らず何やら盛んに話してゐる。自分の隣にいた曾根も先生の前へ行つてゐる。純一は丁度好いと思つて、曾根の背後^{うしろ}の方へ行つて据わつて、高山先生の話聞いた。先生はこんな事を言つてゐる。

「秦^{しんわい}淮には驚いたね。さようさ。幅が広い処で六間もあろうか。まあ、六間幅の溝^{どぶ}だね。その水のきたないことおびただし。それから見ると、西湖^{せいこ}の方はとにかく湖水らしい。好い景色だと云つて好い処もある。同じ湖水でも、洞庭湖^{どうていこ}は駄目だ。冬往^いつて見たからかも知れないが、洲^すばかりあつて一向湖水らしくない」

先生の支那に行^ゆかれた時の話と見える。先生は純一の目の自分の顔に注がれてゐるのに気が附いて、「失礼ですが、持ち合せていますから」と云つて、杯^{さかずき}を差した。それを受けると、横の方から赤い襦^{じゅ}袢^{ばん}の袖の絡んだ白い手がひよいと出て、酌をした。

その手の主を見れば、さつき踊つてゐるのを、瀬戸が別品だと云つて褒めた女であつた。

純一は先生に返杯をして、支那の芝居の話やら、西瓜すいかの核たねをお茶受けに出す話やらを跡に聞き流して、自分の席に帰った。両隣共依然として空席になっている。純一はぼんやりして、あたりを見廻している。

同じ列の曾根の空席を隔てた先きに、やはり官吏らしい、四十恰好の、洋服の控鈕ぼたんの孔から時計の金鎖を垂らしている男が、さつき三味線を弾いていた、更けた芸者を相手に、頻しきりに話している。小さい銀杏いちようがえ返しを結いつて、黒縹くろしめす子の帯を締めている中婆ちゅうばあさんである。相手にとは云つても、客が芸者を相手にしている積りでいるだけで、芸者は些すこしもこの客を相手にしてはいない。客は芸者を揶揄からかつている積りで、徹頭徹尾芸者に揶揄からかわれている。客を子供扱いにすると云おうか。そうでもない。無智な子供を大人が扱うには、多少いたわる情がある。この老妓ろうぎは〔malintentionne〕《マルアンタンシヨンネエ》に侮辱を客に加えて、その悪意を包み隠すだけの抑制をも自己の上に加えていないのである。客は自己の無智に乗ぜられていながら、少しもそれを曉さとらずに、薄い笑談しょうだんの衣を掛けた、苦い皮肉あびを浴あびせられて、無邪気に笑い興じている。

純一は暫く聞いていて、非常に不快に感じた。馬鹿にせられている四十男は、気の毒がつて遣る程の価値はない。それに対しては、純一は全然〔indifferent〕《アンジフェラン》

でいる。しかし老妓は憎い。

芸者は残忍な動物である。これが純一の最初に芸者というものに下した解釈であつた。突然会話の続きを断つて、この Atropos 《アトロポス》は席を立つた。

その時、老妓の席を立つのを待っていたかと思われるように、入り代つて来て据わつた島田は、例の別品である。手には徳利を持つてゐる。

「あなた、お熱いところを」と、徳利を金鎖の親爺の前へ、つと差し出した。

親爺は酒を注がせながら、女の顔をうるさく見て、「お前の名はなんと云うのだい」と問う。

「おちやら」と返事をしたが、その返事には愛敬笑も伴っていない。そんならと云つて、さつきの婆あさんのように、人を馬鹿にしたと云う調子でもない。おちやらの顔の氣象は純然たる *calme* 《カルム》が支配している。無風である。

純一は横からこの女を見ている。極若い。この間までお酌という雛でいたのが、ようよう *dne* 《ドリユウ》になつたのであろう。細面の頬にも鼻にも、天然らしい一抹の薄紅が漲っている。涼しい目の瞳に横から見れば緑色の反射がある。着物は落ち着いた色の、上着と下着とが濃淡を殊にしていると云う事だけ、純一が観察した。藤鼠、色

変りの織縮緬おりちりめんに、唐織お召の丸帯をしていたのである。帯上げは上に、腰帯は下に、帯を中にして二つの併行線を劃かくした緋ひと、折り返して据わった裾に、三角形をなしている襦袢の緋とが、先まずひどく目を刺戟しげきする。

純一が肴さかなを荒しながら向うをちよいちよい見ると、女の方でも小さい煙管きせるで煙草を飲みながらこつちをちよいちよい見る。ひよいと島田鬚しまだまげを前へ俯向うつむけると、脊柱せきちゅうの処の着物を一掴ひとつかみ、ぐつと下へ引つ張つて着たような襟元に、尖さきを下にした三角形の、白いぼんの窪くぼが見える。純一はふとこう思った。この女は己おれのいる処の近所へ来るようにしているのではあるまいか。さつき高山先生の前に来た時も、知らない内に己の横手に据わっていた。今金鎖の親爺の前に来ていのも己の席に近いからではあるまいかと思ったのである。しかし直ぐに又自分を嘲あざけった。幾ら瀬戸の言うのが事実で、今夜来ている芸者はお茶碾きばかりでも、小倉袴を穿はいた書生の跡を追い廻はすす筈がない。我ながら馬鹿氣た事を思ったものだ、純一は心機一転して、丁度持て来た茶碗蒸しを箸はしで掘り返し始めた。

この時黒羽二重くろはぶたえの五所紋いつつもんの羽織を着流した、ひどくにやけた男が、金鎖の前に来て杯を貰っている。二十代の驚くべく垢あかの抜けた男で、物を言う度に、薄化粧をしているらしい頬たてに、豎たてに三本ばかり深い皺が寄る。その物を言う声が、なんとも言えない、不自然な、

きいきい云うような声である。Voix 《ヴォア》 de 《ド》 fausset 《フォオセエ》である。
 左の手を畳に衝いて受けた杯に、おちやらが酌をすると、「憚はばかりさま様」と挨拶をする。
 香油に光る髪が一握程、狭い額に垂れ掛かっている。

金鎖がこんな事を云う。「こないだは内の子供等が有楽座へ見に行つて、帰つてから君のお噂うわさをしていましたよ。大相たいそう面白かつたそうで」

「いえ未熟千万でございまして。しかしどうぞ御閑暇ごかんかの節に一度御見物を願いたいものでございます」

純一は曾根の話に、新俳優が来ていると云つたことを思い出した。そして御苦労にもこの俳優の為に前途を氣遣つた。俳優は種々な人物ふんに扮して、それぞれ自然らしい科白かはくをしなくてはならない。それが自分に扮しているだけで、すでにあんな不自然に陥っている。あのまま青年俳優の役で舞台に出たら、どうだろう。どうしても真面目な劇にはならない。
 [Facile] 《ファセエチイ》である。俄にわかである。先ずあの声はどうしたのだろう。あの男だつて、決して生れながらにあんな声が出るのではあるまい。わざわざ好いいい声を出しようと思つて、あんな声を出して、それが第二の天賦になつたのだらう。譬たとえば子供が好い子をしろと云われて、醜い grimace 《グリマス》を見せるようなものだらう。気の毒な事だ

と思った。

こう思うと同時に、純一はおちやらがこの俳優に対して、どんな態度に出るかを観察することを怠らない。

社会のあらゆる方面は、相接触する機会のある度に、容赦なく純一の illusion 《イリュウジョン》を打破してくれる。殊に東京に出てからは、どの階級にもせよ、少し社会の水面に頭を出して泳いでいる人間を見る毎に、もはや純一はその人が趣味を有しているなれどとは予期していない。そこで芸者が趣味を解していようと初めから思っていない。しかしおちやはこのにやけ男を、青眼を以て視るだろうか。将た白眼を以て視るだろうか。

純一の目に映ずる所は意外であつた。おちやは酌をするとき、ちよいと見たきり顧みない。反応^{はんおう}はどう見ても中性である。

俳優はおちやらと袖の相触れるように据わつて、杯を前に置いて、やはり左の手を畳に衝いて話している。

「狂言も筋が御見物にお分かりになれば宜しいということになりませんと、勤めにくくて困ります。脚本の長い白^{せりふ}を^{あんき}一々諳記させられてはたまりません。大家のお方の脚本は、ど

うもあれに困ります。女形ですか。一度調子を呑み込んでしまえば、そんなにむずかしくはございません。女優も近々出来ましようが、やはり男でなくては勤めにくい女の役があると仰おつしやる方もございます。西洋でも昔は男ばかりで女の役を勤めましたそうでございます」

金鎖は天晴あっぱれ

[me'ce'ne]

《メセエヌ》らしい顔をして聞いている。おちやらはさも

退屈らしい顔をして、紵くけいも紐程の烟管挿きせるさしを、膝ひざの上で結んだり、ほどいたりしている。この畚ぶいの中の白魚がよじれるような、小さい指の戯れを純一が見ていると、おちやらもやはり目を偷ぬすむようにして、ちよいちよい純一の方を見るのである。

視線が暫しばらく往來ゆききをしているうちに、純一は次第に一種の緊張を感じて来た。どうにか解決を与えなくてはならない問題を与えられているようで、窘迫きんぱくと不安とに襲われる。物でも言ったら、この不愉快な縛いましめが解けよう。しかし人の前に来て据わっているものに物は言いにくい。いや。己の前に来たって、旨うまく物が言われるかどうか、少し覚束おぼつかない。一体あんなに己の方を見るようなら、己の前へ来れば好い。己の前へ来たって、外の客のするように、杯を遣やるなんという事が出来るかどうか分からない。どうもそんな事をするのは、己には不自然なようである。強いてしても柄にないようでまずかろう。向うが誰

にでも薦めるように、己に酒を薦めるのは造作はない筈である。なぜ己の前に来ないか。そして酌をしないか。向うがそうするには、先ず打勝たなくてはならない何物も存在してないではないか。

ここまで考えると、純一の心の中には、例の女性に対する敵意が萌^{きざ}して来た。そしてあいつは己を不言の間に翻^{ほんろう}弄^{ろう}していると感じた。勿^{もちろん}論この感じは的^{てき}のあなたを射るようなもので、女性に多少の冤^{えん}屈^{くつ}を負わせているかも知れないとは、同時に思っている。しかしそんな顧慮は敵意を消滅させるには足らないのである。

幸におちやらの純一の上に働かせている誘惑の力が余り強くないのと、二人の間にまだ直接な collision 《コリジョン》を来たしていなかったのとの二つのために、純一はこの可哀らしい敵の前で退却の決心をするだけの自由を有していた。

退路は瀬戸の方向へ取ることになった。それは金鎖の少し先きの席へ瀬戸が戻って、肴を荒しているのを発見したからである。おちやらのいる所との距離は大して違わないが、向うへ行^ゆけば、顔を見合せることだけはないのである。

純一は誘惑に打勝った人の小さい triomphe 《トリオムフ》を感じて席を起った。しかし純一の起つと同時に、おちやらも起つてどこかへ行った。

「どうだい」と、瀬戸が目で迎えながら声を掛けた。

「余り面白くもない」と、小声で答えた。

「当り前さ。宴会というものはこんな物なのだ。見給え。又踊るらしいぜ。ひどく勉強しやがる」

純一が背後を振り返つて見ると、さっきの場所に婆あさん連が三味線を持つて立つていて、その前でやはりおちやらと今一人の芸者とが、盛んな支度をしている。上着と下着との裾をぐつとまくつて、帯の上に持て来て挟む。おちやらは緋の友禅模様の長襦袢、今一人は退紅色の似寄つた摸様の長襦袢が、膝から下に現れる。婆あさんが据わつて三味線を弾き出す。活潑な踊が始まる。

「なんだろう」と純一が問うた。

「桃太郎だよ。そら。爺いさんと婆あさんとがどうかしたと云つて、歌っているだろう」さすが酒を飲む処へは、真先に立つて出掛ける瀬戸だけあつて、いろんな智識を有している、純一は感心した。

女中が鮓すしを一皿配つて来た。瀬戸はいきなり鮓まぐろの鮓すしを摘つまんで、一口食つて膳の上を見廻した。刺身の醤油を探したのである。ところが刺身は綺麗に退治してしまつてあつたので、

女中が疾^とづくに醬油も一しよに下げてしまった。跡には殻^{かき}附の牡蠣^{かき}に添えて出した醋^すがあるばかりだ。瀬戸は鮪の鮓にその醋を附けて頬張った。

「どうだい。君は鮓を遣らないか」

「僕はもうさっきの茶碗蒸しで腹が一ぱいになってしまった。酒も余り上等ではないね」
「お客次第なのだよ」

「そうかね」純一はしよさいなさに床の間の方を見廻して云った。「なんだね。あの大きな虎は」

「岸駒^{がんこ}さ。文部省の展覧会へ出そうもんなら、鑑査で落第するのだ」

「どうだろう。もうそろそろ帰つても好くはあるまいか」

「構^{かま}うものか」

暫くして純一は黙つて席を起つた。

「もう帰るのか」と、瀬戸が問うた。

「まあ、様子次第だ」こう云つて、座敷の真中を通つて、廊下に出て、梯^{はしご}を降りた。實際目立たないように帰られたら帰ろう位の考であつた。

梯の下に降りると、丁度席上で見覺えた人が二人便所から出て來た。純一は自分だけ早

く帰るのを見られるのが極まりが悪いので、便所へ行った。

用を足してしまつて便所を出ようとしたとき、純一はおちやらが廊下の柱に寄り掛かつて立っているのを見た。そして何故ともなしに、びつくりした。

「もうお帰りなさるの」と云つて、おちやは純一の顔をじつと見ている。この女は目で笑うことの出来る女であつた。瞳に緑いろの反射のある目で。

おちやはしなやかな上半身を前に屈めて、一歩進んだ。薄赤い女の顔が余り近くなつたので、純一はまぶしいように思つた。

「こん度はお一人でいらつしやいな」小さい名刺入の中から名刺を一枚出して純一に渡すのである。

純一は名刺を受け取つたが、なんとも云うことが出来なかつた。それは何事をも考える余裕がなかつたからである。

純一がまだ surprise 《シユルプライズ》の状態から回復しないうちに、おちやは身を翻して廊下を梯の方へ、足早に去つてしまつた。

純一は手に持っていた名刺を見ずに袂に入れて、ぼんやり梯の下まで来て、あたりを見廻した。

帽がいろや外套すきまを隙間もなく載せてある棚の下に、男が四五人火鉢を囲んで蹲しゃがんでいる外には誰もいない。純一は不安らしい目をして梯を見上げたが、丁度誰も降りては来なかった。この隙ひまにと思つて、棚の方へ歩み寄つた。

「何番様で」一人の男が火鉢を離れて起つた。

純一は合札を出して、帽と外套とを受け取つて、寒い玄関に出た。

十八

純一は亀清の歸りに、両国橋の袂に立つて、浜町の河岸を廻つて来る電車を待ち受けて乗つた。歳の暮が近くなつていて、人の往来ゆきぎも頻ひんぱん繁な為めであらう。その車には満員の赤札が下がつていたが、停車場ばで二三人降りた人があつたので、とにかく乗ることだけは乗られた。

車の背後の窓の外に、横に打ち附けてある真しんちゆう鍬くわの金物に掴まって立っていると、車掌が中へ這はい入れと云う。這入ろうと思つて片足高い処に踏み掛けたが、丁度出入口の処はに絆は纏んてんを着た若い男が腕組をして立っていて、屹きつぜん然として動かない。純一は又足を引つ

込めて、そのまま外にいたが、車掌も強いて這入れとは云わなかった。

そのうち車が急に曲がった。純一は始て気が附いて見れば、浅草へ行く車であった。宴会の席で受けた色々の感動が頭の中で chaos 《カオス》 を形づくっているのです、何処へ行く車か見て乗るという注意が、覚えず忘れられたのである。

帰りの切符を出して、上野広小路への乗換を貰った。そして車掌に教えられて、うまやば 廐橋しの通りで乗り換えた。

こん度の本所ほんじよから来た車は、少し透いていたので、純一は吊革つりがわに掴まる事が出来た。人道を歩いている人の腰から下を見ている純一が頭の中には、おちやらが頸筋くびすじを長く延べて据わった姿や、腰から下の長襦袢を見せて立った形がちらちら浮んだり消えたりして、とうとう便所の前での出来事が思い出されたとき、想像がそこに踏み止まって動かない。この時の言語と動作とは、一々精くわしく心の中に繰り返されて、その間は人道をどんな人が通るといふことも分からなくなる。

こういう動機であんな事をしたのだろうという問題は、この時早くも頭を擡もたげた。随分官能は若い血の循環と共に急劇な動揺をもするが、思慮は自分で自分を怪しむ程冷やかである。或時瀬戸が「君は老人のような理窟りくつを考えるね」と云ったのも道理である。色でし

たか、慾でしたか、それとも色と慾との二道^{ふたみち}掛けてしたかと、新聞紙の三面の心理のよ
うな事が考えられる。そして慾でするなら、書生風の自分を相手にせずとも、もつと人^{にんせ}
選^{せん}の為^{ため}様^{よう}がありそうなものだと、謙讓らしい反省をする、その裏面には〔vanite〕《ヴ
アニテエ》が動き出して来るのである。しかし恋愛はしない。恋愛というものをいつか
はしようと、負債のように思っているながら、恋愛はしない。思慮の冷かなのも、そのせい
だろうかなどと考えて見る。

広小路で電車を下りたときは、少し風が立つて、まだ明りをかつかつと点^{とも}している店々
の前に、新年の設けに立て並べある竹の葉^{そよ}が戦^{たたか}いでいた。純一は外套の襟を起して、頸^{すく}
を竦^{すく}めて、薩摩下駄をかんかんと踏み鳴らして歩き出した。

谷中の家の東向きの小部屋にある、火鉢が恋しくなつた処を、車夫に勧められて、とう
とう車に乗った。車の上では稍々^{やや}強く顔に当る風も、まだ酔^{えい}が残っているので、却^{かえつ}て快
い。東照宮の大鳥居の側^{そば}を横^{よこ}ぎる、いつもの道を、動物園の方へ抜けるとき、薄暗い杉木立
の下で、ふと自分は今何をしているかと思つた。それからこのまま何事をも成さずに、あ
の聖堂^{たぬき}の狸^{たぬき}の話をしたお爺いさんのようになってしまひはすまいかと思つたが、馬鹿らし
くなつて、直ぐに自分で打消した。

天王寺の前から曲れば、この三崎^{さんさききたまち}北町あたりもまだ店が締めずにある。公園一つの中に隔てて、都鄙^{とひ}それぞれの歳暮^{さいぼ}の賑い^{にぎわ}が見える。

我家の門で車を返して、部屋に這入った。袂^{ろう}から蠟マツチを出して、ランプを附けて見れば、婆あさんが気を附けてくれたものと見えて、丁寧^{ていねい}に床が取つてあるばかりではない、火鉢に掛けてある湯沸かしには湯が沸いている。それを卸して見れば、生けてある佐倉炭が真赤におこっている。純一はそれを掻き起して、炭を沢山くべた。

綺麗^{きれい}に片附けた机の上には、読みさして置いて出たマアテルリンクの青い鳥が一冊ある。その上に葉書が一枚乗っている。ふと明日箱根へ立つ人の便りかと思つて、手に取る時何がなしに動悸^{どうき}がしたがそうでは無かつた。差出人は大村であつた。「明日参上いたすべく候^{そうろう}に付、外^{ほか}に御用事なくば、御待下されたく候。尤も^{もつと}当方も用事にては無^{これなく}之候」としてある。これだけの文章にも、どこやら大村らしい処があると感じた純一は、独り微笑^{ほほえ}んで葉書を机の下にある、針金で編んだ書類入れに入れた。これは純一が神保町の停留場^ばの傍^{わき}で、ふい^{ふい}と見附けて買ったのである。

それから純一は、床の間の隅に置いてある小蓋^{こふた}を引き出して、袂^{ろう}から金入れやら時計やらを、無造作に攫^{つか}み出して、投げ入れた。その中に小さい名刺が一枚交つていた。貰った

ままで、好くも見ずに袂に入れた名刺である。一寸拾つて見れば、「栄屋おちやら」と厭な手で書いたのが、石版摺にしてある。

厭な手だと思ふと同時に、純一はいかに人のおもちやになる職業の女だとは云つても、厭な名を附けたものだと思つた。文字に書いたのを見たので、そう思つたのである。名刺という形見を手にとっていながら、おちやらの表情や声音が余りはつきり純一の心に浮んでは来ない。着物の色どりとか着こなしたかの外には、どうした、こう云つたという、粗大な事実の記憶ばかりが残つていたのである。

しかしこの名刺は純一の為めに、引き裂いて棄てたり、反古籠に入れたりする程、無意義な物ではなかつた。少くも即時にそうする程、無意義な物ではなかつた。そんなら一人で行つて、おちやらと呼んで見ようと思うかと云うに、そういう問題は少くも目前の問題としては生じていない。只棄ててしまふには忍びなかつた。一体名刺に何の意義があるだろう。純一はそれをはつきりとは考へなかつた。或は彼が自ら愛する心に一縷の encens 《アンサン》を焚いて遣つた女の記念ではなかつただろうか。純一はそれをはつきりとは考へなかつた。

純一は名刺を青い鳥のペエジの間に挟んだ。そして着物も着換ええずに、床の中に潜り込

んだ。

十九

翌朝純一は十分に眠った健康な体の好い心持で目を醒ました。只咽に痰が詰まっているようなので、咳^{せきばらい}払^みを二つ三つして見て風を引いたかなと思った。しかしそれは前晩に酒を飲んだ為めであつたと見えて漱^{うが}いをして顔を洗つてしまうと、さっぱりした。

机の前に据わつて、いつの間にか火の入れてある火鉢に手を翳^{かざ}したとき、純一は忽ち何事かを思い出して、「あ、今日だったな」と心の中につぶやいた。丁度学校にいた頃、朝起きて何曜日だということを考えて、それと同時にその日の時間表を思い出したような工合である。

純一が思い出したのは、坂井の奥さんが箱根へ行く日だということであつた。誘われた通りに、跡から行こうと、はつきり考えているのではない。それが何より先きに思い出されたのは、奥さんに軽い程度の suggestion 《サジェスション》を受けているからである。一体夫人の言語や挙動には suggestif 《サジェスシフ》な処があつて、夫人は半ば無意

識にそれを利用して、寧ろ悪用して、人の意志を左右しようとする傾きがある。若し催眠術者になつたら、大いに成功する人かも知れない。

坂井の奥さんが箱根へ行く日だと思つた跡で、純一の写象は暗中の飛躍をして、妙な記憶を喚び起した。それは昨夜夜明け近くなつて見た夢の事である。その夢を見掛けて、ちよいと驚いて目を醒まして、直ぐに又寐てしまつたが、それから余り長く寐たらしくはない。どうしても夜明け近くなつてからである。

なんでも大村と一しよに旅行をしていて、どこかの茶店に休んでいた。大宮で休んだよな、人のいない葭簀張りではない。茶を飲んで、まずい菓子麴包か何か食っている。季節は好く分らないが、目に映ずるものは暖い調子の色に飽いている。薄曇りのしている日の午後である。大村と何か話して笑っていると、外から「海嘯が来ます」と叫んだ女がある。自分が先きに起つて往來に出て見た。

広い畑と畑との間を、真直に長く通っている街道である。左右には溝があつて、その縁には榛の木はんのひよろひよろしたのが列をなしている。女の「あれ、あそこに」という方角を見たが、灰色の空の下に別に灰色の一線が劃せられていようなだけで、それが水だとはつきりは見分けられない。その癖純一の胸には劇しい恐怖が湧く。そこへ出て来た大村

を顧みて、「山の近いのはどっちだろう」と問う。大村は黙っている。どっちを見ても、山らしい山は見えない。只水の来るといふ方角と反対の方角に、余り高くもない丘陵が見える。純一はそれを目掛けて駈け出した。広い広い畑を横に、足に任せて駈けるのである。折々振り返って見るに、大村はやはり元の街道に動かずに立っている。女はいない。夢では人物の経済が自由に行われる。純一は女がいなくなったとも思わないから、なぜいなかと怪しみもしない。

忽ち [scene] 《セエヌ》が改まった。場所の変化も夢では自由である。純一は水が踵かかとに迫つて来るのを感じると共に、傍そばに立っている大きな木に攀よじ登った。何の木か純一には分からないが広い緑色の葉の茂った木である。登り登って、扉のように開いている枝に手が届いた。身をその枝の上に撥はね上げて見ると、同じ枝の上に、自分より先きに避難している人がある。所々に白い反射のある緑の葉に埋うずもれて、長い髪も乱れ、袂も裾も乱れた女がいるのである。

黄いろい水がもう一面に漲みなぎつて来た。その中に、この一本の木が離れ小島のように抜き出でている。滅びた世界に、新あらたに生れて来た Adam 《アダム》と Eva 《エヴァ》とのよう

に梢^{こずえ}を掴む片手に身を支えながら、二人は遠慮なく近寄った。

純一は相触れんとするまでに迫まり近づいた、知らぬ女の顔の、忽ちおちやらになったのを、少しも不思議とは思わない。馴馴しい表情と切れ切れの詞^{ことば}とが交わされるうちに、女はいつか坂井の奥さんになっている。純一が危い体^{あやう}を支えていようとする努力と、僅かに二人の間に存している距離を縮めようと思う慾望とに悩まされているうちに、女の顔はいつかお雪さんになっている。

純一がはつと思つて、半醒覚^{はんせいかく}の状態に復つたのはこの一刹那^{いつせつな}の事であつた。誰^{たれ}やらの書いたものに、人は夢の中ではどんな禽^{きん}獣^{じゆう}のような行いをも敢^{あえ}てして恬然^{てんぜん}としてゐるもので、それは道德という約束の世間にまだ生じていない太古に復る Atavisme 《アタヴィスム》だと云うことがあつた。これは随分思ひ切つた推理である。しかしその是非はとにかく措^おいて、純一はそんな Atavisme 《アタヴィスム》には陥^おらなかった。或は夢が醒め際になつていて、醒めた意識の幾分が働いていたのかも知れない。

半醒覚の純一が体には慾望の火が燃えていた。そして踏み脱いでいた布団を、又領元^{えりもと}まで引き寄せて、腮^{あご}を埋^{うず}めるようにして、又寐入る刹那には、臃^{おぼろ}げな意識の上に、見果てぬ夢の名残を惜む情が漂っていた。しかしそれから、短い深い眠^{ねむり}に入ったらしい。

純一が写象は、人間の思量の無碍むげの速度を以て、ほんの束つかの間に、長い夢を繰り返して見た。そして、それを繰り返して見ている間は、その輪廓りんかくや色彩のはつきりしていて、手で掴まれるように感ぜられるのに打たれて、ふとあんな工合に物が書かれたら好かろうと思った。そう思つて、又繰り返して見ようとすると、もう輪廓は崩れ色彩は褪あせてしまつて、不自然な事やら不合理な事やらが、道の小石に足の躓つまずくように、際立つて感ぜられた。

二十

午前十時頃であつた。初音町の往来へ向いた方の障子に鼠色の雲に濾こされた日の光が、白らけた、殆ど色神しきしんに触れない程な黄いろを帯びて映じている純一が部屋へ、大村莊之助が血色の好いい、爽快な顔付きをして這入つて来た。

「やあ、内にいてくれたね。葉書は出して置いたが、今朝起きて見れば、曇つてはいるけれど、先まず東京の天気としては、不愉快ではない日だから、どこか出掛けはしないかと思つた」

純一は自分の陰気な部屋へ、大村と一しよに一種の活気が這入って来たような心持がした。そして火鉢の向うに胡坐あぐらを掻かいた、がっしりした体格の大村を見て、語気もその晴れしさに釣り込まれて答えた。「なに。丁度好いいと思っていました。どこと云って行くような処もないのですから」

大村の話を聞けば、休暇中一月の十日頃まで、近県旅行でもしようかと思う、それで告別の心持で来たということである。純一は心から友情に感激した。

一つ二つ話をしていううちに、大村が机の上にある青い鳥の脚本に目を附けた。

「何か読んでいるね」と云って、手に取りそうにするので、純一ははつと思つた。中におちやらの名刺の挟みであるのを見られるのが、心苦しいのである。

そこで純一は機先を制するように、本を手にとって、「L'oiseau 《ロアゾオ》 bleu 《ブリヨオ》です」と云いながら、自分で中を開けて、初はじめの方をばらばらと引つ繰り返して、十八ペエジの処を出した。

「ハハ」ですね。A 《ア》 peine 《ペエヌ》 Tytyl 《チルチル》 a-t-il 《アチル》 [tourne'] 《ツウルネエ》 le 《ル》 diamant 《ジァマン》, qu'un 《カン》 changement 《シャンジトマン》 soudain 《スデーン》 et 《エト》 prodigieux 《プロジジオエオ》 stop [e'] re 《ソペエル》

en 《アン》 toutes 《ツウト》 choses 《シヨオズ》. () の処が只のと書きだとは思われな
い程、美しく書いてありますね。僕は国の中学にいた頃、友達にさそわれて、だいぶ学問
のある坊さんの所へちよいちよい行つたことがあります。丁度その坊さんが維摩経の講
釈をしていました。みすばらしい維摩居士の方丈の室が莊嚴世界に変わる処が、こんな工
合ですね。しかし僕はもうずっと先きの方まで読んでいますが、この脚本の全体の帰趣と
いうようなものには、どうも同情が出来ないのです。麵包と水とで生きていて、クリスマ
スが来ても、子供達に櫂の枝に蠟燭を点して遣ることも出来ないような木樵りの棲み家
にも、幸福の青い鳥は籠の内にいる。その青い鳥を余所に求めて、Tytyl 《チルチル》, M
ytyl 《ミチル》のきようだいの子は記念の国、夜の宮殿、未来の国とさまよい歩くのです
ね。そしてその未来の国で、これから先きに生れて来る子供が、何をしているかと思うと、
精巧な器械を工夫している。翼なしに飛ぶ手段を工夫している。あらゆる病を直す薬方を
工夫している。死に打ち克つ法を工夫している。ひどく物質的な事が多いのですね。そん
な事で人間が幸福になられるでしょうか。僕にはなんだか、ひどく矛盾しているように思
われてなりません。十九世紀は自然科学の時代で、物質的の開化を齎した。我々はそれ
に満足することが出来ないで、我々の触角を外界から内界に向け換えたでしょう。それに

未来の子供が、いろんな器械を持って来てくれたり、西瓜すいかのような大きさの林檎りんごを持って来てくれたりしたって、それがどうなるでしょう。おう。それから鼻糞はなぐそをほじくっている子供がいましたつけ。大かた鷗村さんが大糞見の追加を出すだろうと、僕は思ったのです。あの子供が鼻糞をほじくりながら、何を工夫しているかと思うと、太陽が消えてしまった跡で、世界を暖める火を工夫しているというのですね。そんな物は、現在の幸福がなくなつた先きの入れ合せに過ぎないじゃありませんか。そりゃあ、なる程、人のまだ考えたことのない考かんがえを考えている子供だとか、あらゆる不公平を無くしてしまう工夫をしている子供だとか云うのもいました。内生活に立ち入る様な未来もまるで示してないことはないのです。しかし僕にはそれが、唯雑然と並べてあるようで、それを結び附ける鎖が見附からないのです。矛盾が矛盾のままではいるのですね。どう云うものでしょう」

純一は覺えず能弁になつた。そして心の底には始終おちやらの名刺が氣になっている。大村がその本をよこせと云つて、手を出すような事がなければ好いいと、切に祈っているのである。

幸に大村は手を出しそうにもしないで云つた。「そうさね。矛盾が矛盾のままではいるよな所は、その脚本の弱点だろうね。しかし一体哲学者というものは、人間の万有の最終

問題から觀察している。外から覗^{のぞ}いている。ニイチエだって、この間話の出たワイニンゲルだってそうだ。そこで君の謂^いう内界が等閑にせられる。平凡な日常の生活の背後に潜んでいる象徴的意義を体験する、小景を大観するという処が無い。そう云う処のある人は、Simmel 《シムメル》 なんぞのような人を除^のけたらマアテルリンクしかあるまい。だから君が雑然と並べてあると云う、あの未来の国の子供の分担^{しごと}している為事が、悉く解けて流れて、青い鳥の象徴の中に這入ってしまうように書きたかったには違いないが、それがそう行^ゆかなかつたのでしょうか」

純一は大村の詞を聞いているうちに、名刺を発見せられはすまいかと思う心配が次第に薄らいで行つて、それと同時に大村が青い鳥から拈^{ねんしゅつ}出した問題に引き入れられて来た。「ところが、どうも僕にはその日常生活というものが、平凡な前面だけ目に映じて為^{しやう}様がないのです。そんな物はつまらないと思うのです。これがいつかもお話をした利己主義と関係しているのではないでしようか」

「それは大^{おお}に關係していると思うね」

「そうですか。そんならあなたの考えている所を、遠慮なく僕に話して聞かせて貰いたいのですねえ」純一は大きい涼しい目を耀^{かがや}かして、大村の顔を仰ぎ見た。

大村は手に持っていた紙巻の消えたのを、火鉢の灰に挿して語り出した。「そうだね。そんなら無遠慮に大風呂敷を広げるよ」大村は白い歯を露わして、ちよつと笑った。「一体青い鳥の幸福という奴は、煎じ詰めて見れば、内に安心立命を得て、外に十分の勢力を施すというより外有るまいね。昨今はそいつを漢学の道徳で行こうなんという連中があるが、それなら修身齐家治国平天下で、解決は直ぐに附く。そこへ超越的な方面が加わつて来ても、老荘を始として、仏教渡来以後の朱子学やら陽明学というようなものになるに過ぎない。西洋で言つて見ると希臘の倫理が Platon 《プラトン》 あたりから超越的になつて、基督教がその方面を極力開拓した。彼岸に立脚して、馬鹿に神々しくなつてしまつて、此岸がお留守になつた。樵夫の家に飼つてある青い鳥は顧みられなくなつて、余所に青い鳥を求めることになつたのだね。僕の考では、仏教の遁世も基督教の遁世も同じ事になるのだ。さてこれからの思想の発展というものは、僕は西洋にしか無いと思う。Renaissance 《ルネッサンス》 という奴が東洋には無いね。あれが家の内の青い鳥をも見させてくれた。大胆な航海者が現れて、本当の世界の地図が出来る。天文も本当に分かる。科学が開ける。芸術の花が咲く。器械が次第に精巧になつて、世界の総てが仏者の謂う器世界ばかりになつてしまつた。殖産と資本とがあらゆる勢力を吸収してしまつて、今度

は彼岸がお留守になったね。その時ふいと目が醒めて、彼岸を覗いて見ようとしたのが、シヨペンハウエルという変人だ。彼岸を望んで、此岸を顧みて見ると、万有の根本は盲目の意志になってしまふ。それが生を肯定することの出来ない厭世主義だね。そこへニイチエが出て一転語を下した。なる程生というものは苦艱を離れない。しかしそれを避けて逃げるのは卑怯だ。苦艱籠めに生を領略する工夫があるというのだ。What《ホワット》の問題をhow《ハウ》にしたのだね。どうかしてこの生を有のままに領略しなくてはならない。ルソオのように、自然に帰れなどと云つたつて、太古と現在との中間の記憶は有力な事実だから、それを抹殺してしまうことは出来ない。日本で園派の漢学や、契沖、真淵以下の国学を、ルネッサンスだなんと云うが、あれは唯復古で、再生ではない。そんならと云つて、過去の記憶の美しい夢の国に魂を馳せて、Romaniker《ロマンチケル》の青い花にあこがれたつて駄目だ。Tolstoi《トルストイ》がえらくたつて、あれも遁世的だ。所詮觀面に日常生活に打つ附かつて行かなくては行けない。この打つ附かつて行く心持がDionysos《ジオニソス》的だ。そうして行きながら、日常生活に没頭していながら、精神の自由を牢く守つて、一歩も仮借しない処がApollon《アポロン》的だ。どうせこう云う工夫で、生を領略しようとなれば、個人主義には相違ないね。個

人主義は個人主義だが、ここに君の云う利己主義と利他主義との岐路がある。利己主義の側はニイチエの悪い一面が代表している。例の権威を求める意志だ。人を倒して自分が大きくなるという思想だ。人と人とお互にそいつを遣り合えば、無政府主義になる。そんなのを個人主義だとすれば、個人主義の悪いのは論を須^またない。利他的個人主義はそうではない。我という城廓を堅く守つて、一步も仮借しないでいて、人生のあらゆる事物を侵略する。君には忠義を尽す。しかし国民としての我は、昔何もかもごちゃごちゃにしていた時代の所謂^{いわゆる}臣妾^{しんしょう}ではない。親には孝行を尽す。しかし人の子としての我は、昔子売ることも殺すことも出来た時代の奴隸ではない。忠義も孝行も、我の侵略し得た人生の価値に過ぎない。日常の生活一切も、我の侵略して行く^{ゆく}人生の価値である。そんならその我というものを棄てる事が出来るか。犠牲にすることが出来るか。それも慥^{たしか}に出来る。恋愛生活の最大の肯定が情死になるように、忠義生活の最大の肯定が戦死にもなる。生が万有を侵略してしまえば、個人は死ぬる。個人主義が万有主義になる。遁世主義で生を否定して死ぬるのとは違う。どうだろう、君、こう云う議論は」大村は再び齒を露わして笑った。

熱心に聞いていた純一が云った。「なる程そんなものでしょうかね。僕も跡で好く考え

て見なくては分からないのですが、そんな工合に連絡を附けて見れば、切れ切れになつて
いる近世の思想に、綜合点が出来て来るように思われますね。こないだなんとか云う博士^{はくし}
の説だと云うので、こんな事が書いてありましたっけ。個人主義は西洋の思想で、個人主
義では自己を犠牲にすることは出来ない。東洋では個人主義が家族主義になり、家族主義
が国家主義になつてゐる。そこで始めて君父の為に身を棄てるということも出来ると云う
のですね。こう云う説では、個人主義と利己主義と同一視してあるのだから、あなたの云
う個人主義とは全く別ですね。それに個人主義から家族主義、それから国家主義と発展し
て来たもので、その発展が西洋に無くつて、日本にあると云うのは可笑^{おか}しいじゃありません
か」

「そりやあ君、無論可笑しいさ。そんな人は個人主義を利己主義や自己中心主義としよ
にしているばかりではなくつて、無政府主義とも一しよにしているのだね。一体太古の人
間が一人一人穴居から這い出して来て、化学の原子のように離れ離れに生活していただろ
うと思うのは、まるで歴史を撥^{はつむ}無した話だ。若しそうなら、人生の始は無政府的だが、そ
んな生活はいつの世にもありやしなかつた。無政府的生活なんと云うものは、今の無政府
主義者の空想にしか無い。人間が最初そんな風に離れ離れに生活していて、それから人工

的に社会を作った、国家を作ったと云う思想は、ルソオの *Contrat* 《コントラ》 *social* 《シアル》あたりの思想で、今になってまだそんな事を信じているものは、先ず無いね。

遠い昔に溯^{さかのぼ}つて見れば見る程、人間は共同生活の束縛を受けていたのだ。それが次第にその羈絆^{きはん}を脱して、自由を得て、個人主義になって来たのだ。お互に文学を遣っているのだが、文学の沿革を見たつて知れるじゃないか。運命劇や境遇劇が性格劇になったと云うのは、劇が發展して個人主義になったのだ。今になって個人主義を退治しようとするのは、目を醒まして起きようとする子供を、無理に布団の中へ押し込んで押さえていようとするものだ。そんな事が出来るものかね」

これまでになく打ち明けて、盛んな議論をしているが、話の調子には激昂^{げきこう}の迹^{あと}は見えない。大村はやはりいつもの落ち着いた語気で話している。それを純一は唯「そうですね」「全くですね」と云つて、聞いているばかりである。

「一体妙な話さ」と、大村が語り続けた。「ロシアと戦争をしてからは、西洋の学者が一般に、日本人の命を惜まないことを知つて、一種の説明をしている。日本なんぞでは、家族とか国家とか云う思想は發展してないから、そういう思想の為に犠牲になるのではない。日本人は異人種の鈍い憎惡^{せうい}の為に、生命^{せいめい}の貴さ^さを覺^{さと}らない処から、廉価な戦死

をするのだと云っている。誰^{たれ}の書物をでも見るが好い。殆ど皆そんな風に観察している。こつちでは又西洋人が太古のままの個人主義でいて、家族も国家も知らないために、片っ端から無政府主義になるように云っている。こんな風にお互に [méconnaissance] 《メコンネツサンス》の交換をしているうちに、ドイツとアメリカは交換大学教授の制度を次第に^{こうちよう}拡張する。白耳義^{ベルギイ}には国際大学が程なく立つ。妙な話じゃないか」と云つて、大村は黙つてしまった。

純一も黙つて考え込んだ。しかしそれと同時に尊敬している大村との隔てが、遽^{にわ}かに無くなつたような気がしたので、純一は嬉しさに覚え^{ほほえ}ず微笑んだ。

「何を笑うんだい」と、大村が云つた。

「きようは話がはずんで、愉快ですね」

「そうさ。一々の詞を^{はかり}秤の皿に載せるような事をせずに、なんでも言いたい事を言うのは、我々青年の特権だね」

「なぜ人間は年を取るに従つて偽善に陥つてしまふでしょう」

「そうさね。偽善というのは酷かも知れないが、甲らが硬くなるには違いないね。永遠なる生命が無いと共に、永遠なる若さも無いのだね」

純一は暫く考えて云った。「それでもどうにかして幾分かその甲らの硬くなるのを防ぐことは出来ないでしょうか」

「甲らばかりでは無い。全身の弾力を保存しようという問題になるね。巴里^{パリイ}の Institut

《アンスチチュウ》 Pasteur 《パストヨオル》 に Metschnikoff 《メチュニコッフ》 というロシア人がいる。その男は人間の体を取るに従って段々石灰化してしまうのを防ぐ工夫をしているのだがね。不老不死の問題が今の世に再現するには、まあ、あんな形式で再現する外ないだろうね」

「そうですか。そんな人がありますかね。僕は死ぬまいなんぞとは思わないのですが、どうか石灰化せずにいたいものですね」

「君、メチュニコッフ自身もそう云っているのだよ。死なないわけには行^いかない。死ぬるまで弾力を保存したいと云うのだね」

二人共余り遠い先の事を考えたような気がしたので、言い合せたように同時に微笑んだ。二人はまだ老^{おい}だの死だのいうことを、際限も無く遠いもののように思っている。一人の生涯というものを測る尺度を、まだ具体的に手に取って見たことが無いのである。

忽ち襖^{ふすま}の外でことごと音をさせるのが聞えた。植長の婆あさんが気を利かせて、二人の

午飯^{ひるめし}を用意して、持ち運んでいたのである。

二十一

食事をしまつて茶を飲みながら、隔ての無い青年同士が、友情の楽しさを緘黙^{かんもく}の中に味わっていた。何か言わなくてはならないと思つて、言いたくない事を言う位は、所謂附合いの人の心を縛る縄としては、最も緩いものである。その縄にも縛られずに平気で黙りたい間黙っていることは、或る年齢を過ぎては容易に出来なくなる。大村と純一とはまだそれが出来た。

純一が炭斗^{すみとり}を引き寄せて炭をついでいる間に、大村は便所に立つた。その跡で純一の目は、急に青い鳥の脚本の上に注がれた。Chapentier 《シャルパンチエエ》 et 《エエ》 Fa squelle 《フアスケル》 版の仮綴^{かりとじ}の青表紙である。忙^せわしい手は、紙切小刀で切った、ざら附いた、出入りのあるペエジを翻した。そして捜し出された小さい名刺は、引き裂かれるところであつたが、堅^{けんじん}靱なる紙が抗抵したので、揉^もみくちやにせられて袂^{たもと}に入れられた。

純一は証拠を湮滅^{いんめつ}させた犯罪者の感じる満足のような満足を感じた。

便所から出て来た大村は、「もうそろそろお暇^{いとま}をしようか」と云って、中腰になって火鉢に手を翳^{かざ}した。

「旅行の準備でもあるのですか」

「何があるものか」

「そんなら、まあ、好^いいじゃありませんか」

「君も寂^{さび}しがる性^{たち}だね」と云って、大村は胡座^{あぐら}を搔いて、又紙巻を吸い附けた。「寂^{さび}しがらない奴は、神経の鈍い奴か、そうでなければ、神経をぼかして世を渡っている奴だ。酒。骨牌^{かるた}。女。Haschisch《ハッシッシェ》」

二人は顔を見合せて笑った。

それから官能的受用で精神をぼかしているなんということは、精神的自殺だが、神経の異様に興奮したり、異様に抑圧せられたりして、体をどうしたら好^いいか分らないようなこともある。そう云う時はどうしたら好^いいだろうと、純一が問うた。大村の説では、一番健全なのはスエエデン式の体操か何かだろうが、演習の仮設敵のように、向うに的を立てなくては、倦^うみ易い。的を立てるとなると、sport《スポーツ》になる。sport《スポーツ》

になると、直接にもせよ間接にもせよ競争が生ずる。勝負が生ずる。畢ひつきよう 竟 倦 まない

と云うのは、勝とう勝とうと思う励みのあることを言うのであろう。ところが個人毎に幾らかずつの相違はあるとしても、芸術家には先ずこの争う心が少い。自分の遣やっている芸術の上でからが、縦たてえ形式の所謂競争には加わっていても、製作をする時はそれを忘れている位である。Paul 《パウル》 Heyse 《ハイゼ》の短編小説に、競争仲間の彫像を夜忍び込んで打ち壊すことが書いてあるが、あれは性格の上の憎悪を土台にして、その上に恋の遺恨をさえ含ませてある。要するに芸術家らしい芸術家は、恐らくは sport 《スポーツ》に熱中することがむずかしからうと云うのである。

純一は思い当る所があるらしく、こう云った。「僕は芸術家がる訳ではないのですが、どうも勝負事には熱心になれませんね」

「もう今に歌がるたの季節になるが、それでは駄目だね」

「全く駄目です。僕はいつも甘んじて読み役に廻されるのです」と、純一は笑いながら云った。

「そうさね。同じ詞で始まる歌が、百首のうちに幾つあるということを諳そらんじてしまつて、初五文字しよごもじを読んでしまわないうちに、どれでも好いように、二三枚のかるたを押えてしま

うことが出来なくては、上手下手の評に上ることが出来ない。もうあんな風になつてしまえば、歌のせんは無い。子供のするいろはがるたも同じ事だ。もつと極端に云えばAの札Bの札というようなものを二三枚ずつ蒔いて置いて、Aと読んだ時、蒔いてあるAの札を残らず撈つてしまえば好いわけになる。若し歌がるたに価値があるとすれば、それは百首の歌を諳んじただけで、同じ詞で始まる歌が幾つあるかなんと云う、器械的な穿鑿をしない間の楽みに限られているだろう。僕なんでもそんな事で記憶に負担をさせるよりは、何かもつと気の利いた事を覚えたいね」

「一体あんな事を遣ると、なんにも分からない、音の清濁も知らず、詞の意味も知らないで読んだり取ったりしている、本当の routiniers 《ルチニエ》に愚弄せられるのが厭です」

「それでは君にはまだ幾分の争気がある」

「若いのでしょうか」

「どうだかねえ」

二人は又顔を見合せて笑つた。

純一の笑う顔を見る度に、なんと云う可哀い目附きをする男だろうと、大村は思う。そ

れと同時に、この時ふと同性の愛ということが頭に浮んだ。人の心には底の知れない暗黒の堺がある。不断一段自分より上のものにばかり交るのを喜んでいる自分が、ふいとの青年に逢つてから、余所の交を疎んじて、ここへばかり来る。不断講釈めいた談話を尤も嫌つて、そう云う談話の聞き手を求めることは屑としない自分が、この青年の為めには饒舌して忌むことを知らない。自分は homosexual 《オモセクシユエル》 ではない積りだが、尋常の人間にも、心のどこかにそんな萌芽が潜んでいるのではあるまいかというところが、一寸頭に浮んだ。

暫くして大村は突然立ち上がった。「ああ。もう行こう。君はこれから何をするのだ」「なんにも当てがないのです。とにかくそこいらまで送つて行きましょう」

午後二時にはまだなっていないかった。大学の制服を着ている大村と一しよに、純一は初音町の下宿を出て、団子坂の通へ曲つた。

門ごとに立てた竹に松の枝を結び添えて、横に一筋の注連縄が引いてある。酒屋や青物屋の賑やかな店に交つて、商売柄でか、綺麗に障子を張った表具屋の、ひっそりした家もある。どれを見ても、年の改まる用意に、幾らかの潤飾を加えて、店に立ち働いている人さえ、常に無い活気を帯びている。

この町の北側に、間口の狭い古道具屋が一軒ある。谷中は寺の多い処だからでもあろうか、朱漆しゅううるしの所々に残っている木魚もくぎよや、胡粉ごこんの剥はげた木像が、古金ふるかねと数かずの揃そろわない茶碗小皿との間に並べてある。天井からは鰐わに口ぐちや磬けいが枯れた釣つり葱しと一しよに下がっている。

純一はいつも通る度に、ちよいとこの店を覗いて過ぎる。掘り出し物をしようとして、骨董店こつどうてんの前に足を留める、老人の心持と違うことは云うまでもない。純一の覗くのは、或る一種の好奇心である。国の土蔵の一つに、がらくた道具はばかり這入はいっているのがある。何に使ったものか、見慣れない器、闕かけ損じて何の片割れとも知れない金屑かなくずや木の切れがある。純一は小さい時、終日その中に這入って、何を捜すとなしにそのがらくたを掻き交ぜていたことがある。亡くなった母が食事の時、純一がいけないというので、捜してその蔵まで来て、驚きの目を睜みはつたことを覚えている。

この古道具屋を覗くのは、あの時の心持の名残である。一種の探検である。錆びた鉄瓶、焼き接ぎの痕あとのある皿なんぞが、それぞれの生涯の *ruine* 《ルユイヌ》を語る。きょう通って見ても、周囲の影響を受けずにいるのは、この店のみである。

純一が古道具屋を覗くのを見て、大村が云った。「君はいろんな物に興味を有している

と見えるね」

「そうじゃないのです。あんまり妙な物が並んでいるので、見て通るのが癖になってしまいました」

「頭の中がああの店のようになっている人もあるね」

二人はたわいもない事を言つて、山岡鉄舟の建てた全生庵ぜんしやうあんの鐘楼しやうろうの前を下りて行く。

この時下から上がつて来る女学生が一人、大村に会釈をした。俯向うつむけて歩いていて、廂ひさしの乱れ髪を、一寸横に傾けて、稲妻のように早い、鋭い一瞥いちべつの下に、二人の容貌、態度、性格をまで見たかと思われる位であつた。

大村は角帽を脱いで答礼をした。

純一は只女学生だなどと思つた。手に持つている、中身は書物らしい紫の包みの外には、喉のどの下と手首とを、リボンで括くくつたシャツや、袴はかまの莖すみれいろ色いろが目に留まつたに過ぎない。

實際女学生は余り人と変つた風はしていなかつた。着物は新大島、羽織はそれより少し粗い飛白かすりである。袴の下に巻いていた、藤紫地に赤や萌葱もえぎで模様もようの出してある、友禅縮ゆうぜんちりめ緬めんの袴下の帯は、純一には見えなかつた。シャツの上に襲かさねた襦袢じゆばんの白衿しろえりには、だ

いぶ膩あぶらあか垢かが附ついていたが、こう云う反対の方面も、純一には見えなかった。

しかし純一の目に強い印象を与えたのは、琥珀こはくいろ色の薄皮の底に、表情筋が透いて見えるようなこの女の顔と、いかにも鋭敏らしい目まなざしとであった。

どう云う筋の近附きだろうかと、純一が心の中に思うちより先きに、大村が「妙な人につた」と、独ひとりごと言ことのようにつぶやいた。そして二人殆ど同時に振り返って見た時には、女はもう十歩ばかりも遠ざかつていた。

それから坂を降りて又登る途みちすがら、大村が問わず語りにこんな話を話した。

大村が始めてこの女に逢ったのは、去年雑誌女学界の懇親会に往った時であった。なんとか云う若いピアノストが六段をピアノで弾くのを聞いて、退屈しているところへ、遅れて来た女学生が一人あつて、椅子が無いのでまごまごしていた。そこで自分の椅子を譲つて遣つて、傍そばに立つているうちに、その時もやはり本を包んで持っていた風炉敷ふうしきの角の引ひつ繰り返つた処に、三枝さいぐさと書いてあるのが目に附いた。その頃大村は女学界の主筆に頼まれて、短歌を選んで遣つていたが、際立つて大胆な熱情の歌を度々採つたことがある。その作者の名が三枝茂子であつた。三枝うじという氏は余り沢山はなさそうなので、ふいと聞いて見る氣になつて、「茂子さんですか」と云うと、殆ど同時に女が「大村先生でいらつ

しやいましょう」と云った。それから会話がはずんで、種々な事を聞くうちに、大村が外国語をしているかと問うと、独逸語ドイツだと云う。独逸語を遣っている女というものには、大村はこの時始て出逢ったのである。

懇親会の翌日、大村の所へ茂子の葉書が来た。又暫く立つと、或る日茂子が突然大村の下宿へ尋ねて来た。Sudermann 《ズウェルマン》の Zwilicht 《ズヴィイリヒト》を持って、分からない所を質問しに来たのである。さ程見当違いの質問ではなかった。しかし問わない所が皆分かつているか、どうだかと云うことを、ためして見るだけの意地わるは大村には出来なかった。

その次の度には、Nicht 《ニヒト》 doch 《ドホ》と云う、Tavole 《タヴオオテ》の短篇集を持って来た。先ず「ニヒト・ドホはなんと訳しましたら宜よろしいのでしょうか」と問われたには、大村は少からず辟易へきえきしたと云うのである。これを話す時、大村は純一に、この独逸特有の語ことばを説明した。フランスの point 《ポアン》 du 《ドゥ》 tout 《ツウ》や、[ne ni-i-da] ニイダアに稍似ややていて、どこやら符合しない語ことばなのである。極めて平易に書いた、極めて浅薄な、廉価なる喝采かつさいを俗人の読者に求めているらしい。タヴオオテの、あの巻頭の短篇を読んで見れば、多少隔靴の憾うらみはあるとしても、前後の文意で、ニヒト・ドホがまる

で分からない筈は無い。それが分かっているとすれば、この語の説明に必然伴つて来る具體的の例が、どんなものだということも分かっているとはならない。實際少しでも独逸が読めるとすれば、その位な事は分かっている筈である。それが分かっている、なんの下心もなく、こんな質問をすることが出来る程、茂子さんはinnocent《アンノサント》なのだろうか。それでは、篁村翁にでも言わせれば、余りに「紫の矢^{やがすり} 緋^は過ぎている」それであの人のいつも作るような、殆ど暴露的な歌が作られようか。今の十六の娘にそんなのがあるか。それともと考え掛けて、大村はそれから先きを考えることを憚^{はば}つたと言うのである。

茂子さんはそれきり来なくなつた。大村が云うには、二人は素^もと交互の好奇心から接近して見たのであるが、先方でもこつちでも、求むる所のものを得なかつた。そこで恩もなく怨みもなく別れてしまった。勿論^{もちろん}先方が近づいて来るにも遠ざかつて行く^ゆにも、主動的にはなつていたが、こつちにも好奇心はあつたから、あらわに動かなかつた中に、迎合し誘導した責は免れないと、大村は笑いながら云つた。

大村がこう云つて、詞を切つたとき、二人は往来から引つ込めて立てた門のある、世尊院の前を歩いていた。寒そうな振^{ふり}もせず、一群の子供が、門前の空地で、鬼ごっこをし

ている。

「一体どんな性質の女ですか」と、突然純一が問うた。

「そうさね。歌を見ると、情に任せて動いているようで、逢つて見ると、なかなか駈引のある女だ」

「妙ですね。どんな内の娘ですか」

「僕が問いもせず、向うが話しもしなかったのだが、後^{のち}になって外^{ほか}から聞けば、母親は京橋辺に住まって、吉田流の按摩^{あんま}の看板を出していると云うことだった」

「なんだか少し気味が悪いようじゃありませんか」

「さあ。僕もそれを聞いたときは、不思議なようにも思い、又君の云う通り、気味の悪いようにも思ったね。それからそう思つてあの女の挙動を、記憶の中から喚び起して見ると、年は十六でも、もうあの時に或る過去を有していたらしいのだね。やはりその身元の話をした男が云つたのだが、茂子さんは初め女医になるのだと云つて、日本医学校に這入つて、男生ばかりの間に交つて、随意科の独逸語を習っていたそうだ。その後^{のち}何度学校を換えたか知れない。女子の学校では、英語と仏語の外は教えていないからでもあろうが、医学を罷^やめたと云つてからも、男ばかりの私立学校を数えて廻っている。或る官立学校で独逸語

を教えている教師の下宿に毎日通つて、その教師と一しよに歩いていたのを見られたこともある。妙な女だと、その男も云つていた。とにかく「[problematique]」《プロブレマチック》な所のある女だね」

二人は肴町さかなまちの通りへ曲つた。石屋の置場のある辺を通る時、大村が自分の下宿へ寄れと云つて勧めたが、出発の用意は無いと云つても、手紙を二三本は是非書かなくてはならないと云うのを聞いて、純一は遠慮深くことわつて、葬儀屋の角で袂を別つた。

「Au 《オオ》 revoir 《ルヴオアル》」の「いっせい」声を残して、狭い横町を大股おおまたに歩み去る大村を、純一は暫く見送つて、夕の薄衣ゆうべ うすぎぬに次第に包まれて行く街を、追分の方へ出た。点燈会社の人足が、踏台を片手に提げて駄足で摩すれ違つた。

二十二

箱根湯本の柏屋という温泉宿の小座舗こざしきに、純一が独り顔を蹙しかめて据わっている。

きょうは十二月三十一日なので、取引やら新年の設けやらのために、家のものは立ち騒いでいるが、客が少いから、純一のいる部屋へは、余り物音も聞えない。只早川の水の音

がこうこうと鳴っているばかりである。伊藤公の書いた七絶しちぜつの半折はんせつを掛けた床の間の前に、革包かばんが開けてあつて、その傍そばに仮綴かづいのInoctavo《アノクタヴォ》版の洋書が二三冊、それから大版の横文雑誌おうぶんが一冊出して開いてある。縦にベエジを二つに割つて印刷して、挿画さしえがしてある。これはL'Illustration《リルリュストレーション》[The A'trale]《テ아트ラルアル》の来たのを、東京を立つ時、そのまま革包に入れて出たのである。

ゆうべ東京を立つて、今箱根に着いた。その足で浴室に行つて、綺麗な湯を快く浴びては来たが、この旅行を敢あえてした自分に対して、純一は頗すこぶる不満足な感じを懷いだいている。それが知らず識しらず顔色にあらわれているのである。

*

*

*

大村は近県旅行に立つてしまう。外に友達は無。大都會の年の暮に、純一が寂しさに襲襲われたのも、無理は無いと云えば、それまでの事である。しかし純一はこれまで二日や三日人に物を言わずにいたつて、本さえ読んでいれば、寂しいなんと云うことを思つたことはなかつたのである。

寂しき。純一を駆つて箱根に來させたのは、果して寂しきであろうか。Solitude《ソリチュウド》であろうか。そうではない。氣の毒ながらそうではない。ニイチエの詞ことば遣つか

で言え、純一は *einsam* 《アインザム》なることを恐れたのではなくて、*zweism* 《ツヴァイザム》ならんことを願ったのである。

それも恋愛ゆえだと云うことが出来るなら、弁護にもなるだろう。純一は坂井夫人を愛しているのではない。純一を左右したものはなんと、追窮して見れば、つまり動物的の策励だと云わなくてはなるまい。これはどうしたって庇護ひごをも文飾をも加える余地が無さそう。

東京を立つた三十日の朝、純一はなんとなく気が鬱ふさしてならないのを、曇った天氣の所せ為いに歸しておつた。本を読んで見ても、どうも興味を感じない。午後から空が晴れて、障子に日が差して来たので、純一は気分が直るかと思つたが、予期とは反対に、心の底に潜んでいた不安の塊りが意識に上ぼつて、それが急劇に増長して来て、反理性的の意志の叫さびけ声こゑになつて聞え始めた。その「箱根へ、箱根へ」と云う叫声に、純一は策むちうたれて起つたに相違ない。

純一は夕方になつて、急に支度をし始めた。そこらにある物を掻かき集めて、国から持つて出た革包に入れようとしたが、余り大きくて不便なように思われたので、風炉敷に包んだ。それから東京に出る時買つて来た、駱駝らくだの膝掛ひざかけを出した。そして植長の婆あさんに、

年礼に廻るのがうるさいから、箱根で新年をするのだと云って、車を雇わせた。実は東京にいたって、年礼に行かなくてはならない家は一軒も無いのである。

余り出し抜けなので、驚いて目を睜^{みは}つている婆あさんに送られて、純一は車に乗って新橋へ急がせた。年の暮で、夜も賑やかな銀座を通る時、ふと風炉敷包みの不体裁なのに気が附いて軈^{ともえや}屋に寄って小さい革包を買って、包をそのまま革包に押し込んだ。

新橋で発車時間を調べて見ると、もう七時五十分発の列車が出た跡で、次は九時発の急行である。国府津^{こうづ}に着くのは十時五十三分の筈であるから、どうしても、適当な時刻に箱根まで漕^こぎ着けるわけには行^いかない。儘^{まま}よ。行き^ゆ当りばったりだと、純一は思つて、いよいよ九時発の列車に乗ることに極^きめた。そして革包と膝掛とを駅夫に預けて、切符を買うことも頼んで置いて、二階の壺屋の出店に上がって行つた。まだ東洋軒には代つていなかったのである。

Buffer 《ブツツフェエ》の前を通り抜けて、取り附きの室に這入つて見れば、丁度夕食の時間が過ぎていたので、一^{ひと}間は空虚である。壁に塗り込んだ、古風な煖炉に骸^コ炭^{オクス}の火がきたない灰を被^{かぶ}つていて、只電燈だけが景気好く附いている。純一は帽とインバネスとを壁の鉤^{かぎ}に掛けて、ビュツフェエと壁一重を隔てている所に腰を掛けた。そして二^{ふた}品^{しな}ぽ

かりの料理を誂あつらえて、申しわけに持つて来させたビールを、舐なめるようにちびちび飲んでいた。

初音町の家を出るまで、苛いらだ立つようであつた純一の心が、いよいよこれで汽車にさえ乗れば、箱根に行かれるのだと思うと同時に、差していた汐しおの引くように、ずうと静まつて来た。そしてこんな事を思つた。平生自分は瀬戸なんぞの人柄の陋いしいのを見て、何事につけても、彼と我との間には大した懸隔があると思つていた。就な中性欲かんずくに関する動作は、若し刹那せつなに動いて、偶然提供せられた受用を容ゆるすか斥しりぞけるかと云うだけが、問題になつてゐるのなら、それは恕じよすべきである。最初から計画して、汗けれた行いをするとなると、余りに卑劣である。瀬戸なんぞは、悪所へ行く積りで家を出る。そんな事は自分は敢てしないと思つていた。それに今わざわざ箱根へ行くゆ。これではいよいよ墮落して、瀬戸なんぞと同じようになるのではあるまいかとも思われる。この考えは、純一の為めに、頗る

[fiere'] 《フィエルテエ》を損ずるもののように感ぜられたのである。そこで純一の意識は無理な弁護を試みた。それは箱根へ行つたつて、必ず坂井夫人との關係を継続するとは極まつていない。向うへ行つた上で、まだどうでもなる。去就の自由はまだ保留せられてゐると云うのであつた。

こんな事を思っているうちに、給仕が ハム エッグス ham-eggs か何か持って来たので、純一はそれを食っていると、一人の女が這入って来た。薄給の家庭教師でもあろうかと思われる、痩せた、醜い女である。竿のように真つ直な体附きをして、引き詰めた束髪の下に、細長い頸を露わしている。持つて来た 蝙蝠傘を椅子に倚せ掛けて腰を掛けたのが丁度純一のいる所と対角線で結び附けられている隅の卓で、純一にはその幅の狭い背中が見える。咖啡に [cre'me] 《クレエム》を逃えたが、クレエムが来たかと思うと、直ぐに代りを言い付けて、ペロりと舐めてしまう。又代りを言い付ける。見る間に四皿舐めた。どうしても生涯に一度クレエムを食いたい程食べて見たいと思っていたとしか思われない。純一はなんとなく無気味のように感じて、食べているものの味が無くなった。謂わば口オマ人の想像していたような *lemures* 《レムレス》の一人が、群を離れて這入って来たように感じたのである。これには仏教の方の餓鬼という想像も手伝っていたかも知れない。とにかく迷信の無い純一がどうした事かこの女を見て、旅行が不幸に終る前兆のように感じたのである。

急行の出る九時が段段近づいて来ると共に、客がぽつぽつこの間に這入って来て、中には老人や子供の交った大勢の組もあるので、純一の写象はやつと陰気でなくなった。どこ

かの学校の制服を着た、十五六の少年が煖炉の火を掻き起して、「皆ここへお出で」と云つて、弟や妹を呼んでいる。誰かが食事を誂える。誰かが誂えたものが来ないと云つて、小言を言う。

喧騒けんそうの中に時間に来て、誰彼たれかれとなくぼつぼつ席を立ち始めた。クレエムを食った

emme 《ファム》 ominense 《オミニヨオズ》もこの時棒立ちに立つて、蝙蝠傘を体に添えるようにして持つて、出て行く。純一の所へは、駄夫が切符を持つて催促に来た。

ブラットフォオムはだいぶ難ざつとう していたが、純一の乗った二等室は、駄夫の世話にならずに、跡から這入つて来た客さえ、坐席に困らない位であった。向側むこうがわに細君を連れて腰を掛けている男が、「却かえつて一等の方が籠こんでいるよ」と、細君に話していた。

汽車が動き出してから、純一は革包を開けて、風炉敷の中を捜して、本を一冊取り出した。青い鳥と同じ体裁の青表紙で、Henry 《アンリイ》 Bernstein 《ベルンスタイン》のLe 《ル》 voleur 《ヴォリヨオル》である。つまらない物と云うことは知っていながら、俗受けのする脚本の、ドラマらしいよりは寧ろ演劇らしい処を、参考に見て置こうと思つて取り寄せて、そのまま読まずに置いたのであった。

象牙ぞうげの紙切り小刀こがたなで、初めの方を少し切つて、表題や人物の書いてある処ひるがえを舐なして、

第一幕の対話を読んでいる。気の利いた、軽い、唯骨折らずに、筋を運ばせて行くだけの対話だと云うことが、直ぐに分かる。退屈もしないが、興味をも感じない。

二三ペエジ読むと、目が懈だるくなつて来た。明りが悪いのに、黄いろを帯びた紙に、小さい活字で印刷してある、ファスケル版の本が、汽車の振動に連れて、目の前でちらちらしているのだから堪たまらない。大村が活動写真は目に毒だと云ったことなどを思い出す。お負まけに隣席の商人らしい風をした男が、無遠慮に横から覗のぞくのも気になる。

読みさした処に、指を一本挟んで閉じた本を、膝の上に載せたまま、純一は暫く向いの窓に目を移している。汽車は品川にちよつと寄つた切りで、ずんずん進行する。闇のうちを、折折どこかの燈とも火しびが、流星のように背後へ走る。忽たちまち稍大きい明りが窓に迫つて来て、車ははためきながら、或る小さい停車場ばを通り抜ける。

純一の想像には、なんの動機もなく、ふいと故郷の事が浮かんだ。お祖母ばあ様の手紙は、定期刊行物のように極まつて来る。書いてある事は、いつも同じである。故郷の「時」は平等に、同じ姿に流れて行く。こちらから御返事をするのは、遅速がある。書く手紙にも、長短がある。しかもそれが遅くなり勝ち、短くなり勝ちである。優しく、親切に書こうとは心掛けているが、いつでも紙に臨んでから、書くことの無いのに当惑する。ぼんやりし

た、捕捉し難い本能のようなものの外には、お祖母あ様と自分とを結び附けている内生活というものが無い。しかしこれは手紙だからで、帰ってお目に掛ったら、お話をする事がないことはあるまいなどと思う。こう思うと、新年には一度帰れと、二度も続けて言つて来ているのに、この汽車を国府津で降りるのが、なんだか済まない事のように、純一は軽い良心の呵責を覚えた。

隣の商人らしい男が新聞を読み出したのに促されて、純一は又脚本を明けて少し読む。

女主人公 Marie 《マリイ》 Louise 《ルイイズ》 の金をほしがる動機として、裁縫屋 Paquin 《パケン》 の勘定の嵩むことなぞが、官能欲を隠したり顕したりする、夫との対話の中に、そつと投げ入れてある。謀計と性欲との二つを緬い交ぜにして、人を倦ませないように筋を運ばせて行くのが、作者の唯一の手柄である。舞台に注ぐ目だけは、倦まないだろうと云うことが想像せられる。しかし読んでいる人の心は、何等の動揺をも受けない。つまりこれでは脚本と云うものの [theatrical] 《テアトラル》 な一面を、純粹に發展させたようなものだと思う。

目がむず癢いようになると、本を閉じて外を見る。汽車の進行する向きが少し變つて、風が烟を横に吹き靡けるものと見えて、窓の外の闇を、火の子が彗星の尾のように背後

へ飛んでいる。目が直ると、又本を読む。この脚本の先が読みたくなるのは、丁度探偵小説が跡を引くのと同じである。金を盗んだマリイ・ルイイズが探偵に見顯あらわされそうになつたとたんに、この女に懸想けんそうしている青年 Fernand 《フェルナン》が罪を自分で引き受ける。憂悶ゆうもんの雲は忽ち無辜むこの青年と、金を盗まれた両親おやとの上に掩おほひ掛かる。それを余所に見て、余りに気輕なマリイ・ルイイズは、閨ねやに入つて夫に戯れ掛かる。陽に拒み、陰に促して、女は自分の寢支度を夫に手伝たづなわせる。半ば呑み半ば吐く對話と共に、女の身の皮たかは笋たかを剥ぐ如くに、一枚々々剥がれる。所詮東京の劇場などで演ぜられる場では無い。女の紙入れが出る。「お前は生涯おれ己の写真を持ち廻るのか」「ええ。生涯持ち廻つてよ」「ちよつと見たいな」「いじつちやあ、いや」「なぜ」「どうしてもいや」「そう云われると見なくなるなあ」「直ぐ返すのなら」「返さなかつたら、どうする」「生涯あなたに物を言わないわ」「ちと覺束おぼつかないな」「わたし迷信があるの。それを見られると」「変だぞ。変だぞ。その熱心に隠すのが怪しい」「開けないで下さいよ」「開ける。間男の写真を拝見しなくては」こんな對話の末、紙入れは開かれる。大金たいきんが出る。蒸暑い恋の詞が、氷のように冷たい嫌疑の詞になる。純一は目の痛むのも忘れて、[Bre'sil] 《ブレジル》へ遣やられる青年を氣の毒がつて、マリイ・ルイイズが白状する処まで、一息に読んでしまつ

た。そして本を革包に投げ込んで、馬鹿にせられたような心持になっていた。

間もなく汽車が国府津に着いた。純一はどこも不案内であるから、余り遅くならないうちに泊つて、あすの朝箱根へ行こうと思つた。革包と膝掛とを自分に持つて、ぶらりと停車場を出て見ると、図抜けて大きい松の向うに、静かな夜の海が横たわっている。

宿屋はまだ皆開いていて、燈火の影に女中の立ち働いているのが見える。手近な一軒につと這入つて、留めてくれと云つた。甲斐々々しい支度をした、小綺麗な女中が、忙しそうに足を留めて、玄関に立ちはたがつて、純一を頭のとつぺんから足の爪尖まで見卸して、「どこも開いておりません、お気の毒様」と云つたきり、くるりと背中を向けて引つ込んでしまつた。

次の宿屋に行く。同じようにことわられる。三軒目も四軒目も同じ事である。インバネスを着て、革包と膝掛とを提げた体裁は、余り立派ではないに違いない。しかし宿屋で氣味を悪がつて留めない程不都合な身なりだと云うでもあるまい。一人旅の客を留めないと云う話が、いっどこで聞いたともなく、ぼんやり記憶には残っているが、そんな事が相応に繁華な土地に、今あろうとは思われない。現に東京では、なんの故障もなく留めてくれたではないか。

不思議だとは思うが、誰に問うて見ようもない。お伽とぎばなし話にある、魔女に姿を変えられた人のような気がしてならないのである。

純一はとうとう巡査の派出所に行つて、宿泊の世話をして貰いたいと云つた。巡査は四十ばかりの、flegmatique 《フレグマチク》な、寢惚ねぼけたような、口数を利かない男で、純一が不平らしく宿屋に拒絶せられた話をするのを聞いても、当り前だとも不当だとも云わない。縁ふちの焦げた火鉢に、股火またびをして当つていたのが、不精らしく椅子を離れて、机の上に置いてあつた角燈を持つて、「そんならこつちへお出でなさい」と云つて、先きに立つた。

巡査が純一を連れて行つて立ち留まつたのは、これまで純一が叩いたような、新築の宿屋と違つて、壁も柱も煤すすで真っ黒に染まつた家の門かどであつた。もう締めてある戸を開けさせて、巡査が何か掛け合つた。話は直ぐに纏まとまつたらしい。中から頭を角刈にして、布子ゆかたの下に湯帷子ゆかたを重ねて着た男が出て来て、純一を迎え入れた。巡査は角燈を光らせて歸つて行つた。

純一は真っ黒な、狭い梯子はしごを踏んで、二階に上ぼつた。上り口のほぐちに手摩りてすが繞めぐらしてある。二階は縁側のない、十五六畳敷の広間である。締め切つてある雨戸ほかの外には、建具が無い。

角刈の男は、行燈あんどんの中に石油ランプを嵌め込んだのを提げて案内して来て、それをご疊の上に置いて、純一の前に膝を衝いた。

「直ぐにお休みなさいますか。何か御用は」

純一は唯とにかく屋根の下には這入られたと思っただけで、何を考える暇もなく、茫然としていたが、その屋根の下に這入られた喜よろこびを感じると共に、報酬的に何か言い付けた方が好かろうと、問われた瞬間に思い付いた。

「何か肴さかながあるなら酒を一本付けて来ておくれ。飯は済んだのだ」

「肴がございます」

「それで好い」

角刈の男は、形ばかりの床の間の傍そばの押入れを開けた。この二階にも床の間だけはあるのである。そして布団と夜着と括くくり枕まくらとを出して、そこへ床を展のべて置いて、降りて行つた。

純一は衝つ立つたままで、暫しばらく床を眺めていた。座布団なんと云う贅沢品ぜいたくひんは、この家では出さないので、帽をそこへ抛なげたまま、まだ据わらずにいたのである。布団は縞が分らない程よごれている。枕に巻いてある白木綿も、油垢あぶらあかで鼠色に染まっている。

純一はおそろるおそろる敷布団の上に据わつて、時計を出して見た。もう殆ど十二時である。なんとも名状し難い不愉快が、若い、弾力に富んでいる心をさえ抑え附けようとする。このきたない家に泊るのが不愉快なのではない。境遇の懷ふとこころ子たる純一ではあるが、優柔な [effemine] 《エツフェミニネ》な人間にはなりたくない、平生心掛けている。折々はいとやうに Sparta 《スパルタ》風の生活をして見ようと思うこともある位である。

しかしそれは自分の意志から出て、進んで困厄に就くのでなくては厭いやだ。他働的に、周囲から余儀なくせられて、窮屈な目に遭いたくはない。最初に旅宿をことわられてから、或る意地の悪い魔女の威力が自分の上に加わっているように、一步一步と不愉快な世界に陥つて来たように思われる。それが厭でならない。

角刈の男が火鉢を持つて上がつて来た。藍色あいろの、嫌に光る釉くすりの掛かった陶器の円火鉢である。跡から十四五の襷たすきを掛けた女の子が、詭さげえた酒肴さけさかなを持つて来た。徳利一本、猪口一つに、腥なまぐさそうな青肴あおざかなの切身が一皿添えてある。女の子はこの品々を載せた盆まくらもとを枕まくらもと許もとに置いて、珍らしそうに純一の蹙しかめた顔を覗いて見て、黙つて降りて行つた。男は懷から帳面を出して、矢立の筆を手につけて、「お名前を」と云つた。純一は東京の宿所と名前とを言つたが、純の字が分からないので、とうとう自分で書いて遣つた。

純一はどうして寝ようかと考えた。眠たくはないが、疲労と不愉快とで、頭の心しんが痛む。とにかく横にだけはなりたい。そこで袴はかまを脱いで、括り枕の上にそれを巻いた。それから駱駝の膝掛を二つに折って、その二枚の間に夜着の領えりの処を挟むようにして被せた。こうすれば顔や手だけは不潔な物に障らずに済む。

純一は革包を枕許に持つて来て置いた。それから徳利を攫つかんで、燗酒かんざけを一口ぐいと飲んで、インバネスを着たまま、足袋を穿はいたまま、被せた膝掛のいざらないように、そつと夜着の領を持つて、ごろりと寝た。暫くは顔がほてつて来て、ひどく動悸どうきがするようであつたが、いつかぐつすり寐ねてしまった。

いくら寐たか分からない。何か物音がすると云うことを、夢ゆめ現うつつの間に覚えていた。

それから話声が聞えた。しかも男と女の話声である。そう思うと同時に純一は目が覚めた。「お名前は」男の声である。それに女が返事をする。愛知県ごおりなんとか郡なんなんとか村何なの何兵衛へいゑの妹何なにと云っているのは、若い女の声である。男は降りて行った。

知らぬ女と二人で、この二階に寝るのだと思うと、純一は不思議なような心持がした。しかし間の悪いのと、気の毒なもので、その方を見ずに、じつとしていた。暫くして女が「もしもし」と云った。慥たしかに自分に言つたのである。想うに女の方では自分の熟睡して

いた処へ来て、目を醒さました様子から、わざと女の方を見ずにいる様子まで、すっかり見て知っているのらしい。純一はなんと云つて好いいか分からないので、黙っていた。女はこう云つた。

「あの東京へ参りますのですが、上りの一番は何時に出ますでしょうか」

純一は強情に女の方を見ずに答えた。「そうですね。僕も知らないのですが、革包の中に旅行案内があるから、起きて見て上げましょうか」

女は短わらいい笑ごえ声を漏した。「いいえ。それでは宜よろしゅうございます。どうせ起して貰うように頼んで置きましたから」

こう云つたきり、女は黙つてしまつた。純一はやはり強情に見ずにいる。女の寐附しづかれないらしい様子で、度々寝返りをする音が聞える。どんな女か見たいとも思つたが、今更見るのは弥いよ間いよが悪いので見ずにいる。そのうちに純一は又寐入しづつた。

朝になつて純一が目を醒さました時には、女はもういなくなつた。こんな家うちで手水ちようずを使う気にもならないので、急いで勘定をして、この家を飛び出した。角刈の男が革包を持つて附ついて来そうにするのをもちとわつた。この家との縁故を、少しも早く絶ちたいように思つたのである。

湯本の朝日橋まで三里の鉄道馬車に身を托して、靄^{もや}をちぎって持て来るような朝風に、洗わずに出た顔を吹かせつつ、松林を穿^{うが}ち、小田原の駅を貫いて進むうちに、悪夢に似た国府津の一夜を、純一の写象は繰り返して見て、同じ間に寝て、詞を交しながら、とうとう姿を見ずにしまった、不思議な女のあったのを、せめてもの記念だと思った。奉公に都へ出る、醜い女であつたかも知れない。それはどうでも好^いい。どんな女とも知らずに落ち合つて、知らずに別れたのを面白く思つたのである。

鉄道馬車を降りてから、純一はわざと坂井夫人のいる福^{ふく}住^{ずみ}を避けて、この柏屋に泊つた。国府津に懲りて拒絶せられはしないかと云う心配もあつたが、余り歓迎しないだけで、小さい部屋を一つ貸してくれた。去就の自由がまだあるのなのと、覺束ない分^い疏^わをしに見るものの、いかなる詭弁^{きべん}的見解を以てしても、その自由の大^{おお}き^きが距離の反比例に加わると思われない。湯を浴びて来て、少し気分が直つたので、革包の中の本や雑誌を、あれかこれかと出しては見たが、どうも真面目に読み初めようと云う落着きを得られなかつた。

福住へ行こうか、行くまいか。これは純一が自分で自分を弄もてあそんでいる仮設の問題である。しかし意識の閥しきいの下では、それはもう疾とづくに解決が附いている。肯定せられている。若もしこの場合に猶なほ問題があるとすれば、それは時間の問題に過ぎないだろう。

そしてその時間を縮めようとしている或る物が存ぞんじている。それは小さい記念の数々で、ふと心に留まった坂井夫人の挙動や、詞ことばと云う程でもない詞である。Un 《アン》 geste

《ジェスト》, un 《アン》 mot 《モオ》 [inarticulé] 《イナルチクユレエ》である。この物は時が立つても消えない。消えないどころではない。次第に璞あらたまから玉が出来るように、記憶の中で淨きよめられて、周囲から浮き上がって、光の強い、力の大きいものになっている。本を読んでいても、そのペエジと目の間に、この記念が投射せられて、今まで辿たどつて来た意味の上に、破り棄てることの出来ない面紗めんしゃを被せる。

この記念を忘れさせてくれる Lethe 《レエテ》の水があるならば、飲みたいとも思つて見る。そうかと思うと、又この記念位のは、そつと棄てずに愛護わがして置いて、我感情の領分に、或る [e'l'e'giacque] 《エレジアック》な要素があるようにしたつて、それがなんの煩はるい累るいをなそうぞと、弁護もして見る。要するに苦悩なるが故に蔑かり除かんと欲し、

甘き苦悩なるが故に割愛を難^{かたん}ずるのである。

純一はこう云う声が自分を嘲^{あざけ}るのを聞かずにはいられなかった。お前は東京からわざわざ箱根へ来たではないか。それがなんで柏屋から福住へ行くのを憚^{はばか}るのだ。これは純一が為めには、随分残酷な声であつた。

昨夜^{ゆうべ}好く寐なかつたからと、純一は必要のない嘘を女中に言つて、午食^{ごしよく}後に床を取らせ、横になつてゐるうちに、つい二時間ばかり寐てしまった。

目を醒まして見ると、一人の女中が火鉢に炭をついでいた。色の蒼^{あおしろ}白^{しろ}い、美しい女である。今まで飯の給仕に來たり、昼寐の床を取りに來たりした女中とはまるで違つて、着物も絹物を着ている。

「あの、新聞を御覧になりますなら、持つて参りましょう」
俯^{うつむ}向^むいた顔を挙げてちよいと見て、羞^{はじ}を含んだような物の言いようをする。

「ああ。持つて來ておくれ」

別に読みたいとも思わずに、唯女の問うに任せて答えたのである。

女はやはり俯向いて、なまめかしい態度をして立つて行つた。

純一が起きて火鉢^{そば}の側へ据わつた処へ、新聞を二三枚持つて來たのは、今立つて行つた

女ではなかった。身なりも悪く、大声で物を言つて、なんの動機もなく、不遠慮に笑う、骨格の逞たくましい、並の女中である。純一はこの家に並の女中の外に、特別な女中の置いてあるのは、特別な用をさせる為めであらうと察したが、それを穿せん鑿さくして見ようとも思わなかつた。

純一は一枚の新聞を手につつて、文芸欄を一ちよつと寸見て、好くも読まずに下に置いた。大村の謂いうクリクに身を置いていない純一が為めには、目蓋めおほいを掛けたように一方に偏した評論は何の価値をも有せない。

それから夕食前に少し散歩をして来ようと思つて、ぶらりと宿屋を出た。石に触れて水の激する早川の岸を歩む。片側町に、宿屋と軒を並べたひきものし匠の店がある。売っているのは名物の湯本細工である。店の上かみさんに、土産を買えと勧められて、何か嵩張かさばらないものをと、楊枝ようじ入れやら、煙草箱やらを、二つ三つ選えり分けていた。

その時何か話して笑いながら、店の前を通り掛かる男女の浴客よくかくがあつた。その女の笑わ声こゝろが耳馴れたように聞えたので、店の上さんが吊銭つりせんの勘定をしている間、おもちゃの独楽こまを手につつて眺めていた純一が、ふと頭を挙げて声の方角を見ると、端はしなく坂井夫人と目を見合せた。

夫人は紺こん飛が白すりのお召めし縮ちりめん緬めんの綿入れの上に、青磁色の鶺鴒うずら縮ちりめん緬めんに三つ紋を縫わせた羽織かきを襲かねて、髪を銀杏いちょう返しに結いつて、真珠の根掛を掛け、黒鼈くろべつこう甲こうに蝶ちよう貝かいを入れ、た櫛くしを挿さしている。純一の目には唯しつとりとした、地味な、しかも媚こびのある姿が映ったのである。

夫人の朗かな笑声は忽ち絶えて、discret《ジスクレエ》な愛あい敬きよう笑わらいが目に湛たえられた。夫人は根岸で別れてからの時間の隔たりにも、東京とこの土地との空間の隔たりにも頓とん着じやくしないらしい、極めて無造作な調子で云った。

「あら。来ていらつしやるのね」

純一は「ええ」と云った積りであつたが、声はいかにも均衡を失った声で、しかも殆ど我耳にさえ聞えない位低かつた。

夫人は足を留めて連れの男を顧みた。四十を越した、巖乗な、肩の廉張かどばつた男である。器械刈にした頭の、筋太な、とげとげしい髪には、霜降りのように白い処が交つていて、顔だけつやつやして血色が好いい。夫人はその男にこう言つた。

「小泉さんと云う、文学をなさる方でございます」それから純一の方に向いて云つた。

「この方は画家の岡村さんですの。やはり福住に泊っていらつしやいます。あなたなぜ福

住へいらつしやらなかったの。わたくしがそう申したじやありませんか」

「つい名前を忘れたもんですから、柏屋にしました」

「まあ忘れっぽくていらつしやることね。晩にお遊びにいらつしやいましな」言い棄てて、

夫人が歩き出すと、それまで二王立におうだちに立つて、巨人が小人島こびとじまの人間を見るように、純

一を見ていた岡村画伯は、「晩に來給え」と、訝響こたまのように同じ事を言つて、夫人の跡に

続いた。

純一は暫く二人を見送つていた。その間店の上さんが吊銭を手に載せて、板縁いたえんに膝ひざを

衝いて待つていたのである。純一はそれに氣が附いて、小さい銀貨に大きい銅貨の交つた

のを慌てて受け取つて、鱷皮わにがわの蝦蟇口がまぐちにしまつて店を出た。

対岸に茂つている木々は、Camaval 《カルナヴァル》に仮装をして、脚ばかり出した群むれ

のように、いつの間にか夕霧に包まれてしまつて駅路えきろの所々にはぼつりぼつりと、水力電

氣の明りが附き始めた。

純一はぼんやりして宿屋の方へ歩いている。或る分析し難い不愉快と、忘れていたのを

急に思い出したような寂しさとが、頭を一ぱいに填うずめている。そしてその不愉快が嫉妬しつとで

はないと云うことを、純一の意識は証明しようとするが、それがなかなかむずかしい。な

ぜと云うに、あの湯本細工の店で邂逅した時、もし坂井夫人が一人であつたなら、この不愉快はあるまいと思うからである。純一の考はざつとこうである。とにかくあの岡村という大男の存在が、己を刺戟したには相違ない。画家の岡村と云えば、四条派の画で名高い大家だということを、己も聞いている。どんな性質の人は知らない。それを強いて知りたくもない。唯あの二人を並べて見たとき、なんだか夫婦のようだと思ったのが、慥かに己の感情を害した。そう思ったのは、決して僻目ではない。知らぬ人の冷澹な目で見ても、同じように見えるに違いない。早い話が、あの店の上さんだって、若しあの二人に對して物を言うことになったら、旦那様奥様と云つただろう。己は何もあんな男を羨みなんかしない。あの男の地位に身を置きたくはない。しかし癪に障る奴だ。こんな風に岡村を憎む念が起つて、それと同時に坂井夫人に對しては暗黒な、しかも鋭い不平を感じる。不義理な、約束に背いた女だとさえ云いたい。しかし夫人は己にどんな義理があるか。夫人の守らなくてはならない約束はどんな約束であるか。この問には答うべき詞が一つもないのである。どうしてもこの感じは嫉妬にまぎらわしいようである。

そしてこの感じに寂しさが伴っている。厭な、厭な寂しさである。大村に別れた後に、東京で寂しいと思つたのなんぞは、まるで比べものにならない。小さい時、小学校で友達

が数人首を集めて、何か呷やき合あつていて、己がひとり遠くからそれを望見したとき、稍ややこれに似た寂しさを感じたことがある。己はあの時十四位であつた。丁度同じ学校に、一つ二つ年上で瘦やせぎすの、背の高い、お勝という女生徒がいた。それが己を憎んで、動やもすればこう云う境地に己を置いたのである。いつも首を集めて呷き合う群の真中ちようちようまげには蝶々鬚だてだけ外の子供より高いお勝がいて、折々己の方を顧みる。何か非常な事を己に隠して遣つてゐるらしい。その癖群に加わつてゐる子供の一人に、跡からその時の話を聞いて見れば、なんでもない、己に聞せても差さ支しかえない事である。己はその度毎に、お勝の技倆ぎりように敬服して、好くも外の子供を糾合してあんなcomplot《コムプロオ》の影を幻出することだと思つた。今己がこの事を思い出したのは、寂しさの感じから思い出したのであるが、つくづく考えて見れば、あの時の感じも寂しさばかりではなかつたらしい。お勝は嫉妬ほの萌芽うがを己の心に植え附けたのではあるまいか。

純一はこんな事を考えながら歩いていて、あぶなく柏屋の門かどぐち口を通り過ぎようとした。幸に内から声を掛けられたので、気が附いて戸口を這入つて、腰を掛けたり立ったりした二三人の男が、帳場の番頭と話をしている、物騒ものさわがしい店を通り抜けて、自分の部屋の障子を明けた。女中がひとり背後うしろから駈け抜けて、電燈の鍵かぎを振ねじつた。

*

*

*

夕食をしまつて、純一は昼間見なかつた分の新聞を取り上げて、引つ繰り返して見た。ふと「色糸」と題した六号活字の欄に、女の写真が出ているのを見ると、その首の下に横に「栄屋おちやら」と書いてあつた。印刷インクがぼつてりとにじんでいて、半分隠れた顔ではあるが、確かに名刺をくれた柳橋の芸者である。

記事はこうである。「栄屋の抱えおちやら（十六）は半玉の時から男狂いの噂が高かつたが、役者は宇佐衛門が鼻^{ひいき}で性^{しょうこり}懲^{しやうこり}のない人形喰^{にんぎようくい}である。但し慾気のないのが取柄とは、外^{ほか}からの側面観で、同家のお辰姉^{たつね}えさんの強意見^{こわいけん}は、動^やともすれば折檻^{せつかん}賽^{まが}いの手荒い仕打になるのである。まさか江戸時代の柳橋芸者の遺風を慕うのでもあるまいが、昨今松さんという絆^{はんてんき}纏着^にの兄いさんに熱くなつて、お辰姉えさんの大目玉を喰^くい、しよげ返つているとはお氣の毒」

読んでしまつて純一は覚え^{ほほえ}ず微笑^{ほほえ}んだ。縦^{たと}い性欲^{せいよく}の爲めにもせよ、利を図^とることを忘れることの出来る女であつたと云うのが、殆ど嘉言^{かげん}善行^{ぜんこう}を見聞^{みきこ}したような慰めを、自分に与えてくれるのである。それは人形喰^{にんぎようくい}という詞^{ことば}が、頗^{すこぶ}る純一の自ら喜ぶ心を満足せしめるのである。若い心は弾力に富んでいる。どんな不愉快な事があつて、自己を抑圧して

いても、聊かの弛みが生ずるや否や、弾力は待ち構えていたようにそれを機として、無意識に元に帰そうとする。純一はおちやらの記事を見て、少し気分を恢復した。

丁度そこへ女中が来て、福住から来た使の口上を取り次いだ。お暇ならお遊びにいらつしやいと、坂井さんが仰やつたと云うのである。純一は躊躇せず、只今伺いますと云えと答えた。想うに純一は到底この招きに応ぜずにしまうことは出来なかつたであろう。なぜと云うに、縦しや強ねてことわつて見たい情はあるとしても、卑怯らしく退嬰の態度を見せることが、残念になるに極まつているからである。しかし少しも逡巡することなしに、承諾の返事をさせたのは、色系のおちやらが坂井夫人の為に緩頰の勞を取つたのだと云つても好い。

純一は直ぐに福住へ行つた。

女中に案内せられて、万翠楼の三階の下を通り抜けて、奥の平家立ての座敷に近づく、と、電燈が明るく障子に差して、内からは笑聲が聞えている。Basse 《バス》の嘶くような笑声である。岡村だなど思うと同時に、このまま引き返してしまいたいような反感が本能的に起つて来る。

箱根に於ける坂井夫人。これは純一の空想に度々書き出されたものであつた。鬱蒼た

る千年の老木の間に、温泉宿の離れ座敷がある。根岸の家の居間ですら、騒がしい都会の趣はないのであるが、ここは又全く人間に遠ざかった境^{さかい}で、その静寂^{うち}の中に Ondine 《オンジヌ》のような美人を見出すだろうと思った。それに純一は今^{いま}先^まず Faune 《フオオヌ》の笑声を聞かなくてはならないのである。

廊下に出迎えた女を見れば、根岸で見たしづ枝である。

「お待ちなさつていらつしやいますから、どうぞこちらへ」ここで客の受取り渡しがある。前哨線が張つてあるようなものと、純一は思った。そして何物が掩護^{えんご}せられてあるのか。その神聖なる場所は、岡村という男との差向いの場所ではないか。根岸で嬉しく思ったことを、ここでは直ぐに厭に思う。地を易^かうれば皆然^{しか}りである。

次の間に入つて跪^{ひざまず}いたしづ枝が、「小泉様がお出でになりました」と案内をして、徐^{しず}かに隔ての障子を開けた。

「さあ、こつちへ這^{はい}入り給え。奥さんがお待兼だ」声を掛けたのは岡村である。さすがに主客の行儀は好^いい。手あぶりは別々に置かれて、茶と菓子とが出る。しかし奥さんの傍^{そば}にある置炬燵^{おきこたつ}は、又純一に不快な感じを起させた。

しづ枝に茶を入れ換えることを命じて置いて、奥さんは純一の顔をじつと見た。

「あなた、いつから来ていらつしやいますの」

「まだ来たばかりです。来ると直ぐあなたにお目に掛かったのです」

「柏屋には別品がいるでしょう」と、岡村が詞を挟んだ。

「どうですか。まだ来たばかりですから、僕には分かりません」

「そんな事じゃあ困るじゃないか。我輩なんぞは宿屋に着いて第一に着眼するのはそれだね」

声と云い、詞と云い、だいぶ晩酌が利いているらしい。

「世間の人が皆岡村さんのようでは大変ですわね」奥さんは純一の顔を見て、庇護するように云った。

岡村はなかなか黙っていない。「いや、奥さん。そうではありませんよ。文学者なんというものは、画かきよりは盛んな事を遣るのです」これを冒頭に、岡村の名を知っている、若い文学者の噂が出る。近頃そろそろ出来掛かった文芸界の『Bohemiens』《ボエミアン》が、岡村の交際している待合のお上だの、芸者だのの目に、いかに映じているかと云うことを聞くに過ぎない。次いで話は作品の上に及んで、「蒲団」がどうの、「煤烟」がどうのと云うことになる。意外に文学通だと思つて、純一が聞いて見ると、どれも読んで

はいないのであつた。

純一にはこの席にすることが面白くない。しかしおとなしい性^{たち}なので厭な顔をしてはならないと思つて、努めて調子を合せている。その間にも純一はこう思つた。世間に起る、新しい文芸に対する非難と云うものは、大抵この岡村のような人が言い広めるのだろう。作品を自分で読んで見て、かれこれ云うのではあるまい。そうして見れば、作品そのものが社会の排斥を招くのではなくて、クリク同士の攻撃的批評に、社会は雷同するのである。発売禁止の処分だけは、役人が忤^{あば}いて申し立てるのだが、政府が自然主義とか個人主義とか云つて、文芸に干渉を試みるようになるのは、確かに攻撃的批評の齎^{もたら}した結果である。文士は自己の建築したものの下に、坑道^{うが}を穿つて、基礎^{あやう}を危くしていると云つても好い。蒲団や煤烟には、無論事実問題も伴つていた。しかし煤烟の種になっている事実こそは、稍^{がい}外^{かん}間へ暴露した行動を見たのであるが、蒲団やその外の事実問題は、大抵皆文士の間で起したので、所謂^{いわゆる}六号文学のすっぱ抜きに根ざしているではないか。

しず枝が茶を入れ換えて、主客三人の茶碗に注いで置いて、次へ下がった跡で、奥さんが云つた。

「小泉さん。あなた余りおとなしくしていらつしやるから、岡村さんが勝手な事ばかり仰

やいますわ。あなたの方でも、画かきの悪口でも言ってお上げなされると好いわ」

「まあ僕は廃よしましょう」純一は笑わらいを含んでこう云った。しかしこの席に這入ってから、動やもすれば奥さんの自分を庇護してくれるのが、次第に不愉快に感ぜられて来た。それは他人あしらいにせられると思うからである。その反面には、奥さんが岡村に対して、遠慮することを須もちいない程の親しさを示しているという意味がある。極言すれば、夫婦気取りでいるとも云いたいのである。

岡村が純一に、何か箱根で書く積りかと問うたので、純一はありのままに、そんな企ては持つていないと云った。その時奥さんが「小泉さんなんぞはまだお若いのですから、そんなにお急ぎなさらなくても」と云ったが、これも庇護の詞になったのである。純一は稍反抗したいような気になって、「先生は何かおかきですか」と問い返した。そうすると奥さんが、岡村は今年の夏万翠楼の襖ふすまや衝ついたて立を大抵かいてしまったのだと云った。それが又岡村との親しさを示すと同時に、岡村と奥さんとが夏も福住で一しよにいたのではないかと云う問題が、端なく純一の心に浮んだ。

純一はそれを慥たしかめたいような心持がしたが、そんな問を発するのは、人に言いたくない事を言わせるに当るように思われるので、気を兼ねて詞をそらした。

「箱根は夏の方が好いでしょね」

「そうさ」と云つて、岡村は無邪気に暫く考える様子であつた。そして何か思い出したように、顴骨^{かんこつ}の張つた大きい顔に笑^{えみ}を湛えて、詞を続^ついだ。「いや。夏が好くもないね。今時分は靄^{もや}が一ぱい立ち籠^こめて、明りを覗^{ねら}つて虫が飛んで来て為^{しやう}様がないからね。それ、あの兜^{かぶと}虫^{むし}のような奴さ。東京でも子供がかなぶんぶんと云つて、掴^{つか}まえておもちゃにするのだ。あいつが来るのだね」

奥さんが傍^{そば}から云つた。「それは本当に大変でございますの。障子を締めると、飛んで来て、ばたばた紙にぶつ附^{ておけ}かるでしょう。そしておっこつて、廊下をがさがさ這い廻るのを、男達が撈^{さら}つて、手桶^{ておけ}の底に水を入れたのを持つて来て、その中へ叩き込んで運^いで行きますの」

純一は聞きながら、二人は一しよにそう云う事に出逢つたと云うのだろうか、それとも岡村も奥さんも偶然同じ箱根の夏を知っているに過ぎないのだろうか、まだ幾分の疑^{そん}いを存^{ぞん}じている。

岡村は少し興に乗じて来た。「随分かなぶんぶんには責められたね。しかし吾輩^{わがはい}は復讐^{ふくし}を考^{くわ}えている。あいつの羽を切つて、そいつに厚紙^{こうし}で拵^{こしら}えた車を、磐石^{ばんじやく}糊^{のり}という

奴で張り附けて曳^ひかせると、いつまでも生きていて曳^ひくからね。吾輩は画かきを廃して、辻に出てかなぶんぶんの車を曳^ひく奴を、子供に売って遣ろうかと思っている」こう云つて、独りで笑つた。例の嘶^いくように。

「磐石糊というのは、どんな物でございますの」と、奥さんが問うた。

「磐石糊ですか。町で幾らも売つていませう」

「わたくしあなたが上野の広小路あたりへ立つて、かなぶんぶんを売つていらつしやる処が拝見しとうございますわ」

「きつと盛んに売れますよ。三越なんぞで児童博覧会だのなんのと云つて、いろんなおもちゃを陳列して見せていますが、まだ生きたおもちゃと云うのはないのですからね」

「直ぐに人が真似をいたしはしませんでしょうか。戦争の跡に出来たロシア麵包^{パン}のように」

「吾輩専売にします」

「生きた物の専売がございましょうか」

「さあ、そこまでは吾輩まだ考えませんでした」岡村は又笑つた。そして言い足した。

「とにかくうるさい奴ですよ。大抵^{かがり}箒に飛び込んで、焼け死んだ跡が、あれ程遣つて来るのですからね」

「ほんとにあの簪は美しゅうございましたわね」

純一ははつと思つた。この「美しゅうございました」と云つた過去の語法は、二人が一しよに簪を見たのだと云うことを [irrefutable] 《イルレフユタアブル》に証明しているのである。情況から判断すれば、二人が夏を一しよに暮らしたと云うことは、もう疾とづくに遺憾なく慥められているのであるが、純一はそれを問わないで、何等かの方法を以て、直接に知りたいたと、悟性を鋭く働かせて、對話に注意していたのであつた。

純一の不快な心持は、急劇に増長して来た。そしてこの席にいる自分が車の第三輪ではあるまいかという疑いが起つて、それが間断なく自分を刺戟して、とうとう席に安んぜざらしむるに至つた。

「僕は今夜はもうお暇いしよまをします」純一は激した心を声にあらわすまいと努めてこう云つて、用ありげに時計を出して見ながら座を起つた。実は時計の鍼はりはどこにあるか、目にも留のまらず意識にも上のらなかつたのである。

二十四

福住の戸口を足早に出て来た純一は、外へ出ると歩度を緩めて、万翠楼の外囲いに沿うて廻つて、坂井夫人のいる座敷の前に立ち留まつた。この棟むねだけ石垣を高く積み上げて、中二階のように立ててある。まだ雨戸が締めてないので、燈火ともしびの光が障子にさしている。純一は暫く障子を見詰めていたが、電燈の位置が人の据わっている処より、障子の方へ近いと見えて、人の影は映っていないかつた。

暇いとま乞こをして出る時には、そんな事を考える余裕はなかつたが、今になって思えば、

自分が座敷を立つ時、岡村も一しよに暇乞いとまこをすべきではなかつただろうか。それとも子供のような自分なので、それ程の遠慮もしなかつたのか。それとも自分を見くびる見くびらないに拘からず、岡村は夫人と遠慮なんぞをする必要の全く無い交際まじをしているのか。純一はこんな事を気に掛けて、明りのさしている障子を目守まもっている。今にも岡村の席たを起つて帰る影が映りはしないかと待つのである。そして純一の為めには、それが気に掛かり、それが待たれるのが腹が立つ。恋人でもなんでもない夫人ではないか。その夫人の部屋に岡村がいつまでいようと好いいではないか。それをなんで自分が気にするのか。なんと云う腑甲斐ふがない事だろうと思うと、憤慨たに堪えない。

純一は暫く立っていたが、誰たれに恥じるともなく、うしろめたいような気がして来たので、

ぶらぶら歩き出した。夜に入つて一際高くなつた、早川の水の音が、純一が頭の中の乱れた情緒の伴奏をして、昼間感じたよりは強い寂しさが、虚に乗ずるように襲つて来る。

柏屋に帰つた。戸口を這入る時から聞えていた三味線が、生憎純一が部屋の上で鳴っている。女中が来て、「おやかましゅうございましょう」と挨拶をする。どんな客かと問えば、名古屋から折々見える人だと云う。来たのは無論並の女中である。特別な女中は定めて二階の客をもてなしているのである。

二階はなかなか賑やかである。わざわざ大晦日の夜を騒ぎ明かす積りで来たのかも知れない。三味線の音が絶えずする。女が笑う。年増らしい女の声で、こんな呪文のようなもの唱える。「べろべろの神さんは、正直な神さんで、おさきの方へお向きやれ。どこへ盃さあしましょ。ここ等か、ここ等か」この呪文は繰り返して繰り返して唱えられる。一度唱える毎に、誰かが杯を受けるのである。

純一は取つてある床の中に潜り込んで、じつとしている。枕に触れて、何物をか促し立てるように、頸の動脈が響くので、それを避けようと思つて寝返りをする。その脈がどうしても響く。動悸が高まっているのであろう。それさえあるに、べろべろの神さんがしゅ

うねく崇^たつて、呪文はいよいよ高く唱えられるのである。

純一は何事をも忘れて寐^ねようと思つたが、とても寐附かれそうにはない。過度に緊張した神経が、どんな微細な刺戟にも異様に感^{かん}応^{おう}する。それを意識が丁度局外に立つて観察している人の意見のように、「こんな頭に今物を考えさせたつて駄目だ、どうにかして寐かす事だ」と云つて促している。さて意識の提議する所に依ると、純一たるものはこの際行ふべき或る事を決定して、それを段落にして、無理にも氣を落ち着けて寐るに若^しくはない。その或る事は巧^{こう}緻^ちでなくても好^いい。頗る粗大な、脳髓に余計な要求をしない事柄で好^いい。却^{かえ}て愈^い々^い粗大なだけ愈々適當であるかも知れない。

例^{たと}之^えば箱根を去るなんぞはどうだろう。それが好^いい。それなら断然たる処置であつて、その癰^{おん}温^{そん}存^{ぞん}的^{てき}工夫を要する今の頭を苦めなくて済む。そして種々の不愉快を伝達している幾条の電線が一時に切断せられてしまうのである。

箱根を去るのが実に名案である。これに限る。そうすれば、あの夫人に見せ附けて遣^やることが出来る。己だつてそう馬鹿にせられてばかりはいないということを、見せ附けて遣^やることが出来る。いやいや。そんな事は考えなくても好^いい。夫人がなんと思おうと構うことは無い。とにかく箱根を去る。そしてこれを機会にして、根岸との交通を断^たつてしまう。

あの質しちのようになつてゐるラシイヌの集しゅうを小包で送り返して遣る。早く谷中へ歸つて、あれを郵便に出してしまいたい。そうしたらさぞさつぱりするだろう。

こう思うと、純一の心は濁水うちに明み礬ようばんを入れたように、思いの外早く澄んで來た。その濁りと云うものの中には、種々の籠こみ入つた、分析し難い物があるのを、かれこれの別なく、引きくるめて沈澱ちんでんさせてしまつたのである。これは夜の意識が仮初かりそめに到達した安心さかいの境ではあるが、この境が幸に黒甜郷こくてんきやうの近所になつていたと見えて、べろべろの神さんの相變らず跳梁ちやうりやうしているにも拘らず、純一は頭を夜着の中に埋めて、寐入うすつてしまつた。

翌朝よくあさ純一は早く起きる積りでもいなかつたが、夜明よあけ近く物音がして、人の話声が聞えたので、目を醒さまして便所へ行つた。そうすると廊下で早立ちの客に逢つた。洋服を着た、どちらも四十しじゅう恰好がっこうの二人である。荷物を玄関に運ぶ宿の男を促しながら、外套がいとうの衿えりの底に縮めた首を傾け合つて、忙せわしそうに話をしてゐる。極めて真面目で、極めて窮屈らしい態度である。純一は、なぜゆうべのような馬鹿げた騒ぎをするのだと云つて見たい位であつた。

便所からの歸りに、ふと湯に入ろうかと思つて、共同浴室を覗のぞいて見ると、誰たれか一人這

入っている。蒸気が立ち籠めて、好くは見えないが、湯壺の側に蹲つくばっている人の姿が女らしかつた。そしてその姿が、人のけはいに驚かされて、急いで上がろうとするらしく思われた。純一は罪を犯したような気がして、そつとその場を逃げて自分の部屋に帰った。

部屋には帰って見たが、早立ちの客の外は、まだ寐静まっている時なので、火鉢に火も入れてない。純一は又床に這入って、強いて寐ようとも思わずに、横になっていた。

目がはつきり冴さえて、もう寐られそうにもない。そしてゆうべ床に這入ってから考えた事が、糸で手繰り寄せられるように、次第に細かに心に浮んで来る。

夜疲れた後のちに考えた事は、翌朝になつて見れば、役に立たないと云う経験は、純一もこれまでしているのだが、ゆうべの決心は今頭が直つてから繰り返して見ても、やはり価値を減ぜないようである。啻ただに価値を減ぜないばかりでは無い。明かな目で見れば見る程、大胆で、[heroique] 《エロイック》な処が現れて来るかとさえ思われる。今から溯さかのつて考えて見れば、ゆうべは頭が鈍くなつていたので、左顧右眄さくゆうへんすることが少く、種々な思慮に掣せいちゆう肘しゆうせられずに、却つて早くあんな決心に到着したかとも推すいせられるのである。

純一はきようきつと実行しようと自ら誓つた。そして心の中にも体の中にも、これに邪魔をしそうな或る物が動き出さないのを見て、最終の勝利を贏かち得たように思った。しか

しこれは一の感情が力強く浮き出せば、他の感情が暫く影を斂めるのであった。後になつてから、純一は幾度か似寄つた誘惑に遭つて、似寄つた奮闘を繰り返して、生物学上の出来事が潮の差引のように往来するものと云うことを、次第に切実に覺知して、太田錦城ようと云う漢学の先生が、「天の風雨の如し」と原始的な譬喩ひゆを下したのを面白く思つた。

さてきよう実行すると極めて、心が落ち着くと共に、潜っている温泉宿の布団の中へ、追憶やら感想やら希望やら過現かげん末三つの世界から、いろいろな客が音信おしずれて来る。国を立つて東京へ出てから、まだ二箇月余りを閲けみしたばかりではある。しかし東京に出たら、こゝうしようと、国で思つていた事は、悉く泡沫ことごとほうまつの如くに消えて、積極的にはなんのし出来でかしたわざも無い。自分だけの力で為し得ない事を、人にたよつてしようと云うのは、おおかた空頼そらたのめになるものと見える。これに反して思い掛けなく接触した人から、種々な刺戟を受けて、蜜蜂みつばちがどの花からも、変つた露を吸うように、内に何物かを蓄えた。その花から花へと飛び渡っている間、国にいた時とは違つて、己は製作上の拙つたない試みをせずにいた。これが却て己の為めには薬になつてはいすまいか。今何か書いて見たら、書けるよになつてゐるかも知れない。国にいた時、碁を打つ友達がいた。或る会の席でその男が、打たずにゐる間に棋ごが上がると云う経験談をすると、教員の山村さんが、それは意識しきいの闕

の下で、棋の稽古をしていたのだと云った事がある。今書いたら書けるかも知れない。そう思うとこの家で、どこかの静かな部屋を借りて、久し振に少し書き始めて見たいものだ。いや。そうだっけ。それでは切角のあの実行が出来ない。ええ糞くそ。坂井の奥さんの岡村だのと云う奴が厄介だな。大村の言草ではないが、Der《デル》Teufel《トイフェル》hol e《ホオレ》sie《ジイ》だ。好いわ。早く東京へ帰って書こう。

純一は夜着をはね退けて、起きて敷布団の上に胡坐あぐらを搔かいて、火鉢に火のないのを忘れて、考えている。いよいよ書こうと思い立つと共に、現在の自分の周囲も、過去に自分の閱して来た事も、総て価値を失ってしまつて、咫尺しせきの間の福住の離れに、美しい肉の塊よこたが横よこたわっているのがなんだと云うような気がするのである。紅くれないが両の頬ちように潮うしして、大きい目かがやが耀かがやいている。純一はこれまで物を書き出す時、興奮を感じたことは度々あつたが、今のような、夕立の前の雲が電気に飽きているような、気分きぶんの充実を感じたことはない。

純一が書こうと思っている物は、現今の流行とは少し方角を異にしている。なぜと云うに、その sujet《シュジェエ》は国の亡くなったお祖母ばああさんが話して聞せた伝説であるからである。この伝説を書こうと云うことは、これまでも度々企てた。形式も種々に考えて、韻文にしようとしたり、散文にしようとしたり、叙事的に Flaubert《フロオベル》

の三つの物語の中の或る物のような体裁を学ぼうと思ったこともあり、Maeterlinck《マアテルリンク》の短い脚本を藍本にしようにと思ったこともある。東京へ出る少し前にした、最後の試みは二三十枚書き掛けたままで、谷中にある革包の底に這入っている。あれはその頃知らず識らずの間に、所謂自然派小説の影響を受けている最中であつたので、初めに狙って書き出した〔Archaisme〕《アルシャイズム》が、意味の上からも、詞のことば上からも途中で邪魔になつて来たのであつた。こん度は現代語で、現代人の微細な觀察を書いて、そして古い伝説の味を傷けないようにして見せようと、純一は工夫しているのである。

こんな事を思つて、暫く前から勝手の方でがたがた物音のしているのを、気にも留めずにいると、天井の真中に手繰り上げてある電燈が突然消えた。それと同時に、もう外は明るくなつていると見えて、欄間から青白い光が幾筋かの細かい線になつてさし込んでゐる。女中が十能じゆうのうを持つて這入つて来て、「おや」と云つた。どうしたわけか、綺麗きれな分の女中が来たのである。「つい存じませんのでございますから」と云いながら、火鉢に火をい活けている。

ろくろく寝る隙ひまもなかったと思われるのに、女は綺麗に髪を撫なで附けて、化粧をしてい

る。火を活けるのがだいぶ手間が取れる。それに無口な性たちでもあるか、黙っている。

純一は義務として何か言わなくてはならないような気がした。

「ねむたかないか」と云つて見た。

「いいえ」と女の答えた頃には、純一はまずい、sentimental 《サンチマンタル》 な事を言つたように感じて、後悔している。「おやかましかったでしょう」と、女が反問した。

「なに。好く寐ふられた」と、純一は努めて無造作むぞうさに云つた。

障子の外では、がらがらと雨戸を繰り明ける音がし出した。女は丁度火を活けてしまつて、火鉢の縁ふちを拭いていたが、その手を停めて云つた。

「あのお雑煮を上がりますでしょうね」

「ああ、そうか。元日だったな。そんなら顔でも洗つて来よう」

純一は楊枝ようじを使って顔を洗う間、綺麗な女中の事を思っていた。あの女はどこか柔かみのある、気に入った女だ。立つ時、特別に心附けを遣ろうかしら。いや、廃よそう。そうしては、なんだか意味があるようで可笑おかしい。こんな事を思つたのである。

部屋に返るとき、入口いりぐちで逢つたのは並の女中であつた。夜具を片附けてくれたのであらう。

雑煮のお給仕も並のであった。その女中に九時八分の急行に間に合うように、国府津へ行くのだと云つて勘定を言い附けると、仰山らしく驚いて、「あら、それでは御養生にもなんにもなりませんわ」と云つた。

「でも己より早く帰つた人もあるじゃないか」

「それは違いますわ」

「どう違う」

「あれは騒ぎにいらつしやる方ですもの」

「なる程。騒ぐことは己には出来ないなあ」

雑煮の代りを取りに立つとき、女中は本当に立つのかと念を押した。そして純一がうなずくを見て、ひとりごと 独言のようにつぶやいた。

「お絹さんがきつとびつくりするわ」

「おい」と純一は呼び留めた。「お絹さんというのは誰だれだい」

「そら、けさこちらへお火を入れにまいつたでしょう。きのうあなたがお着きになると、あれが直ぐにそう云いましたわ。あの方は本を沢山持つていらつしやつたから、きつとお休みの間勉強をしにいらつしやつたのだつて」

こう云つて置いて、女中は通い盆を持つて廊下へ出た。

純一はお絹と云う名が、自分の想像したあの女の性質に相応しているように思つて、一種の満足を覚えた。そしてそのお絹が忙しい中で自分を観察してくれたのを感謝すると同時に、自分があの女の生活を余り卑しく考えたのを悔いた。

雑煮の代りが来た。給仕の女中から、お絹の事を今少し精しく聞き出すことは、むずかしくもなさそうであつたが、純一は遠慮して問わなかつた。意味があつて問うように思われるのがつらかつたのである。

純一は取り散らしたものを革包の中に入れながら、昨夜よりも今朝起きた時よりも、だいぶ冷かになつた心で、自己を反省し出した。東京へ帰ろうと云う決心を飜そうとは思わない。又それを飜す必要をも見出さない。帰つて書いて見ようと思ふ意志も衰えない。しかしその意志の純粹な中へ、極軽い疑惑が、ぬきあし拔足をして来て交る。まじそれはこれまで度々一時の発動に促されて書き出して見ては、挫折してしまつたではないかと云う呟きである。幸な事には、この呟きは意志を麻痺させようとするだけの力のあるものではない。却て製作の欲望を刺戟して、抗抵を増させるかと思われる位である。

これに反して、少しの間に余程変じたのは、坂井夫人に対する感じである。面当てをし

よう、思い知らせようと云うような心持が、ゆうべから始終幾分かこの感じに交つていたが、今明るい昼の光の中で考えて見ると、それは慥たしかに錯あやまつてゐる。我ながらなんと云うけちな事を考えたものだろう。まるで奴隷のような料簡りようけんだ。この様子では己はまだ大いに性格上の修養をしなくてはならない。それにあの坂井の奥さんがなんで己が立つたと云つて、悔恨や苦痛を感じるものか。八年前に死んだ詩人 Albert 《アルベエル》 Samain 《サメン》 は Xanthis 《クサンチス》 と云う女人形の恋を書いていた。恋人の中には plat onique 《プラトニック》 な公爵がいる。芸術家風の熱情のある青年音楽家がいる。それでもあの女人形を満足させるには、力士めいた銅人形がいなくてはならなかった。岡村は恐らくは坂井の奥さんの銅人形であろう。己はなんだ。青年音楽家程の熱情をも、あの奥さんに捧たてげてはいない。なんの取柄があるのだ。己が箱根を去ったからと云つて、あの奥さんは小使を入れた蝦蟇がまぐち口を落した程にも思つてはいまい。そこでその奥さんに対して、己は不平がる権利がありそうにはない。一体己の不平はなんだ。あの奥さんを失う悲かなしみから出た不平ではない。自己を愛する心が傷つけられた不平に過ぎない。大村が恩もなく怨うらみもなく別れた女の話をしたつけ。場合は違うが、己も今恩もなく怨もなく別れれば好いいのだ。ああ、しかしなんと思つて見ても寂しいことは寂しい。どうも自分の身の周囲に空虚が出

来て来るような気がしてならない。好いわ。この寂しさの中から作品が生れないにも限らない。

帳場の男が勘定を持って来た。瀬戸の話に、湯治場やなんぞでは、書生さんと云うと、一人前の客としては扱わないと云ったが、この男は格別失敬な事も言わなかった。純一は書生社会の名誉を重んじて茶代を気張った。それからお絹に多く遣りたいために、外の女中にも並より多く祝儀を遣った。

宿泊料、茶代、祝儀それぞれの請取うけとりを持って来た女中が、車の支度が出来ていると知らせた。純一は革包に錠を卸して立ち上がった。そこへお上さんが挨拶に出た。敷居の外に手を衝いて物を言う、その態度がいかに恭うやうやしい。

純一が立つて出ると、女中が革包を持って跡から来た。廊下の広い所に、女中が集まって、何か呟き合っていたのが、皆純一に暇乞をした。お絹は背後の方にしよんぼり立っていて、一人遅れて辞儀をした。

車に乗って外へ出て見ると、元日の空は晴れて、湯坂山には靄もやが掛かっている。きょうも格別寒くはない。

朝日橋に掛かる前に振り返って、坂井の奥さんの泊っている福住の座敷を見たら、障子

が皆締まって、中はひっそりしていた。

鷗外云。小説「青年」は一応これで終とする。書こうと企てた事の一小部分しかまだ書かず、物語の上の日数が六七十日になったに過ぎない。霜が降り始める頃の事を発端に書いてから、やつと雪もろくに降らない冬の時候まで漕ぎ附けたのである。それだけの事を書いているうちに、いつの間にか二年立つた。とにかく一応これで終とする。

青空文庫情報

底本：「青年」新潮文庫、新潮社

1948（昭和23）年12月15日発行

1985（昭和60）年11月15日66刷改版

1998（平成10）年2月15日85刷

入力：砂場清隆

校正：藤田禎宏

2000年12月22日公開

2013年7月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青年

森鷗外

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>